

# 古墳と古墳群のトポス

## —盟主的首長墓の〈空間構制〉試論—

犬木 努

### 1. はじめに

本稿は、2016年に提示した拙論（犬木2016a：以下、前稿と呼称）の続考をなすものである。前稿では、近年の調査で検出された形象埴輪の配置状況を基軸として、埴輪空間の意味について若干の考察を行った。そこでは、「亡き首長」の霊威の「所在」ないし「存在」は、それ自体では形象化することが不可能であるため、「亡き首長」の外側にあるものやそれに付随するもの、あるいは「亡き首長」を結節点とする諸関係を、埴輪配置として物象化／実体化することにより、〈中心に存在するもの〉を代替的・間接的・暗示的に表現する、というのが本稿でいう「埴輪の論理」である（同前：1頁）と記し、「全ての埴輪配置は、〈首長〉を物象化／実体化する装置である」という私見を提示した（同前）。詳細については前稿を参照されたい。

「埴輪の本義」について、上記のような理解に立つならば、「古墳の本義」については、如何なる洞察が可能であろうか。「古墳の本義」と無関係に埴輪が樹立・配列されていたとは到底考えられないからである。

本稿では、前稿を踏まえつつ、「古墳の本義」に接近する回路の一つとして、畿内中枢部における「盟主的首長墓」を含む大型前方円墳の〈空間構制〉<sup>(1)</sup>について検討する。宮崎県・西都原古墳群における〈空間構制〉を検討した際に（犬木2016b・2019ほか）、古市古墳群や百舌鳥古墳群の〈空間構制〉についての検討作業もほぼ終えていたが、その詳細を述べるのは本稿が初めてである。なお本稿では、東国の事例として、埼玉古墳群における前方後円墳の〈空間構制〉についても併せて検討する。

古墳時代前期から後期にかけて、全長200mを超えるような大型前方後円墳が、大和盆地東南部から北部、さらには大阪平野中部に順次築造されていることは夙に知られている。このような大型前方後円墳の被葬者については、倭王権の〈代表者／体现者／具現者〉としての「盟主的首長」の可能性が指摘されており、本稿では「盟主的首長墓」ないし「盟主墓」と呼称する<sup>(2)</sup>。

### 2. 大型前方後円墳の研究史（抄）

古墳時代の「盟主的首長墓」と考えられる大型前方後円墳の多くは、明治期以来、宮内庁（省）によって「陵墓」として長らく管理されてきた。埋葬施設や副葬品の内容も断片的にしか知られておらず、古墳時代研究者の多くは、大型前方後円墳の「年代決定」に苦慮してきたが、1960年代になると陵墓図が入手しやすくなったこともあり（末永1961など）、前方後円墳の「墳丘形態」の分類と比較検討によって、そこに突破口を見出そうとする研究者も現れる（甘粕1965、櫃本1967b、上田1969、梶1969など）。

1978年に川西宏幸による円筒埴輪編年が提示されると（川西1978・1979）、「天皇陵」古墳を含む、大型前方後円墳の編年は長足の進歩を遂げることになったが、それ以前においては、「天皇陵」古墳の年代決定を目指して、多くの古墳時代研究者が汎用的な編年方法を絶えず模索しており、「墳丘形態論」がそのような研究戦略の一翼を担っていたことを今一度再認識すべきであろう。

大型前方後円墳を含む大型古墳群の〈空間分析〉については、1960年代末から1970年代初頭にか

けて、古墳分布の基礎情報がある程度蓄積されていた百舌鳥古墳群・古市古墳群において先行して行われ、多数の研究成果が提示されている（白石1969a/b、野上1970a/b・1972、原島1970a/b・1971a/b、石部・田中・堀田・宮川1971など）<sup>(3)</sup>。

奈良盆地の大型古墳群においても、1960年代後半になると、古墳群としての空間的・領域的な分析が提示されるようになり（小島1965、菅谷1967など）、1970年代半ば以降には、百舌鳥古墳群・古市古墳群における上記の諸研究に刺激を受けるかのように、新たな研究成果が提示される（置田1974、石野1976など）。

この時期、箸墓古墳出土の埴輪・土器が公開されるとともに（中村・笠野1976）<sup>(4)</sup>、纏向遺跡の発掘調査報告書においていわゆる「纏向編年」が提示されたことも（石野・関川ほか1976）、大和東南部の大型古墳群への関心が高まる契機となった。

大和東南部地域では、「陵墓」以外の大型古墳についての基礎情報の整備が遅れたが、1969年度から1973年度にかけて奈良県教育委員会が実施した「県下古墳基礎調査」の成果（奈良県教育委員会1971・1974）や、1975年度から1977年度にかけて、由良学術文化助成基金によって奈良県立橿原考古学研究所が実施した「磯城・磐余地域の前方後円墳の測量調査」（奈良県教育委員会1981）を通じて、当該地域の大・中型前方後円墳について、測量図などの基礎情報が整備された。

1990年代になると、中山大塚古墳（1993（平成5）年）、下池山古墳（1995（平成7）年）、黒塚古墳（1997（平成9）年）において、奈良県立橿原考古学研究所による埋葬施設の発掘調査が相次いで行われたほか（奈良県立橿原考古学研究所1996・2008・2018）、西殿塚古墳や東殿塚古墳では、天理市教育委員会による墳丘トレンチ調査が行われている（天理市教育委員会2000）。

これらの発掘調査成果は、長らく不明な点が多かった大和東南部地域の前期古墳についてきわめて重要な情報を提供してくれたが、大和古墳群や柳本古墳群の群構成などの〈空間分析〉については、やや不十分なまま残されることになる。

その後、2000年代に入ると、百舌鳥古墳群・古市古墳群の「世界文化遺産」登録をめざす動きの中で、三次元レーザ計測による大型前方後円墳の墳丘測量図が作成・公開されている（堺市2015、古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議2015a）。奈良県内でも、複数の大型前方後円墳において、三次元レーザ計測による墳丘測量図の作成が行われており、大型前方後円墳および大型古墳群の研究は新たなステージに入りつつある。

### 3. 大型前方後円墳の〈空間構制〉を論じる上での基本事項

本項では、大型前方後円墳の〈空間構制〉を論じる前に、前方後円墳の形態や各種基準点について記述する上で必要な基本事項について整理しておく（図1）。

前方後円墳における、後円部墳頂平坦面の中心点を「後円部中心点」〔点O〕と呼称する。

また、三段築成の前方後円墳における、墳丘第2段目斜面の下端を「前方部側縁」と呼称する。後円部から前方部を見たときに、右側の側縁を「前方部右側縁」、左側の側縁を「前方部左側縁」と呼称し、それぞれの延長線を「前方部右側縁ライン」、「前方部左側縁ライン」と呼称する。

次に、「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」を、それぞれ後円部方向に延長した交点を、「前方部側縁基準点」〔点X〕と呼称する。実際に古墳を築造する過程においては、まず「前方部側縁基準点」〔点X〕を設定し、そこから「前方部右側縁ライン」および「前方部左側縁ライン」が設定されることになる。

なお、本稿における「前方部側縁」は、「墳丘第1段目斜面の下端」（いわゆる「墳裾」「墳端」）

ではなく、「墳丘第2段目斜面の下端」を指す。これは、周溝を伴う大型前方後円墳の造営においては、墳丘構築前の原地表面における「墳丘第2段目斜面の下端」ラインの設定こそ重要であると考えられるからである。本稿における「前方部側縁」という用語は、完成形としての墳丘の一部をなす用語ではなく、あくまでも、墳丘構築前の基準ラインを想定した用語であることを諒解されたい。

本稿で〈空間配置〉の分析を行う大型前方後円墳等については、各古墳の基準点等の混乱を避けるため、表1の通り、各古墳にアルファベット3文字の略号を付している。例えば、大仙陵古墳の略号は「DS」とし、同古墳の「前方部側縁基準点」は「点DSX」、「後円部中心点」は「点DSO」と呼称する。他の古墳についても同様である。

#### 4. 大和古墳群の古墳配置 —古墳時代前期「盟主墓」の空間分析（1）—

本項では、倭王権の「王墓」が最初に造営されたと考えられる、大和古墳群の古墳配置を検討する。これまで、大和古墳群における大型前方後円墳については、前方部を南に向けるものと、前方部を西に向けるものが多数を占めると指摘されている。このような傾向については訂正の必要がないが、本稿では、よりミクロな視点から、当該地域における大型前方後円墳の立地および主軸方向について検討する。

##### （1）大和古墳群に先行する纏向古墳群

大和古墳群の古墳配置について検討するまえに、大和古墳群に先行する、纏向古墳群（図2）および箸墓古墳（図3）について簡単に触れておく。

最古の「倭王墓」として箸墓古墳（前方後円墳、墳長約280m）を挙げることが定説となって久しい（近藤1968、丸山1975など）。纏向遺跡の発掘調査後、箸墓古墳の東側に散在する纏向古墳群の存在が広く周知され（石野・関川ほか1976）、その後、各古墳の実態解明が進み、箸墓古墳に先行するものやほぼ並行するものが含まれることが明らかになりつつある（寺澤1984・1988など）。それらはいずれも墳丘長100m前後の規模に達しているものの、箸墓古墳とは区別された空間に立地しており、全長280mにも達する箸墓古墳の「隔絶性」「独立性」は際立っている（図2）。

箸墓古墳の周囲には、墳丘長100m級の前方後円墳は随伴せず、箸墓古墳と纏向古墳群の諸古墳は、近接する場所に築造されてはいるものの、それぞれ別個の空間に築造されている。

##### （2）大和古墳群の概要

大和古墳群における大型前方後円墳の分布と立地について検討する（図4）。

本稿では、大和古墳群における西殿塚古墳、柳本古墳群〔柳本支群〕における行燈山古墳、柳本古墳群〔渋谷支群〕における渋谷向山古墳のような、各古墳群（支群）における最大規模墳を「中核古墳」、それに付随する中規模古墳を「随伴古墳」と呼称する<sup>(5)</sup>。大和古墳群や柳本古墳群においては、「中核古墳」を中心として複数の「随伴古墳」が共存する状況が看取される。本項では、各古墳群において、「中核古墳」および、その周囲に意図的に配置された複数の「随伴古墳」から構成される「まとまり」を抽出した上で、主要古墳の〈空間構制〉を検討することを目的とする。

「中核古墳」および「随伴古墳」を識別・弁別するには、古墳の築造時期や位置関係から判断することになるが、すぐ近くに築造されていても、築造時期に齟齬が認められる場合もあるし、発掘調査が行われていないため、築造時期の推定が困難な場合も少なくない。「中核古墳」および「随伴古墳」の認定はあくまでも現時点での便宜的区分である。

大和古墳群は、北を越川、南を岸田川に画された南北約1.5kmの範囲に分布し、前方後円墳14基、前方後円墳5基を含む（現状で確認できる主要古墳のみ）。奈良盆地東縁の山塊から南西に派生する丘陵上に築造された古墳群を「中山支群」、その北西側に位置する扇状地上に立地する古墳群を「萱生支群」と呼称している<sup>(6)</sup>。

いわゆる「中山支群」には、東殿塚古墳（前方後円墳、墳長約139m）、西殿塚古墳（前方後円墳、墳長約230m）、火矢塚古墳（前方後円墳、墳長約49m）、燈籠山古墳（前方後円墳、墳長約110m）、中山大塚古墳（前方後円墳、墳長約130m）、小岳寺塚古墳（前方後円墳、墳長約50m）が連綿と築造（「配置」）されている（図5）。「萱生支群」と比較すると、各古墳の墳丘規模の大きさはもとより、丘陵斜面から尾根にかけてのかなり限定された範囲に計画的に配置されている点に気付く。

大和古墳群〔中山支群〕の中心的位置を占める、西殿塚古墳および東殿塚古墳は、東から西に下る丘陵斜面を利用しつつ、南北主軸の前方後円墳を東西に「並列」するように築造したもので、両古墳とも、前方部の「右側面」を丘陵斜面下方に向けている。

大和古墳群では、後期に築造された西山塚古墳（前方後円墳、墳長約114m）のみ前方部を北に向けるが、それ以外の前方後円墳・前方後方墳は、全て前方部を南あるいは西に向けている。

なお、前方部を南あるいは西に向けている前方後円墳（前方後方墳）が多いなかで、「中山支群」の中山大塚古墳および小岳寺塚古墳は、尾根の方向に規制された結果、前方部を南西側に向ける形になっている。

### （3）大和古墳群における「古墳配置」

大和古墳群〔中山支群〕では、東殿塚古墳、西殿塚古墳、火矢塚古墳、燈籠山古墳、中山大塚古墳、小岳寺塚古墳が、近接する位置に築造されている（図5）。現地の地形を観察すると、東殿塚古墳、西殿塚古墳、火矢塚古墳については丘陵斜面に築造されており、そこから派生する尾根上に燈籠山古墳、中山大塚古墳、小岳寺塚古墳が築造されている状況が看取できる。これら以外の古墳との立地上の相違や、相互の位置関係からみても、これらの6古墳が他の古墳とは区別された「まとまり」をなすことは間違いない。

なかでも、西殿塚古墳・燈籠山古墳・中山大塚古墳・小岳寺塚古墳の4古墳の「後円部中心点」がほぼ一直線上に並ぶ点は非常に重要である（図5）<sup>(7)</sup>。

小岳寺塚古墳をのぞく3古墳については、近年、埋葬施設や墳丘内外の発掘調査が行われており、比較的短期間の間に順次造営されたことが明らかである。小岳寺塚古墳については実態不明であるが、燈籠山古墳や中山大塚古墳が立地する尾根筋の末端に築造されており、両古墳と全く無関係に築造されたとは思えない。

東殿塚古墳と西殿塚古墳が一体的に造営されていることは従来から指摘されており、「後円部中心点」が一直線上に配置された西殿塚古墳・燈籠山古墳・中山大塚古墳・小岳寺塚古墳および、西殿塚古墳の東側に隣接する東殿塚古墳、南西側に隣接する火矢塚古墳を加えた6古墳が、順次、計画的に配置・造営されたものと見做される。

## 5. 柳本古墳群の〈空間構制〉—古墳時代前期「盟主墓」の空間分析（2）—

### （1）柳本古墳群の概要

柳本古墳群は、北を真面堂川、南を烏田川に画された南北約1.5kmの範囲に分布する（図6）。中央付近を西流する西門川によって、南北二つのエリアに分けることができる。北側には行燈山古

墳〔崇神天皇陵古墳〕を中心とする「柳本支群」、南側には渋谷向山古墳〔景行天皇陵古墳〕を中心とする「渋谷支群」が立地する<sup>(8)</sup>。

「柳本支群」には前方後円墳 8 基および双方中円墳 1 基（櫛山古墳）、「渋谷支群」には前方後円墳 4 基が所在する（いずれも現状で確認できる主要古墳のみ）。両支群とも前方後円墳は含まれていない。また、両支群とも、西側に少し離れたやや低い場所に複数の中型前方後円墳が築造されている状況は、大和古墳群〔萱生支群〕の状況に類似する。

「柳本支群」の中心部には、行燈山古墳（前方後円墳、墳長約242m、「崇神天皇陵」）、櫛山古墳（双方中円墳、墳長約155m）、アンド山古墳（前方後円墳、墳長約120m）、南アンド山古墳（前方後円墳、墳長約65m）、大和天神山古墳（前方後円墳、墳長約103m）が立地し、より低標高の場所には、黒塚古墳（前方後円墳、墳長約130m）、ノベラ古墳（前方後円墳、墳長不確定）、石名塚古墳（前方後円墳、墳長約124m）が立地する<sup>(9)</sup>。

一方、「渋谷支群」の中心部には、渋谷向山古墳（前方後円墳、墳長約300m、「景行天皇陵」）、上の山古墳（前方後円墳、墳長約144m）、シウロウ塚古墳（前方後円墳、墳長約120m）が立地し、より低標高の場所には、柳本大塚古墳（前方後円墳、墳長約94m）が立地する<sup>(10)</sup>。シウロウ塚古墳と行燈山古墳の間には、赤坂古墳（「景行天皇陵飛び地は号」：方墳、一辺約25m）が立地する。

## （2）柳本古墳群〔柳本支群〕・〔渋谷支群〕の〈空間構制〉

### 柳本古墳群〔柳本支群〕の〈空間配置〉

まず、柳本古墳群〔柳本支群〕における、櫛山古墳・行燈山古墳・南アンド山古墳の〈空間配置〉を検討する（図7）。

これら3古墳における「墳丘第2段目斜面下端ライン」に着目すると、櫛山古墳の「南側ライン」および、行燈山古墳の「前方部左側縁ライン」、南アンド山古墳の「前方部右側縁ライン」が一直線をなしている状況が看取できる。本稿では、これを〈行燈山基準ライン〉と呼称する。

行燈山古墳の前方部の北側に位置するアンド山古墳については、〈行燈山基準ライン〉に直交するように墳丘主軸が設定されている。

### 柳本古墳群〔渋谷支群〕の〈空間配置〉

次に、柳本古墳群〔渋谷支群〕における、渋谷向山古墳・シウロウ塚古墳・赤坂古墳の〈空間配置〉について検討する（図8）。

シウロウ塚古墳については、従来から特異な墳形について指摘されてきたが（千賀1981）、発掘調査も行われておらず正確な墳形は確定していない。また、赤坂古墳については、「景行天皇陵」の陪塚として宮内庁の管理下にあることもあり、方墳の可能性が高いが、墳形は未確定の状況である。

このような状況であるので、「渋谷支群」における古墳の位置関係の検討はやや難しいが、現時点では、シウロウ塚古墳の「南側ライン」および、赤坂古墳の「南側ライン」、渋谷向山古墳の「前方部右側縁ライン」が一直線をなしている可能性が指摘できる。不確定要素もあるが、本稿では、これを〈渋谷向山基準ライン〉と呼称する。

なお、渋谷向山古墳の前方部の北側に位置する上の山古墳については、この〈渋谷向山基準ライン〉に直交するように墳丘主軸が設定されている。

### 「柳本支群」および「渋谷支群」の「相似」構造

上記の〈基準ライン〉を踏まえて、「柳本支群」および「渋谷支群」の中心部に所在する古墳の配置を比較すると、両者がきわめて「相似的」な「古墳配置」をなすことに気づく（図9）。

「柳本支群」では、〈行燈山基準ライン〉を共有するように、東から順に、櫛山古墳、行燈山古墳、南アノ山古墳の築造位置が決定されているほか、アノ山古墳の墳丘主軸は〈行燈山基準ライン〉に直交する方向に設定されている。

一方、「渋谷支群」では、〈渋谷向山基準ライン〉を共有するように、東から順に、シウロウ塚古墳、赤坂古墳、渋谷向山古墳の築造位置が決定されているほか、上の山古墳の墳丘主軸は〈渋谷向山基準ライン〉に直交する方向に設定されている。

「柳本支群」および「渋谷支群」における各古墳の位置関係は、各古墳の築造位置が、〈基準ライン〉を共有するように、あるいは〈基準ライン〉と直交するように設定されており、行燈山古墳を「中核古墳」とする「柳本支群」の〈古墳配置〉と、渋谷向山古墳を「中核古墳」とする「渋谷支群」の〈古墳配置〉は、「相似的」な〈古墳配置〉をなしている。

柳本古墳群におけるこのような〈空間構制〉は、大和古墳群〔中山支群〕で見出された古墳配置（複数の前方後円墳の〈後円部中心点〉が一直線上に並ぶ）とは全く異質の〈古墳配置〉である。

なお、「柳本支群」の行燈山古墳には「陪塚」の候補となる古墳が存在しないのに対して、「渋谷支群」の中核をなす渋谷向山古墳には「陪塚」の候補となる古墳が2基存在する点も付記しておく（赤坂古墳・丸山古墳）。

これまで、柳本古墳群の〈古墳配置〉については、龍王山から西に延びる丘陵上に、墳丘主軸方向を「ほぼ」同じくする古墳が「縦列」する事実が指摘されてきたが、その墳丘主軸方向が少しずつ相互にずれている現象については全く言及されることがなかった状況である。

本稿では、隣接する複数の古墳の墳丘主軸方向が少しずつずれている現象については、各古墳の築造位置が、「墳丘主軸」ではなく「前方部側縁ライン」を共有することによって決定されていることによって生じたものと考えている。

例えば、2基の前方後円墳が同一の「基準線」を「共有」する場合でも、「前方部右側縁ライン」を「基準線」に載せる場合と、「前方部左側縁ライン」を「基準線」に載せる場合では、墳丘主軸方向が若干異なった方向になる。柳本古墳群〔柳本支群〕における、櫛山古墳・行燈山古墳・南アノ山古墳の墳丘主軸方向が、少しずつずれている（振れている）のは、このような理由による。

## 6. 前方部側面の「付帯空間」からみた〈空間構制〉の変容

大和古墳群では、西殿塚古墳と東殿塚古墳のように、前方部を南に向ける前方後円墳が、丘陵斜面に対して「並列」する現象が看取されるのに対して、柳本古墳群では、行燈山古墳と櫛山古墳、渋谷向山古墳とシウロウ塚古墳のように前方部を西側（盆地側）に向ける前方後円墳が、丘陵斜面に対して「縦列」する現象が看取される。

当該地域の大型前方後円墳に見られる、「南北主軸」から「東西主軸」への変更は、従来から指摘されているように、前方部の大型化・多段化を達成するための方策である可能性が高い（小林1937・1959）。

行燈山古墳および渋谷向山古墳には、墳丘の一角に、「造出」状の施設が付設されている可能性が指摘されているが、その祖型は、東殿塚古墳の前方部右側面（南側面）に付設された「突出部」にあると考えている。以下、各古墳の「付帯施設」について検討する。

### （1）前方部側面に付加された「閉じた空間」—東殿塚古墳出土円筒埴輪の船画から—

東殿塚古墳は、奈良県天理市に所在する全長約139mの前方後円墳である（図10-1）（天理市教育

委員会2000)。西側に向かって傾斜する丘陵斜面中腹に築造され、前方部を南に向けている。

奈良県教育委員会による踏査や表採埴輪・土師器の検討により、いち早く前期でも古い時期に築造された可能性が指摘され（奈良県教育委員会1971・1981）、天理市教育委員会による範囲確認調査へとつながることになる（天理市教育委員会2000）。発掘調査報告書では、トレンチ調査の状況や現地観察に基づき、本古墳が、前方後円形を呈する「墳丘上段」および長方形状を呈する「墳丘下段」から構成されていることが指摘されている（松本2000：68頁）。

東殿塚古墳の前方部右側面（南側面）に設定された東西方向のトレンチ（「北調査区」）は、前方部の墳頂平坦面から、「墳丘上段」「墳丘下段」を経て、「墳丘下段」外側の「掘り割り」および「外堤」までの範囲にかかっている。

船画を有する鱗付円筒埴輪を含む円筒埴輪群が検出されたのは、当該調査区で検出された「墳丘下段」の基底石列のすぐ外側の部分である（図10-1）。そこには盛土成形による「突出部」が付設され、その上面に合計20個体前後の各種円筒埴輪が集中的に配置されている（図10-2）。

そのうち、船画を有する鱗付円筒埴輪については、前方部右側面に向かって右側（南側）に配置されている（図10-2-8）。報告書では、これらの船画を、1号船画・2号船画・3号船画と呼び分けているので、本稿でもそれに従う（図11）。また本稿では、1号船画・2号船画が描かれている側をA面、3号船画が描かれている側をB面と仮称する。線刻された船のモチーフ自体を指す場合、それぞれ1号船、2号船、3号船と呼称する。

この船画については、様々な見解が提示されているが、「葬送船」の表現であることについては概ね一致していると思われる<sup>(11)</sup>。その一方で、この円筒埴輪の樹立位置や配置方向などを踏まえた議論はほとんどなされていない状況である。

調査担当者が指摘するように、東殿塚古墳の「突出部」が原初的な「造出」である可能性は高いと思われるが、「葬送儀礼参列者の墳丘上への導入路を規定する施設」としての機能を有するという指摘（青木2001：111頁）については若干疑問の余地がある。もう少し時期が下ると、「造出」と墳丘との間にある「谷部」が「通路」の機能を果たすようになるのは確かであるが、本古墳の「突出部」が、墳丘への「通路」して案出されたものであるとまでは言えないであろう。

東殿塚古墳における「突出部」および「船画」の意味については、「突出部」の「方向性」や当該船画の「方向性」を検討しつつ、古墳という「空間」全体の中で位置づける作業が不可欠である。

本埴輪の基底部は原位置では確認できていないが、埴輪片の出土状況や接合状況、報告書の記述などを総合すると、1号・2号船画が描かれたA面が地表面に接するように「手前」（南西側）に倒れた状態で検出されており、報告書の「埴輪樹立位置図」に白抜きで想定復原されているように（天理市教育委員会2000、81頁、図40下）、本来は、A面を南西側に向けるように配置されていた可能性が高い。その場合、本円筒埴輪は、A面を墳丘外側、B面を墳丘側に向けるように配置されていたということになる。

この円筒埴輪に描かれた船は、舳先に止まった鶏、「幡」がたなびく状況、櫂の描かれ方から判断すると、いずれも、器面に向かって「右側」に船首を向けており、器面に向かって「右側」に向かって「航行」する様子と見做される（図11）。

ちなみに、本埴輪を、先述したような「原位置」に置いた場合、墳丘外側に向けられたA面には1号・2号船、墳丘側に向けられたB面には3号船が描かれていることになる。墳丘外側からA面を見た場合、そこに描かれた1号船および2号船は、埴輪に向かって（古墳（前方部側面）に向かって）「右側」方向に「航行」している状況となる。墳丘との位置関係を踏まえると、1号船および

2号船は、古墳の「後円部」側から「前方部前端」側に向かって「航行」している状況ということになる。

ここで1点問題になるのは、B面側に描かれた3号船の状況である。3号船も器面に向かって右側に船首を向けており、これを「原位置」に置いた場合、「背面」（墳丘側）に描かれた3号船のみ、「前方部側」から「後円部側」に向かっている、ということになる。

本埴輪は、貼付された鱗部によって、A面とB面に分割されているが、本来、A面とB面を「展開」することにより、円環をなす（円筒状の）器面に描かれた「一連の画面」として見るべきものとする。A面とB面を「一連の画面」として見た場合、本埴輪の船画は、「船首を右に向ける船」3艘が描かれた「一連の画面」として理解することが可能である。

そのように見れば、本埴輪に描かれた船3艘については、「前方部右側面」という原位置に戻した場合、全体として、向かって右側、すなわち前方部前端方向に船首を向けた状態で描かれたという理解が可能である<sup>(12)</sup>。前方部右側面に付設された「突出部」自体は、西側（盆地側）に向いているが、そこに置かれた鱗付円筒埴輪の「船画」自体は、古墳に向かって「右側」（「前方部前端側」＝南側）を向いている点に注意を払う必要がある。

また、本埴輪が、「鱗付円筒埴輪」である点も重要である。

東殿塚古墳の後円部墳頂における円筒埴輪列の状況は不明であるし、前方部における墳頂部埋葬および埴輪列の有無も不明であるが、東潮・関川尚功が紹介した鱗付円筒埴輪片や（東・関川1981：31頁）、轟俊二郎が採集した鱗付円筒埴輪片の存在は（犬木2014：11頁）、後円部墳頂部および場合によっては前方部墳頂部にも鱗付円筒埴輪が樹立されていた可能性を示唆している。墳頂部に樹立された鱗付円筒埴輪はおそらく「方形埴輪列」をなしていた可能性が高いと思われる。

今回、前方部右側面の「突出部」で検出された鱗付円筒埴輪群は整然とした配置をなしていないが、当該埴輪群は、後円部墳頂部に設置されていると思われる鱗付円筒埴輪による「方形埴輪列」を、「突出部」上面に「縮小形態」として移設（「再現」）したもので、本来、墳頂部で実修された葬送儀礼を、前方部側面の「突出部」においても「縮約」した形で実修していたものとする。

鱗付円筒埴輪による「方形埴輪列」が、本来、「遮蔽された空間」／「囲まれた空間」／「閉ざされた空間」を表現していることは論を俟たない。換言すれば、鱗付円筒埴輪による「方形埴輪列」は、「遮蔽された空間」／「囲まれた空間」／「閉ざされた空間」の内部に存在する筈の「靈威」（「存在」）を代置的・換喩的に表現する「所在表現」（犬木2016a：4頁）に他ならないと考える。

東殿塚古墳の前方部右側面の「突出部」では、複数の鱗付円筒埴輪を集中的に配置することにより、縮約された形ではあれ、墳頂部と同様な「遮蔽空間」を擬似的に表現している可能性がある。

では、この擬似的な「遮蔽空間」の内部には「いかなるモノ」が措定されていたのか？ 墳頂部の「方形埴輪列」の内部に措定されていたものが「亡き首長」の靈威であったならば、前方部右側面の「遮蔽空間」の内部に措定されていたものも、当然「亡き首長」の靈威ということになる。

前方部右側面に付設された「突出部」には、「亡き首長」の靈威（「存在」）の「所在」を表象する「遮蔽空間」が表現され、その外方に配置された鱗付円筒埴輪の外側—すなわち「遮蔽空間」の「外側」（「外面」）には、他界へ赴く3艘の船が描かれている。3艘の船が「前方部前端」側に向かって「航行」していることは前述の通りである。

前方部右側面の「突出部」に表出された擬似的な「遮蔽空間」は、「亡き首長」の靈威（「存在」）の「所在」が物象化されたものであり、「遮蔽空間」の「外側」（「外面」）に描かれた3艘の船は、「遮蔽空間」の内側にあるべき「存在」（「モノ」）に対して行われるべき葬送行為（「コト」）が物象



化されたものである。

本来、埋葬に伴うさまざまな儀礼行為は、墳頂平坦面において実修されていたはずであるが、墳丘の大型化および荘厳化が進行し、墳丘自体が「聖域」化し、儀礼実修者といえども立ち入るべき場所ではなくなっていく。様々な儀礼行為を墳丘上で実修されることが忌避されるようになり、より下方や墳丘外で行うようになっていく。そのような儀礼行為の「場」として、新たに整備された空間が「造出」であると考え<sup>(13)</sup>。

## （２）前方部側面に付設された「造出」

東殿塚古墳に先行する西殿塚古墳では、造出の存在は確認されていない（図5）。墳丘西側に「エプロン状張出し部」（石部ほか1979）が広く付設されているので、当該部に何らかの付帯施設が設けられていた可能性もあるが、現状では不明である。

一方、東殿塚古墳よりも後出する行燈山古墳や渋谷向山古墳には、「造出」の可能性のある突出部を確認することができる。

まず行燈山古墳であるが、南側くびれ部（右側くびれ部）の後円部寄りの部分に、半円状の「突出部」が看取できる（図12）。これについては、墳丘の崩落とみる研究者がいる一方（澤田2017：8頁、岸本2020：105頁）、「造出」として積極的に評価する研究者もいる（角南2014：81頁）。幕末の修陵事業により、外堤が大きく嵩上げされている可能性を考慮すれば、後円部南側斜面の一部が崩落していたとしても、本来、この位置に「造出」が付設されていた可能性も想定しておくべきであろう。

一方、渋谷向山古墳については、後円部の西側、右側くびれ部（南側くびれ部）の後円部寄りの部分に、方形の「造出」が明瞭に看取できる（図13）。これについては、明瞭な方形を呈することから、「造出」の初現形態であると考えられる研究者は少なくなく（有馬2010、澤田2016）、宮内庁が提示した墳丘復原図にも「造出」として明記されている（有馬・土屋2017：106頁）。

両古墳の築造年代については、「階段状周濠」の変遷観にもとづき、「渋谷向山古墳→行燈山古墳」という変遷観も提示されたが（白石1983）、近年では、墳丘形態や出土埴輪の比較などから、「行燈山古墳→渋谷向山古墳」という編年観が主流を占める。

渋谷向山古墳の「造出」は、後円部（南南西側）の第1段目斜面に付設されており、「造出」上面の形状は、幅約38m・長さ約20m程度の長方形を呈する。大和古墳群および柳本古墳群における「盟主墓」については、「西殿塚古墳→行燈山古墳→渋谷向山古墳」という編年観が概ね支持されているが、西殿塚古墳の前方部が南面するのに対して、行燈山古墳および渋谷向山古墳の前方部は概ね西面する、という相違がある。

西殿塚古墳のように墳丘主軸を丘陵斜面に「並行」させる築造方法（「斜面並行型」）から、行燈山古墳や渋谷向山古墳のように墳丘主軸を丘陵斜面に「直交」させる築造方法（「斜面直交型」）へと転換した背景としては、「斜面直交型」の墳丘構築を行うことで、斜面下方に位置する前方部の墳端（墳裾）ラインをより下位に設定することが可能になり、その分、前方部の墳端（墳裾）と前方部墳頂部との比高を大きくすることが可能になり、それによって前方部の大型化および多段化を実施できる点にある（小林1937・1959）。

先述した行燈山古墳の「突出部」については、後円部墳丘の一部が崩落して形成された可能性も指摘されるが、東殿塚古墳における前方部側面の「突出部」と渋谷向山古墳の「造出」の間を繋ぐものとして、積極的に位置づける必要があると考える。

第5節で述べた通り、行燈山古墳は、〈行燈山基準ライン〉に基づき、前方部を西に向ける前方後円墳として「構想」されている（図7）。〈行燈山基準ライン〉が設定された時点では、行燈山古墳の「前方部左側面」を〈行燈山基準ライン〉に合致させる方法〔A案〕と、「前方部右側面」を〈行燈山基準ライン〉に合致させる方法〔B案〕という二つの選択肢があった筈であるが、その後、実際にはA案を採用することになった。

もしB案を採用していた場合、行燈山古墳の前方部は、現状より南西側を向くことになり、上記の「造出」も南西側を向くような設置されたものと思われる。現地形を見るかぎり、A案・B案のどちらも可能であったと思われるが、後円部の左くびれ部寄りに付設された「造出」が西側に向くことを優先して、A案が採用された可能性が考えられる。

東殿塚古墳の前方部側面に付設された「突出部」も、西殿塚古墳の墳丘南側に付設された「エプロン状張出部」も、西側を意識した「方向性」になっており、行燈山古墳においても、「造出」の「方向性」を意識しつつ墳丘主軸方向が決定された可能性がある<sup>(14)</sup>。

行燈山古墳に後続する渋谷向山古墳では、後円部のくびれ部寄りの場所に「造出」を付設するという方式は行燈山古墳から踏襲されたものの、原地形の制約により前方部を東南東に向ける形となり、「造出」を西ではなく南南西に向けている。行燈山古墳の段階では、「造出」を西向きに付設するという意識が保持されていたのに対して、渋谷向山古墳の段階では、そのような意識が既に希薄化していた可能性を示唆している。

## 7. 大和古墳群の〈空間構制〉と柳本古墳群の〈空間構制〉

大和古墳群、柳本古墳群〔柳本支群〕、柳本古墳群〔渋谷支群〕における〈空間構制〉の共通点および差異についてまとめておく。

まず、大和古墳群、柳本古墳群〔柳本支群〕、柳本古墳群〔渋谷支群〕を構成する主要古墳を列挙する。

大和古墳群〔中山支群〕：西殿塚、東殿塚、火矢塚、燈籠山、中山大塚、小岳寺塚

柳本古墳群〔柳本支群〕：行燈山、櫛山、アンド山、南アンド山、大和天神山

柳本古墳群〔渋谷支群〕：渋谷向山、シウロウ塚、上の山、(赤坂)、(丸山)

※下線を付した古墳が「中核古墳」、他の古墳は「随伴古墳」、( )内は「陪塚」の可能性のある古墳である。

各古墳群（支群）の主要古墳に見られる配置の「論理」は以下の通りである。

大和古墳群〔中山支群〕：「後円部中心点」を一直線上に配置する。

柳本古墳群〔柳本支群〕：「前方部側縁ライン」を共有する。

柳本古墳群〔渋谷支群〕：「前方部側縁ライン」を共有する。

三つの古墳群には、他にも幾つかの共通点が看取される。

第一に、「中核古墳」より標高が高い位置に「随伴古墳」を配置する。

第二に、「中核古墳」より標高が高い位置に配置された「随伴古墳」には、以下の通り、「突出部」などの「特殊」な「空間」が付設されている<sup>(15)(16)</sup>。

大和古墳群〔中山支群〕：東殿塚古墳の前方部西側面で埴輪集中配置区画が検出されている

柳本古墳群〔柳本支群〕：櫛山古墳は南北主軸の「双方中円形」という特殊な墳形をとる。

柳本古墳群〔渋谷支群〕：シウロウ塚古墳は、方形の墳丘が2つ連接するような特異な形態を呈し、シウロウ塚古墳と渋谷向山古墳との間には「方墳」(赤坂古墳)が位置している。

第三に、「中核古墳」より標高が低い位置に単数あるいは複数の前方後円墳が配置され、そのうちの一部は、「中核古墳」の主軸に直交する方向に主軸を向ける。

その一方で、以下のような相違点も看取される。

大和古墳群〔中山支群〕に比べると、柳本古墳群〔柳本支群〕、同〔渋谷支群〕では、「中核古墳」と「随伴古墳」との墳丘規模の較差が拡大するとともに、「随伴古墳」の数も減少している。大和古墳群〔中山支群〕における「随伴古墳」が5基、柳本古墳群〔柳本支群〕における「随伴古墳」が4基であるのに対して、柳本古墳群〔渋谷支群〕における「随伴古墳」は2基のみである。また、大和古墳群および柳本古墳群〔柳本支群〕では、「中核古墳」の「陪塚」の可能性のある小古墳が見られないのに対して、柳本古墳群〔渋谷支群〕では、「中核古墳」の「陪塚」の可能性のある小古墳が看取されるという相違点がある<sup>(17)</sup>。

最後に、大和東南部における大型前方後円墳および随伴する中型・小型前方後円墳を対象として、その空間配置の特徴と変遷についてまとめておく。両古墳群に先行する箸墓古墳や、両古墳群に後出する佐紀古墳群も含めて、大和東南部地域における大型古墳群の〈空間構制〉について、通時的変遷をまとめると以下ようになる。

**第1段階：**「中核古墳」のみ単独で存在する。【事例】箸墓古墳（纏向古墳群）

**第2段階：**「中核古墳」と「随伴古墳」の「後円部中心点」が一直線上に配置される。

【事例】大和古墳群〔中山支群〕

**第3段階：**「中核古墳」と「随伴古墳」が「前方部側縁ライン」を共有する。

【事例】柳本古墳群〔柳本支群〕

**第4段階：**「中核古墳」と「随伴古墳」が「前方部側縁ライン」を共有する。また、「陪塚」の可能性のある小古墳を少数含む。【事例】柳本古墳群〔渋谷支群〕

**第5段階：**多数の「陪塚」を伴う「中核古墳」が複数配置される。【事例】佐紀古墳群

## 8. 西都原古墳群の〈空間構制〉— 一列島西縁地域における首長墓の空間分析—

宮崎県西都市に所在する西都原古墳群は、大小319基の古墳からなる南九州屈指の大古墳群である（北郷2005、宮崎県教育委員会2015、東2017）。その内訳は、前方後円墳32基（男狭穂塚古墳を含む）・方墳2基・円墳285基である（図14）。これ以外にも、地下式横穴墓70基以上および横穴墓15基が確認されている。

西都原古墳群における〈空間構制〉の具体相については、すでに幾つかの論考で略述したが（犬木2016b・2019）、西都原古墳群で見出された〈空間構制〉のあり方および、そこに至る分析手法は、後述するように、古市古墳群・百舌鳥古墳群・埼玉古墳群における〈空間構制〉の分析を行う上で、非常に重要な役割を果たすことになった。

本来、畿内中枢部における大型前方後円墳の〈空間構制〉を論じた後に、西都原古墳群の〈空間構制〉について論じるべきであるが、上記のような経緯も踏まえて、西都原古墳群の〈空間構制〉について先に扱うことにする。

### （1）「西都原中央群」の〈空間構制〉— 女狭穂塚・男狭穂塚・西都原169～171号墳—

#### 西都原古墳群の概要

西都原古墳群では、1995年度より、国の補助金による史跡整備事業として「平成の発掘調査」が開始され、様々な調査成果および研究成果が提示されている。

筆者は、西都原169号墳・170号墳の発掘調査に関わったことを直接的契機として、両古墳出土埴輪のほか、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原171号墳出土埴輪などを含めて、西都原古墳群出土埴輪の総合的・悉皆的検討作業を行っている（犬木2015）。

西都原古墳群には319基もの古墳が所在するが、埴輪樹立古墳は存外に少なく、現状では、西都原台地中央に築造された女狭穂塚古墳（前方後円墳、全長約176m）・男狭穂塚古墳（帆立貝形古墳、全長約176m）・西都原169号墳（造出付円墳、全長約56m）・170号墳（円墳、直径約60m）・171号墳（方墳、一辺約30m）の5基のほか<sup>(18)</sup>、台地周縁に所在する西都原101号墳（方墳、一辺約15m）・寺原古墳（円墳、直径約21m）、台地下段に所在する西都原212号墳（前方後円墳、全長約51m）を含めて、合計8基のみである。

このうち、台地中央に立地する女狭穂塚古墳は九州最大の前方後円墳とされている。また男狭穂塚古墳も、地下レーダ探査の結果、ほぼ同規模であることが判明し、帆立貝形古墳としては全国最大規模を誇る（宮崎県教育委員会2007）。両古墳を取り囲むように立地する西都原169号墳・170号墳・171号墳については、「大正調査」以来、長らく女狭穂塚古墳および男狭穂塚古墳の「陪塚」として位置づけられてきた経緯がある（宮崎県1926）。

西都原169号墳・170号墳の発掘調査を契機として、「西都原中央群」出土埴輪の調査研究を進めてきた筆者は、「西都原中央群」に含まれる大型古墳5基の「主墳／陪塚関係」の再検討作業を行った結果、当該古墳5基の〈空間構制〉に関して、あらたな見解を提示している（犬木2016b・2019）。

#### 女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳

まず、「西都原中央群」ひいては西都原古墳群の中核古墳である女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳の位置関係について確認しておく（図15）。

女狭穂塚古墳の墳丘主軸ラインを〈女狭穂塚基準線〉、男狭穂塚古墳の「墳丘主軸ライン」を〈男狭穂塚基準線〉と呼称し（犬木2019）<sup>(19)</sup>、両者の交点を「女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の「共通基準点」〔点STP〕と呼称する。

女狭穂塚古墳の「前方部側縁基準点」を点MHX、男狭穂塚古墳の「前方部側縁基準点」を点OHXとすると、 $STP-MHX : STP-OHX = 1 : 2$ となる。また、女狭穂塚古墳の「後円部中心点」を点MHO、男狭穂塚古墳の「後円部中心点」を点OHOとすると、 $STP-MHO : STP-OHO = 1 : 2$ となる。

両古墳の「共通基準点」〔点STP〕から、〈女狭穂塚基準線〉および〈男狭穂塚基準線〉を設定した上で、両「基準線」上に、共通の比率を用いて、それぞれの後円部の設計に必要な「後円部中心点」および、前方部側縁の設計に必要な「前方部側縁基準点」の両者が決定されていることがわかる。この事実は、女狭穂塚古墳および男狭穂塚古墳が別個に設計・配置されたものではなく、共通の原理・基準を用いて、一体的に設計・配置されたものであることを示す。

#### 女狭穂塚・男狭穂塚と西都原169・170・171号墳

次に、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の周囲に所在する、西都原169号墳・170号墳・171号墳の配置について検討する（図16）。

まず、女狭穂塚古墳と西都原171号墳の位置関係であるが、女狭穂塚古墳の「前方部右側縁ライン」を直角に折り返した線上に、西都原171号墳が配置されている。このような「主墳」と「陪塚」の位置関係は、古市古墳群における誉田御廟山古墳と東山古墳・アリ山古墳との位置関係に近似する。

次に、女狭穂塚古墳と西都原169号墳の位置関係であるが、西都原169号墳の「墳丘中心点」〔P2〕

は、女狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点MHO〕を通り「前方部右側縁ライン」に平行する直線を伸ばしたところに位置している。結果として、「後円部中心点」〔点MHO〕と西都原171号墳の隅角〔点P1〕を結ぶ直線と、「後円部中心点」〔点MHO〕と西都原169号墳の「墳丘中心点」〔点P2〕を結ぶ直線は直交し、 $STP-MHO : MHO-P2 = 1 : 2$ という整数比をなす。

一方、男狭穂塚古墳と西都原170号墳の位置関係については、男狭穂塚古墳の「左側縁ライン」を直角に折り返した線上に、西都原170号墳の「墳丘中心点」が位置している。男狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点OHO〕と西都原170号墳の「墳丘中心点」〔点P3〕の間には、 $STP-OHO : OHO-P3 : OHO-OHX = 2 : 2 : 1$ という整数比が看取される。

女狭穂塚古墳に関わる「整数比」と、男狭穂塚古墳に関わる「整数比」を統合すると、 $STP-MHO : MHO-P2 : STP-OHO : OHO-P3 : OHO-OHX = 1 : 2 : 2 : 2 : 1$ となる。

このような形で各基準点間の距離に「整数比」が見出される事実は、〈女狭穂塚基準線〉によって配置された「女狭穂塚古墳・西都原169号墳・西都原171号墳」および、〈男狭穂塚基準線〉によって配置された「男狭穂塚古墳・西都原170号墳」の両者が、統一的な原理・基準によって一体的に設計されていることを如実に示すものである<sup>(20)</sup>。「女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の「共通基準点」〔点STP〕から、〈女狭穂塚基準線〉および〈男狭穂塚基準線〉を設定し、その上で、〈女狭穂塚基準線〉に基づいて女狭穂塚古墳・西都原169号墳・171号墳の位置関係、〈男狭穂塚基準線〉に基づいて男狭穂塚古墳・西都原170号墳の位置関係が決定されている。

筆者は、〈女狭穂塚基準線〉によって位置関係が決定された女狭穂塚古墳・西都原169号墳・171号墳を〈女狭穂塚古墳系〉、〈男狭穂塚基準線〉によって位置関係が決定された男狭穂塚古墳・西都原170号墳を〈男狭穂塚古墳系〉と呼称する。

女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の位置関係を決定する際に、「前方部側縁ライン」が大きな役割を果たしている点には注意が必要である。「前方部側縁」については、古墳が築造された後に、それを後円部方向に（「前方部側縁基準点」に向かって）延長することが難しいという特徴がある。つまり、「前方部側縁ライン」の設定は、墳丘築造に先立って、あらかじめ行っておかなければならないということになる。

## （2）埴輪樹立古墳の〈空間構制〉—「女狭穂塚系列」埴輪と「男狭穂塚系列」埴輪—

「西都原中央群」に帰属する5古墳（女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原169～171号墳）には、いずれも埴輪が樹立されている。

西都原古墳群出土の埴輪については、筆者による検討作業の結果、「女狭穂塚系列」埴輪および「男狭穂塚系列」埴輪に大別できることが明らかになっている（犬木2015）。両者の特徴は以下の通りである。

「女狭穂塚系列」埴輪：器壁が比較的厚く、突帯も比較的厚重で、淡褐色（ベージュ色）を呈し、黒斑を有している。「畿内的」埴輪という位置付けが可能である。

「男狭穂塚系列」埴輪：器壁が比較的薄く、比較的端面の細い突帯をもち、焼成は良好・堅緻で、橙褐色（暗褐色）を呈し、黒斑は明瞭ではない。「非畿内的」（在地的）埴輪という位置付けが可能である。

「西都原中央群」に含まれる5基のうち、「女狭穂塚系列」埴輪を樹立するのは、女狭穂塚古墳・西都原169号墳・171号墳の3基で、「男狭穂塚系列」埴輪を樹立するのは、男狭穂塚古墳・西都原170号墳の2基である<sup>(21)</sup>。

ここで注目すべき点は、①「女狭穂塚系列」埴輪を樹立する3古墳が、〈女狭穂塚基準線〉に基づく〈女狭穂塚古墳系〉に帰属する、また、②「男狭穂塚古墳系列」埴輪を樹立する2古墳が、〈男狭穂塚基準線〉に基づく〈男狭穂塚古墳系〉に帰属する、という2点である。

女狭穂塚古墳を中心に配置された3古墳には「女狭穂塚系列」埴輪のみ樹立されており、男狭穂塚古墳を中心に配置された2古墳には「男狭穂塚系列」埴輪が主体的に樹立されているということになる。これは、〈女狭穂塚古墳系〉と〈男狭穂塚古墳系〉という設計・配置上の区分と、「女狭穂塚系列」と「男狭穂塚古墳系列」という埴輪の区分が見事に合致している点で非常に重要である。

なお、西都原古墳群においては、西都原中央群以外にも埴輪樹立古墳（西都原101号墳、寺原古墳、西都原212号墳）が存在している（図18）。

まず、西都原101号墳であるが、2015年度以降、数次にわたる発掘調査が実施され、西都原古墳群で2例目の方墳であると同時に、「女狭穂塚系列」の埴輪が樹立されていることが確認されている（宮崎県教育委員会2020）。

別稿でも述べたように、西都原101号墳の築造位置は、女狭穂塚古墳を基点として決定されたものと思われる（犬木2016b・2019）（図17）。女狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点MHO〕と西都原169号墳の「中心点」〔点P2〕を結ぶ直線を直角に折り返したライン、換言すれば、女狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点MHO〕と西都原171号墳のコーナー〔点P1〕を結ぶラインを北東側に延ばした延長上に、西都原101号墳のコーナー〔点P4〕が位置している。女狭穂塚古墳と西都原101号墳の距離は、女狭穂塚古墳と西都原171号墳の距離の8倍になる。

筆者は、上記のような位置関係および、西都原101号墳が方墳であること、西都原101号墳出土埴輪がすべて「女狭穂塚系列」であることを鑑みて、西都原101号墳は女狭穂塚古墳の「陪塚」に他ならないと考えている（犬木2019）。西都原171号墳を女狭穂塚古墳の〈近い陪塚〉、西都原101号墳を〈遠い陪塚〉と呼称する所以である。

一方、西都原212号墳の「後円部中心点」〔点P5〕については、女狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点MHO〕と西都原169号墳の「中心点」〔点P2〕を結ぶ線を、南西方向に延ばした延長線上に位置している（図18）。女狭穂塚古墳と西都原212号墳の距離は、女狭穂塚古墳と西都原171号墳の距離の16倍に相当する。西都原212号墳は、西都原古墳群でも下位の平坦面に立地しており、女狭穂塚古墳からはその距離もさることながら、視認することはできないと思われる。筆者が、西都原212号墳を女狭穂塚古墳の〈見えない陪塚〉と呼称する所以である。

なお、寺原古墳については、西都原101号墳や西都原212号墳のような、女狭穂塚古墳を基準とした〈空間配置〉の特徴は認められない。

女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原169～171号墳が、西都原台地中央に「孤立的」に築造されているのに対して、西都原101号墳は台地北東縁の「第2-B支群」（北郷2005）、寺原古墳は「寺原支群」、西都原212号は下位段丘面の「鷺田支群」に位置している。

西都原101号墳、寺原古墳、西都原212号墳が、「第2-B支群」、「寺原支群」、「鷺田支群」という三つの支群に分散している事実は、女狭穂塚古墳の造営に際して、労働力の提供など協力を惜しななかった各「支群」の首長に対して、それぞれ「畿内の埴輪」である「女狭穂塚系列」埴輪が「供与」されたものと推測する。さらに重要な点は、①西都原101号墳と西都原212号墳が〈女狭穂塚古墳系〉に組み込まれているのに対して寺原古墳は組み込まれていない、②西都原101号墳は西都原171号墳と同じく方墳であるのに対して、西都原212号墳は前方後円墳である、という相互の相違点も看取され、これら3古墳においても、種々の形で較差が表出している点には注意が必要である。

### （3）古墳時代後期の西都原古墳群—女狭穂塚・男狭穂塚以降の〈空間構制〉—

西都原古墳群において、上記のような〈空間構制〉および埴輪の樹立が認められるのは、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の時期に限定されており、それ以降の時期に継承されることはない。

では、西都原古墳群において、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳以降の時期において、古墳配置における何らかの統一的な原理・基準は認められるのであろうか。

それを考えるヒントになると思われるのが、西都原265号墳〔船塚古墳〕、鬼の窟古墳〔西都原206号墳〕、西都原202号墳〔姫塚古墳〕の位置関係である（図19）。

これら3古墳については、平成期に史跡整備のための発掘調査が実施されているので、刊行されている発掘調査報告書に従い各古墳の概要を記す。

西都原265号墳〔船塚古墳〕は、西都原台地の北端付近、「第3-B支群」に所在する唯一の前方後円墳で、他の小円墳群から北東に少し離れた台地縁辺部に立地する。全長約56mを測る。2014年度から2016年度にかけて発掘調査が実施された（宮崎県教育委員会2019）。左側くびれ部に造出が確認されたが、埴輪の樹立は確認されていない。大正調査および今回の調査で出土した須恵器・土師器・鉄鏃片の年代観から5世紀後葉の築造とされる。

西都原202号墳〔姫塚古墳〕は、西都原台地の南側、「第1-B支群」に所在する全長約58mの前方後円墳である。台地中央に立地することから「第1-B支群」と呼称されるが、「第1-A支群」のすぐ西側に立地している点にも注意を払う必要がある。2008年度から2012年度にかけて発掘調査が実施された（宮崎県教育委員会2013）。大正調査の埋土内から鉄鏃や玉類が出土したほか、墳丘表土や周溝埋土から出土した須恵器・土師器・鉄鏃片の年代観から6世紀後葉の築造とされる。

鬼の窟古墳〔西都原206号墳〕は、西都原台地の中央、「第1-B支群」に所在する直径約36mの円墳である。西都原古墳群において現状では唯一の横穴式石室を有し、本古墳群最終末に位置づけられる。1995年度に実施された発掘調査では多数の須恵器片が出土し、7世紀初頭の築造とされる（柳沢1994、宮崎県教育委員会2000）。

ここで確認しておくべき重要な点は、上記の3古墳—北から順に西都原265号墳、鬼の窟古墳、西都原202号墳—の「後円部中心点」（ないし「中心点」）が一直線上に並ぶことである。西都原265号墳の「後円部中心点」をP7、同202号墳の「後円部中心点」をP8、鬼の窟古墳の「中心点」をP9とすると、 $P7-P8 : P8-P9 = 7 : 2$ となる。

これら3古墳の築造順序については、「西都原265号墳→西都原202号墳→鬼の窟古墳」という先後関係でほぼ一致している。西都原265号墳から鬼の窟古墳までは、およそ100年の時間差が認められるので、このような「直線的な古墳配置」は「共時的配置」を示すものではなく、あらかじめ「予定」された「計画的配置」と見做すのも難しいと思われる<sup>(22)</sup>。

西都原265号墳が築造されてから1世紀近くが経過したのち、西都原202号墳が築造されるが、その時点において、西都原202号墳の墳丘主軸方向が、西都原265号墳の「後円部中心点」〔P7〕の方向を意識して決定されたものと考えられる。その後、程なくして、鬼の窟古墳を造営する段階で、西都原265号墳の「後円部中心点」〔P7〕と、西都原202号墳の「後円部中心点」〔P8〕を結ぶ直線上に、鬼の窟古墳の「中心点」〔P9〕を設定したものと思われる。

さらに重要な点は、鬼の窟古墳が、女狭穂塚古墳の「墳丘主軸ライン」を南東側に延長した線上にほぼ位置しているという点である。

以上をまとめるならば、鬼の窟古墳は、女狭穂塚古墳の「墳丘主軸ライン」の延長線および、西都原265号墳と西都原202号墳の「後円部中心点」を結ぶ直線の交点に位置している、ということに

なる。これは、女狭穂塚古墳・西都原265号墳・西都原202号墳・鬼の窟古墳という4古墳から構成された「位置関係」であるが、重要なのは、このような「古墳配置」が「完成」したのは、あくまでも鬼の窟古墳が築造された段階である、という点である。

鬼の窟古墳の築造位置が、過去に築造された他の古墳との位置関係によって決定されているということは、換言すれば、鬼の窟古墳の被葬者と、鬼の窟古墳に先行する関連古墳の被葬者たちとの「系譜的關係性」が〈空間構制〉として明示（物象化）されていると見做すべきであろう。

西都原古墳群における古墳築造は、西都原265号墳や西都原111号墳が築造されたのち、西都原202号墳の築造まで1世紀近く断絶していることが明らかにされている。

西都原古墳群において、3世紀後半以来、ほぼ全ての古墳が台地縁辺部に築造されているなかで、台地中央部に築造された古墳は、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳を含む「西都原中央群」および、西都原202号墳や鬼の窟古墳を含む「第1-B支群」のみである。このような「第1-B支群」の立地上の特異性は、当該支群が、古墳時代中期以前の西都原古墳群とは異なる集団秩序や集団関係の下で造営された可能性を示唆するものである。

鬼の窟古墳は、西都原265号墳と西都原202号墳を結ぶ直線上に配置されているが、その基点に位置する西都原265号墳についてはすぐ西側の「第3支群」の造墓集団、西都原202号墳についてはすぐ東側の「第1支群」の造墓集団との間に有意な関係性を想定できる可能性がある。

その一方で、鬼の窟古墳が、女狭穂塚古墳の墳丘主軸の延長線上に概ね位置していることは、鬼の窟古墳の被葬者が、女狭穂塚古墳に具現されるような、古墳時代中期までの伝統的な集団秩序や集団関係を何らかの形で継承していた可能性を示唆していると考えられる。

#### （4）まとめ—西都原古墳群の〈空間構制〉（図20）

西都原古墳群という「僻遠」の地に造営された古墳群であるが、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳および同時期に築造されたと推測される諸古墳の〈空間構制〉に関して、以下の通り、幾つかの重要な所見を得ることができた（図20）。

- ①女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳は、「共通基準点」〔点STP〕から分岐した基準線（〈女狭穂塚基準線〉および〈男狭穂塚基準線〉）によって墳丘設計がなされている。「共通基準点」〔点STP〕から、両古墳の「後円部中心点」および「前方部側縁基準点」までの距離については、整数比になっている。
- ②女狭穂塚古墳の「前方部右側縁ライン」を基準として、西都原171号墳および西都原169号墳の築造位置が決定されている。「共通基準点」〔点STP〕から女狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点MHO〕までの距離および、女狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点MHO〕から西都原169号墳の「中心点」〔点P2〕までの距離は、それぞれ整数比になっている。
- ③男狭穂塚古墳の「前方部左側縁ライン」を基準として、西都原170号墳の築造位置が決定されている。「共通基準点」〔点STP〕から男狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点OHO〕までの距離と、男狭穂塚古墳の「後円部中心点」〔点OHO〕から西都原170号墳の「中心点」〔点P3〕までの距離は整数比になっている。

一点付言しておく、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳および周辺古墳が織りなす〈空間構制〉において、「共通基準点」〔点STP〕から〈女狭穂塚基準線〉および〈男狭穂塚基準線〉を設定しているが、仮に〈女狭穂塚基準線〉および〈男狭穂塚基準線〉を古墳築造前の地表面に設定し、そこから古墳築造を開始したとすると、〈男狭穂塚基準線〉は女狭穂塚古墳の墳丘下に埋もれてしまうこと



になる。換言すれば、〈男狭穂塚基準線〉は女狭穂塚古墳の築造前にしか「設定」できない基準線である、ということになる<sup>(23)</sup>。

女狭穂塚古墳と西都原171号墳・169号墳、男狭穂塚古墳と西都原170号墳との位置関係についても、同様なことが言える。西都原171号墳・169号墳は、いずれも女狭穂塚古墳の「前方部右側縁ライン」を基準として設定されているが、この「前方部右側縁ライン」は女狭穂塚古墳築造後には、「設定」し得ない基準線である。また西都原170号墳は、男狭穂塚古墳の「前方部左側縁ライン」を基準として設定されているが、この「前方部左側縁ライン」は男狭穂塚古墳築造後には「設定」し得ない基準線である。

## 9. 古市古墳群の〈空間構制〉—古墳時代中期「盟主墓」の空間分析(1)—

古市古墳群(図21)に所在する大型前方後円墳の〈空間構制〉について検討する。

本来、大型前方後円墳だけでなく、全ての中規模・小規模古墳まで視野に入れて分析すべきであるが、ここでは大型前方後円墳、なかでも「盟主墓」と見做し得る古墳を主たる対象として論を進める。具体的には、築造順に、津堂城山古墳(前方後円墳、墳長約208m、「藤井寺陵墓参考地」)、仲津山古墳(前方後円墳、墳長約290m、「仲津姫陵」)、誉田御廟山古墳(前方後円墳、墳長約425m、「応神天皇陵」)、市野山古墳(前方後円墳、墳長約230m、「允恭天皇陵」)、岡ミサンザイ古墳(前方後円墳、墳長約242m、「仲哀天皇陵」)が対象となる。また、古市古墳群には含めないことが多いが、河内大塚古墳(前方後円墳、墳長約335m、「大塚陵墓参考地」)も検討対象とする。これら6古墳の築造時期については、「津堂城山古墳→仲津山古墳→誉田御廟山古墳→市野山古墳→岡ミサンザイ古墳→河内大塚古墳」という先後関係ではほぼ異論の余地はない。

「前代」の大型前方後円墳の位置情報を基準として、「次代」の大型前方後円墳の築造場所がどのように決定されていたのか、順次検討する。

なお、誉田御廟山古墳のすぐ東側に位置する二ツ塚古墳(前方後円墳、墳長約110m)および、西側に築造された野中宮山古墳(前方後円墳、墳長約154m)・古市墓山古墳(前方後円墳、墳長約225m)についてはいわゆる「盟主墓」には該当しないが、誉田御廟山古墳との間に「有意」な「空間配置」が認められるので、併せて論及する。

### (1) 津堂城山古墳と仲津山古墳の〈空間配置〉(図22)

古市古墳群において、最初に築造された大型前方後円墳は津堂城山古墳で、その次に築造されたのが仲津山古墳であるので、この両古墳の位置関係を検討することが、古市古墳群の古墳配置を検討する第一歩となる。

まず、津堂城山古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」を北西に延ばした交点を、津堂城山古墳の「前方部側縁基準点」〔点TSX〕とし、仲津山古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」を北東に延ばした交点を、仲津山古墳の「前方部側縁基準点」〔点NKX〕とする。なお本稿における「前方部側縁ライン」は、既述の通り、とくに断らない限り、前方部の墳丘第2段目斜面の下端ラインを指すものとする<sup>(24)</sup>。

津堂城山古墳の「墳丘主軸ライン」を南東方向に延長し、仲津山古墳の「前方部左側縁ライン」を南西方向に延長すると、二つのラインが直交する。後述の通り、この交点を基準として仲津山古墳の築造位置が決定されていることから、この交点を〈仲津山基準点〉〔点NKP〕と呼称する。

津堂城山古墳の「前方部側縁基準点」〔点TSX〕から〈仲津山基準点〉〔点NKP〕までの距離と、

仲津山古墳の「前方部側縁基準点」〔点NKX〕から「仲津山基準点」〔点NKP〕までの距離を比較すると、 $NKP-TSX : NKP-NKX = 4 : 1$ となる。

結論として、津堂城山古墳の「墳丘主軸ライン」を延長して設定した「仲津山基準点」〔点NKP〕から、仲津山古墳の「前方部側縁基準点」〔点NKX〕および「前方部左側縁ライン」が設定されている。本稿では、直線TSX-NKPを〈津堂城山基準線〉、直線NKP-NKXを〈仲津山基準線〉と呼称する。

## （2）仲津山古墳と誉田御廟山古墳の〈空間配置〉（図23）

古市古墳群において、仲津山古墳の次に築造された大型前方後円墳は、誉田御廟山古墳である。ここでは、仲津山古墳と誉田御廟山古墳の位置関係を検討する。なお、誉田御廟山古墳の東側に隣接する二ツ塚古墳についても、誉田御廟山古墳と一体のものとして見做し、併せて検討する。

まず、仲津山古墳の「前方部左側縁ライン」を南西側に延長し、 $NKP-NKX : NKP-KGP = 4 : 1$ になるように点KGPを設定する。この点KGPを、誉田御廟山古墳の「墳丘主軸基準点」と呼称する。

つぎに、 $KGP-KGX : NKO-KGX = 5 : 8$ になるように点KGX（誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」）を設定する。線分KGX-KGPが誉田御廟山古墳の「墳丘主軸ライン」、線分KGX-NKPが誉田御廟山古墳の「前方部右側縁ライン」となる。本稿では、後者を〈誉田御廟山基準線〉と呼称する。

なお、誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕と、仲津山古墳の「後円部中心点」〔点NKO〕を結ぶライン上に、二ツ塚古墳の「墳丘主軸ライン」が設定されている。二ツ塚古墳の「前方部側縁基準点」を点FDXとすると、 $KGX-FDX : KGX-NKO = 3 : 8$ となる。本稿では、直線NKO-KGXを〈二ツ塚基準線〉と呼称する。

結論として、「仲津山基準点」〔点NKP〕および仲津山古墳の「前方部左側縁ライン」上に位置する誉田御廟山古墳の「墳丘主軸基準点」〔点KGP〕から、誉田御廟山古墳の「墳丘主軸ライン」、仲津山古墳の「仲津山基準点」〔点NKP〕から誉田御廟山古墳の「前方部右側縁ライン」が設定されている。また、二ツ塚古墳については、仲津山古墳の「後円部中心点」〔点NKO〕および誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕によって、「墳丘主軸ライン」が設定されている<sup>(25)</sup>。

## （3）誉田御廟山古墳と野中宮山古墳・古市墓山古墳の〈空間配置〉（図24）

古市古墳群における中規模前方後円墳として位置づけられる、野中宮山古墳および古市墓山古墳について、誉田御廟山古墳との位置関係を検討する。

野中宮山古墳の「墳丘主軸ライン」を東側に延長すると、誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕に到達する。換言すれば、誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕を基点として、西側に直線を延ばすことによって、野中宮山古墳の「墳丘主軸ライン」が決定されていると見做される。

一方、古市墓山古墳の「前方部左側縁ライン」を東側に延長すると、誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕に到達する。同古墳の場合も、誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕を基点として、西側に直線を延ばすことによって、「前方部左側縁ライン」が決定されていると見做される。

野中宮山古墳および古市墓山古墳については、誉田御廟山古墳よりわずかに先行する築造年代が

想定されるが、誉田御廟山古墳との間に、上記のような〈空間配置〉が認められる点は重要である。なお、 $KGX-NMX : KGX-FHX = 3 : 2$  という整数比をなす点にも注意が必要である。

#### (4) 誉田御廟山古墳と市野山古墳の〈空間配置〉 (図25)

古市古墳群において、誉田御廟山古墳の次に築造された大型前方後円墳は、市野山古墳である。ここでは、誉田御廟山古墳と市野山古墳の位置関係を検討する。

市野山古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」をそれぞれ南に延ばした交点を、市野山古墳の「前方部側縁基準点」〔点ICX〕と呼称すると、誉田御廟山古墳の「主軸基準点」〔点KGP〕と「前方部側縁基準点」〔点KGX〕を結ぶ距離を基準として、 $KGX-KGP : KGX-ICX = 1 : 2$  となるように、市野山古墳の「前方部側縁基準点」〔点ICX〕が設定されている。

結論として、誉田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕の位置および「墳丘主軸基準点」〔点KGP〕との距離によって、市野山古墳の「前方部側縁基準点」〔点ICX〕の位置が決定されている。本稿では、この直線を〈誉田御廟山／市野山基準線〉と呼称する。

#### (5) 誉田御廟山古墳・岡ミサンザイ古墳・河内大塚古墳の〈空間配置〉 (図26)

市野山古墳に後続する岡ミサンザイ古墳は、誉田御廟山古墳の1.5kmほど西に立地し、河内大塚古墳は、岡ミサンザイ古墳のさらに2.5kmほど西に立地する。

誉田御廟山古墳の「後円部中心点」を点KGO、岡ミサンザイ古墳の「後円部中心点」を点OMO、河内大塚古墳の「後円部中心点」を点KOOとすると、この三古墳の「後円部中心点」は一直線上に並んでいる (図26)。三古墳の築造時期については、河内大塚古墳の築造年代がやや不確定ではあるが、「誉田御廟山古墳→岡ミサンザイ古墳→河内大塚古墳」という順番で大過ないと思われる。

3古墳の距離を比較すると、 $KGO-OMO : KGO-KOO = 3 : 8$  という整数比になっている。しかも、誉田御廟山古墳の「後円部中心点」〔点KGO〕から各基準点への距離と比較すると、 $KGO-KGP : KGO-OMO : KGO-KOO = 1 : 3 : 8$  となる。

岡ミサンザイ古墳の「後円部中心点」〔点OMO〕は、誉田御廟山古墳の「後円部中心点」〔点KGO〕からの距離によって決定されている。また、河内大塚古墳の「後円部中心点」〔点KOO〕は、誉田御廟山古墳の「後円部中心点」〔点KGO〕および岡ミサンザイ古墳の「後円部中心点」〔点OMO〕を結ぶ線分KGO-OMOをさらに西側に延長し、各基準点間の距離によって決定されている。本稿では、この直線KGO-OMO-KOOを〈誉田御廟山／岡ミサンザイ／河内大塚基準線〉と呼称する。

従来、河内大塚古墳は古市古墳群には含まれないという理解が主流であったが、本項で論じたように、河内大塚古墳の「後円部中心点」の位置が、誉田御廟山古墳および岡ミサンザイ古墳の「後円部中心点」どうしの位置関係によって決定されているとすれば、河内大塚古墳を古市古墳群に含めるのが妥当である。

#### (6) まとめ—古市古墳群の〈空間構制〉 (図27)

古市古墳群では、市野山古墳までの段階には、「前代」の大型前方後円墳の位置や方向に基づいて、「次代」の大型前方後円墳の「前方部側縁基準点」の位置および「前方部側縁ライン」の方向が決定されている。

一方、岡ミサンザイ古墳以降の段階になると、「後円部中心点」どうしの方向性および「後円部中心点」どうしの距離によって、「後円部中心点」の位置が決定されている<sup>(26)</sup>。

なお、菅田御廟山古墳と二ツ塚古墳・野中宮山古墳・古市墓山古墳については、同時期の大型前方後円墳どうしの位置関係とは異なり、それぞれの「墳丘主軸ライン」が共通の基点（菅田御廟山古墳の「前方部側縁基準点」〔点KGX〕）から設定されている点が特筆される<sup>(27) (28)</sup>。

## 10. 百舌鳥古墳群の〈空間構制〉—古墳時代中期「盟主墓」の空間分析（2）—

百舌鳥古墳群（図28）に所在する大型前方後円墳の〈空間構制〉について検討する。

「盟主墓」である可能性が高い大型古墳として、築造順に、上石津ミサンザイ古墳（前方後円墳、墳長約365m、「履中天皇陵」）、大仙陵古墳（前方後円墳、墳長約486m、「仁徳天皇陵」）、土師ニサンザイ古墳（前方後円墳、墳長約300m、「東百舌鳥陵墓参考地」）の3基を対象とする。この3古墳の築造時期については、「上石津ミサンザイ古墳→大仙陵古墳→土師ニサンザイ古墳」という先後関係では異論の余地はない。

「前代」の大型前方後円墳の位置情報を基準として、「次代」の大型前方後円墳の築造場所がどのように決定されていたのか、順次検討する。

### （1）上石津ミサンザイ古墳と大仙陵古墳の〈空間配置〉（図29）

百舌鳥古墳群において、最初に築造された大型前方後円墳は上石津ミサンザイ古墳で、その次に築造された大型前方後円墳は大仙陵古墳である。

上石津ミサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」をそれぞれ北に延ばした交点を、上石津ミサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点KMX〕と呼称する。また、大仙陵古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」をそれぞれ北に延ばした交点を、大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕と呼称する。

両古墳の位置関係を検討すると、上石津ミサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」を北に延ばした線上に、大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕および「前方部右側縁ライン」が合致する。

上石津ミサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点KMX〕と、大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕を結ぶ線上に、 $KMX-MP : DSX-MP = 1 : 4$  になるように点MPを設定すると、点MPが土師ニサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」を決定する上での基準点になっていることが判明しているので（後述）、この点MPを「百舌鳥古墳群基準点」と呼称しておく。

結論として、大仙陵古墳の築造位置を決定するにあたっては、上石津ミサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」を北に延長した上で、その線上に位置する「百舌鳥古墳群基準点」からの距離に基づいて、大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕および「前方部右側縁ライン」が設定されている。本稿では、この直線を〈上石津ミサンザイ／大仙陵基準線〉と呼称する。

### （2）大仙陵古墳と土師ニサンザイ古墳の〈空間配置〉（図30）

百舌鳥古墳群において、大仙陵古墳に後続する大型前方後円墳は土師ニサンザイ古墳である。

前項では、上石津ミサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点KMX〕と、大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕を結ぶ線上に、 $MP-KMX : MP-DSX = 1 : 4$  となるように、「百舌鳥古墳群基準点」〔点MP〕を設定している。

この「百舌鳥古墳群基準点」〔点MP〕を通り、上石津ミサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」および大仙陵古墳の「前方部右側縁ライン」を含む直線に直交する直線を設定すると、この直線は、

土師ニサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」と合致する。

土師ニサンザイ古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」を東に延ばした交点を、土師ニサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点HNX〕と呼称する。「百舌鳥古墳群基準点」〔点MP〕から、上石津ミサンザイ古墳・大仙陵古墳・土師ニサンザイ古墳それぞれの「前方部側縁基準点」までの距離を比較すると、MP-KMX：MP-DSX：MP-HNX＝1：4：8という整数比をなす<sup>(29)</sup>。

結論として、土師ニサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点HNX〕および「前方部右側縁ライン」は、上石津ミサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点KMX〕および大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕との位置関係によって設定されている。本稿では、この直線を〈土師ニサンザイ基準線〉と呼称する。

### (3) 上石津ミサンザイ古墳と「随伴古墳」の〈空間配置〉(図31)

百舌鳥古墳群における大型前方後円墳と、「盟主墓」には含まれないと見做される中型前方後円墳との位置関係について検討する。

まず、上石津ミサンザイ古墳の周辺に立地する、百舌鳥大塚山古墳(前方後円墳、墳長約168m)、イタスケ古墳(前方後円墳、墳長約146m)、百舌鳥御廟山古墳(前方後円墳、墳長約203m、「百舌鳥陵墓参考地」)について、上石津ミサンザイ古墳との位置関係を検討する。

上記4古墳の築造時期については、上石津ミサンザイ古墳・百舌鳥大塚山古墳がやや先行し、百舌鳥御廟山古墳・イタスケ古墳がやや後出する見做される(埴輪検討会2022など)。

まず百舌鳥大塚山古墳であるが、同古墳の「後円部中心点」〔点MOO〕は、上石津ミサンザイ古墳の「墳丘主軸ライン」上に位置している。

イタスケ古墳については、その「墳丘主軸ライン」を西に延ばすと、上石津ミサンザイ古墳の「後円部中心点」〔点KMO〕を通る。上石津ミサンザイ古墳とイタスケ古墳の位置関係については、KMO-KMX：KMO-ITX＝1：3という整数比が認められる。

百舌鳥御廟山古墳については、その「墳丘主軸ライン」を西に延ばすと、上石津ミサンザイ古墳の「前方部側縁基準点」〔点MGO〕を通る。上石津ミサンザイ古墳と百舌鳥御廟山古墳の位置関係については、KMX-KMO：KMX-MGO＝1：4という整数比が認められる。

上記をまとめると、上石津ミサンザイ古墳およびイタスケ古墳・百舌鳥御廟山古墳の位置関係については、KMX-KMO：KMO-ITX：KMX-MGO＝1：3：4という整数比をなす。ただし、イタスケ古墳では、この整数比から「前方部側縁基準点」〔点ITX〕を設定しているのに対して、百舌鳥御廟山古墳では、この整数比から「後円部中心点」〔点MGO〕を設定しているという大きな相違点がある。

なお、本項で俎上に載せている3古墳—百舌鳥大塚山古墳・イタスケ古墳・百舌鳥御廟山古墳—の「後円部中心点」が一直線上に並んでいる点にも、あらためて注意を払う必要がある。これらの3古墳の築造位置は、上述の通り、いずれも上石津ミサンザイ古墳の「墳丘主軸ライン」(あるいは「墳丘主軸ライン」上に位置する点(点KMOないし点MMX))を基準として決定されており、上石津ミサンザイ古墳の「随伴古墳」としての親縁性・共通性を看取できる。

上石津ミサンザイ古墳・大仙陵古墳・土師ニサンザイ古墳の3古墳については、「前方部側縁ライン」によって相互の位置関係が規定されていたのに対して、百舌鳥大塚山古墳・イタスケ古墳・百舌鳥御廟山古墳の3古墳については、上石津ミサンザイ古墳の「墳丘主軸ライン」によって相互の位置関係が規定されているという点で非常に大きな懸隔がある。前者のような「盟主墓」どうし

の位置関係を相互に規定する「論理」と、後者のような「盟主墓」と「随伴古墳」の位置関係を相互に規定する「論理」が全く異なっている点に注意を払う必要がある。

#### (4) 大仙陵古墳と「随伴古墳」の〈空間配置〉(図32)

田出井山古墳(前方後円墳、墳長約148m)および永山古墳(前方後円墳、墳長約100m)について、大仙陵古墳との位置関係を検討する。永山古墳については築造年代の決め手に欠けるが、大仙陵古墳と田出井山古墳はほぼ同時期の築造と見做される。

田出井山古墳については、「前方部側縁ライン」を南に延ばすと、大仙陵古墳の「前方部側縁基準点」〔点DSX〕を通る。一方、永山古墳の「後円部中心点」を点NGOとすると、TDX-DSX : NGO-DSX = 1 : 4 という整数比をなす。

上石津ミサンザイ古墳・大仙陵古墳・土師ミサンザイ古墳の3古墳については、「前方部側縁ライン」によって相互の位置関係が規定されていたのに対して、大仙陵古墳と田出井山古墳・永山古墳との位置関係については、大仙陵古墳の「前方部側縁ライン」によって規定されておらず、「前方部側縁基準点」〔点DSX〕との距離のみによって規定されている点が特筆される。田出井山古墳および永山古墳を、大仙陵古墳の「随伴古墳」と見做す理由である。

現在、田出井山古墳は、宮内庁によって「反正天皇陵」に治定されているが、上記のような〈空間配置〉からみても、本古墳が「盟主墓」でないことは明らかである。

#### (5) 土師ニサンザイ古墳・百舌鳥御廟山古墳・長塚古墳の〈空間配置〉(図33)

大仙陵古墳のすぐ南に長塚古墳(前方後円墳、墳長約106m)が存在する。

土師ニサンザイ古墳の「後円部中心点」〔点HNO〕と百舌鳥御廟山古墳の「後円部中心点」〔点MGO〕を結ぶ直線を北西に延ばすと、長塚古墳の「後円部中心点」〔点NTO〕を通る。

百舌鳥御廟山古墳と土師ニサンザイ古墳の築造年代については、「百舌鳥御廟山古墳→土師ニサンザイ古墳」という先後関係ではほぼ異論の余地はない。長塚古墳の築造時期については決め手に欠けるが、上記の〈空間配置〉から見る限り、長塚古墳の「後円部中心点」〔点NTO〕については、土師ニサンザイ古墳の「後円部中心点」〔点HNO〕および百舌鳥御廟山古墳の「後円部中心点」〔点MGO〕との位置関係によって決定されていると見做し得るので、両古墳に近い築造時期が想定される。

長塚古墳は、大仙陵古墳のすぐ南に築造されており、同古墳の「陪塚」である可能性が指摘される一方、前方部を西側に向けていることから、同古墳の「陪塚」には含まれない可能性も指摘されてきた。上記のような〈空間配置〉から推測する限り、長塚古墳については、大仙陵古墳の「陪塚」ではなく、百舌鳥御廟山古墳や土師ニサンザイ古墳との「系譜的關係」を読み取るのが妥当であろう。

なお、百舌鳥古墳群における、複数古墳の「後円部中心点」が一直線をなす上記のような〈空間構制〉のあり方は、古市古墳群において、誉田御廟山古墳・岡ミサンザイ古墳・河内大塚古墳の「後円部中心点」が一直線上に布置される状況と共通する。

誉田御廟山古墳・岡ミサンザイ古墳・河内大塚古墳はいずれも「盟主墓」の可能性が高いのに対して、本項で扱った三古墳は、土師ニサンザイ古墳が「盟主墓」、百舌鳥御廟山古墳が「随伴古墳」、長塚古墳がさらに下位の中規模前方後円墳である、という大きな相違点がある。「後円部中心点」を一直線に布置する〈空間構制〉のあり方が、「盟主墓」クラスの巨大古墳に限定されず、より下

位クラスの前方後円墳にも見出される点は重要である。

#### (6) まとめ—百舌鳥古墳群の〈空間構制〉— (図34)

百舌鳥古墳群においては、「盟主墓」としての大型前方後円墳の築造位置を決定する方法としては、「前代」の大型前方後円墳の位置や方向を基準として、「次代」の大型前方後円墳の「前方部側縁ライン」の方向および「前方部側縁基準点」の位置が決定されていたものと見做される。具体的には、上石津ミサンザイ古墳の位置を基準として大仙陵古墳の築造位置が決定され、上石津ミサンザイ古墳と大仙陵古墳の位置を基準として土師ニサンザイ古墳の築造位置が決定されている。

一方、各「盟主墓」のうち、上石津ミサンザイ古墳および大仙陵古墳には、それぞれ「随伴古墳」と呼称すべき中型前方後円墳が伴うが、土師ニサンザイ古墳には「随伴古墳」は見取できない。

百舌鳥大塚山古墳・イタスケ古墳・百舌鳥御廟山古墳の築造位置は、上石津ミサンザイ古墳との位置関係によって決定されていることから、これら3古墳は上石津ミサンザイ古墳の「随伴古墳」と見做される。

また、田出井山古墳・永山古墳の築造位置は、大仙陵古墳との位置関係によって決定されていることから、これら2古墳は大仙陵古墳の「随伴古墳」と見做される<sup>(30)</sup>。

### 11. 埼玉古墳群の〈空間構制〉—東国における首長墓の空間分析—

埼玉県行田市に所在する埼玉古墳群の〈空間構制〉について検討する。

埼玉古墳群には、大型前方後円墳8基・大型円墳2基が現存するほか、墳丘が削平された大型方墳1基・小型円墳14基の存在が確認されている (図35～37) (埼玉県教育委員会2018)。

本項で検討するのは、そのうち、墳丘規模の大きい前方後円墳8基および大型円墳1基の合計9基である (稲荷山古墳 (前方後円墳、墳長約120m)・二子山古墳 (前方後円墳、墳長約132m)・丸墓山古墳 (円墳、直径約105m)・瓦塚古墳 (前方後円墳、墳長約73m)・奥の山古墳 (前方後円墳、墳長約66m)・將軍山古墳 (前方後円墳、墳長約90m)・鉄砲山古墳 (前方後円墳、墳長約108m)・愛宕山古墳 (前方後円墳、墳長約55m)、中の山古墳 (前方後円墳、墳長約79m))<sup>(31)</sup>。

西都原古墳群・古市古墳群・百舌鳥古墳群の検討作業と同じく、各前方後円墳の「前方部側縁ライン」および「前方部側縁基準点」に着目し、各古墳の位置関係を検討する<sup>(32)</sup>。

各古墳の築造時期および先後関係については、とくに断らない限り、円筒埴輪編年に基づく『埼玉古墳群 総括報告書 I』の見解に準拠する (埼玉県教育委員会2018)。

#### (1) 稲荷山古墳と二子山古墳の〈空間配置〉 (図38)

まず、稲荷山古墳と二子山古墳の〈空間配置〉について検討する。両古墳の築造時期については、「稲荷山古墳→二子山古墳」という先後関係でほぼ確定している。ちなみに、稲荷山古墳は埼玉古墳群で最初に築造された前方後円墳である。

稲荷山古墳の「前方部右側縁ライン」と「前方部左側縁ライン」を北に延ばした交点を、稲荷山古墳の「前方部側縁基準点」〔点INX〕とし、同じく二子山古墳の「前方部側縁基準点」を〔点FTX〕とする。

稲荷山古墳の「前方部左側縁ライン」を南に延長することによって、二子山古墳の「前方部基準点」〔点FTX〕および「前方部左側縁ライン」を設定したものと見做される。

埼玉古墳群において、複数の古墳間で、「前方部側縁ライン」を「共有」する事例は、この稲荷

山古墳と二子山古墳のみである。本稿では、稲荷山古墳および二子山古墳の「前方部側縁ライン」を〈稲荷山／二子山基準線〉と呼称する。

### (2) 稲荷山古墳／二子山古墳と奥の山古墳の〈空間配置〉(図39)

前項で提示した〈稲荷山／二子山基準線〉を南に延ばすと、奥の山古墳の「前方部側縁基準点」〔点OYX〕を通る。ただし、〈稲荷山／二子山基準線〉の延長線は、奥の山古墳の「前方部左側縁ライン」とは合致しない。

この3古墳の位置関係は、 $INX-FTX : FTX-OYX = 4 : 5$ という整数比をなしており、奥の山古墳の築造位置は、稲荷山古墳および二子山古墳において「共有」された「前方部左側縁ライン」(〈稲荷山／二子山基準線〉)を基準として決定されている。従来、埼玉古墳群における中核的な首長墓系譜は、墳丘規模などを根拠として、「稲荷山古墳→二子山古墳→鉄砲山古墳」と見做されてきたが、上記の〈稲荷山／二子山基準線〉は鉄砲山古墳ではなく奥の山古墳の築造位置を規定していることから、稲荷山古墳・二子山古墳の「後継」古墳は奥の山古墳であると見做すのが妥当である。

ただし、稲荷山古墳と二子山古墳が「前方部左側縁ライン」を「共有」するのに対して、奥の山古墳では、同ライン上に「前方部側縁基準点」〔点OYX〕を布置するに過ぎない点は、大きな相違点である。

### (3) 二子山古墳と丸墓山古墳・瓦塚古墳の〈空間配置〉(図40)

二子山古墳と丸墓山古墳・瓦塚古墳の〈空間配置〉を検討する。丸墓山古墳の「中心点」を点MRO、瓦塚古墳の「後円部中心点」を点KWOとする。

二子山古墳の「前方部側縁基準点」〔点FTX〕と丸墓山古墳の「中心点」〔点MRO〕を結んだ距離は、同じく二子山古墳の「前方部側縁基準点」〔点FTX〕と瓦塚古墳の「後円部中心点」〔点KWO〕を結んだ距離と一致する( $FTX-MRO = FTX-KWO$ )。

丸墓山古墳および瓦塚古墳の築造位置は、二子山古墳の「前方部側縁基準点」〔点FTX〕との距離によって決定されており、上記3古墳の密接な関係性が想定される。丸墓山古墳・瓦塚古墳については、二子山古墳に近い築造時期が想定されており、上記の想定は、この編年観と整合的である。

稲荷山古墳・二子山古墳・奥の山古墳の位置関係が「前方部側縁ライン」の「共有」関係によって規定されているのに対して、二子山古墳と丸墓山古墳・瓦塚古墳の位置関係は、二子山古墳との距離によってのみ規定されている状況は対照的である。以上から、丸墓山古墳および瓦塚古墳については、二子山古墳の「随伴古墳」と見做すことが可能である。

### (4) 奥の山古墳・将軍山古墳・鉄砲山古墳の〈空間配置〉(図41)

奥の山古墳・将軍山古墳・鉄砲山古墳の〈空間配置〉について検討する。この3古墳の築造順序については、「奥の山古墳→将軍山古墳→鉄砲山古墳」と見做される。

将軍山古墳の「前方部側縁基準点」を点SGX、鉄砲山古墳の「前方部側縁基準点」を点TPXと呼称する。

奥の山古墳の「前方部左側縁ライン」を北に延ばした線上に、将軍山古墳の「前方部側縁基準点」〔点SGX〕および鉄砲山古墳の「前方部側縁基準点」〔点TPX〕が位置している。3古墳の位置関係は、 $OYX-SGX : SGX-TPX = 4 : 3$ という整数比をなす。

本稿では、この直線を〈奥の山／将軍山基準線〉と呼称する。前述の通り、奥の山古墳は、埼玉



古墳群の中ではやや小型の前方後円墳であるが、〈稲荷山・二子山基準線〉によってその築造位置が決定されている一方、〈奥の山・將軍山基準線〉の基点として、後続する將軍山古墳および鉄砲山古墳の築造位置を規定する重要な役割を果たしている<sup>(33)</sup>。

#### (5) 丸墓山古墳／鉄砲山古墳と中の山古墳の〈空間配置〉 (図42)

丸墓山古墳・鉄砲山古墳および愛宕山古墳の〈空間配置〉について検討する。

丸墓山古墳の「中心点」〔点MRO〕および鉄砲山古墳の「後円部中心点」〔点TPO〕を結ぶ直線を南に延ばすと、中の山古墳の「後円部中心点」〔点NYO〕を通る。

上記3古墳は、「丸墓山古墳→鉄砲山古墳→中の山古墳」の順に築造されていると見做されるので、中の山古墳の築造時に、丸墓山古墳の「中心点」〔点MRO〕と鉄砲山古墳の「後円部中心点」〔点TPO〕を結ぶ直線を南東に延長し、中の山古墳の「後円部中心点」〔点NYO〕の位置を決定したものである。本稿では、この直線を〈丸墓山／鉄砲山／中の山基準線〉と呼称する。

#### (6) 瓦塚古墳／奥の山古墳と愛宕山古墳の〈空間配置〉 (図43)

瓦塚古墳・奥の山古墳および愛宕山古墳の〈空間配置〉について検討する。

瓦塚古墳の「後円部中心点」〔点KWO〕および奥の山古墳の「後円部中心点」〔点OYO〕を結ぶ直線を北西に延ばすと、愛宕山古墳の「後円部中心点」〔点ATO〕を通る<sup>(34)</sup>。

上記3古墳は、「瓦塚古墳→奥の山古墳→愛宕山古墳」の順に築造されていると見做されるので、愛宕山古墳の築造時に、瓦塚古墳の「中心点」〔点KWO〕と奥の山古墳の「後円部中心点」〔点OYO〕を結ぶ直線を北に延長し、愛宕山古墳の「後円部中心点」〔点AYO〕の位置を決定したものである。本稿では、この直線を〈瓦塚／奥の山／愛宕山基準線〉と呼称する。

#### (7) まとめ—埼玉古墳群の〈空間構制〉 (図44)

今回の検討作業により、埼玉古墳群においては、以下の通り、各古墳の位置関係を規定する4本の〈基準線〉を見出すことができた。

- ① 〈稲荷山／二子山基準線〉
- ② 〈奥の山／將軍山基準線〉
- ③ 〈瓦塚／奥の山／愛宕山基準線〉
- ④ 〈丸墓山／鉄砲山／中の山基準線〉

①および②は、〈前方部側縁ライン〉および〈前方部側縁基準点〉を連ねる基準線であるのに対して、③および④は、〈後円部中心点〉どうしを結ぶ基準線である。

また、これ以外に、二子山古墳・丸墓山古墳・瓦塚古墳が、「一体的配置」をなし、丸墓山古墳および瓦塚古墳が二子山古墳の「随伴古墳」として位置付け得ることも明らかになった。

上記の検討結果を踏まえるならば、埼玉古墳群における中核的な首長墓系譜は、「稲荷山古墳→二子山古墳→奥の山古墳→將軍山古墳→鉄砲山古墳」として辿ることが可能であり、丸墓山古墳、瓦塚古墳および中の山古墳は中核的な首長墓系譜から除外するべきものであると考える<sup>(35)</sup>。

## 12. 大型前方後円墳の〈空間構制〉—何が物象化されているのか—

### (1) 各古墳群の〈空間構制〉から見えてくるもの

ここまで、西都原古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群、埼玉古墳群を構成する大型前方後円墳の

〈空間構制〉について検討してきた。各古墳群における〈空間構制〉のあり方は細部まで一致するわけではないが、大局的に見ると幾つかの共通点が見えてくる。

古墳の築造位置を決定するという行為は、「先置古墳」の「位置」を「基準」として、「後置古墳」の「位置」を決定する行為に他ならない<sup>(36)</sup>。「基準」の選択方式によって、以下のA型～C型の3種類に大別できる。

**A型：「後円部中心点」基準タイプ** 複数の「先置古墳」の「後円部中心点」（ないし円墳の場合「中心点」）どうしを結ぶ線（「中心点結合線」）によって「後置古墳」の「中心点」を決定する。「中心点」が一直線上に並ぶだけではなく、各「中心点」間の距離についても何らかの基準により整数比をなす場合がある<sup>(37)</sup>。

**A 1型：「中心点結合線」延長型：**「中心点結合線」を延長することによって「後置古墳」の「中心点」を決定する。

**A 2型：「中心点結合線」分割型と、**「中心点結合線」を分割することによって「後置古墳」の「中心点」を決定する<sup>(38)</sup>。

**B型：「墳丘主軸線」基準タイプ** 「先置古墳」の「墳丘主軸線」を延長することによって、「後置古墳」の築造位置を決定する。古市古墳群において、津堂城山古墳の「墳丘主軸線」を延長することによって仲津山古墳の「前方部左側縁ライン」が決定されている例や、百舌鳥古墳群において、上石津ミサンザイ古墳の「墳丘主軸線」上に百舌鳥大塚山古墳の「後円部中心点」が位置している例がある。

**C型：「前方部側縁」基準タイプ** 「先置古墳」の「前方部側縁」を延長した直線（「前方部側縁ライン」）ないし「前方部側縁交点」を基準として、「後置古墳」の「前方部側縁ライン」を決定する。「前方部側縁交点」どうしの距離が何らかの基準により整数比をなすのが基本である。この方式は、古市古墳群・百舌鳥古墳群において見られるほか、西都原古墳群や埼玉古墳群でも採用されている。

**C 1型：**「先置古墳」の「前方部側縁ライン」に基づき、「後置古墳」の「前方部側縁ライン」（および「前方部側縁基準点」）を決定する。

**C 2型：**「先置古墳」の「前方部側縁ライン」に基づき、「後置古墳」の「前方部側縁基準点」を決定する。

このほか、「先置古墳」の「前方部側縁ライン」の直交ラインに基づいて「後置古墳」の「墳丘主軸ライン」を設定する場合も、C型に含める。

A型については、第4節で検討した通り、大和古墳群〔中山支群〕に淵源を求めることができる。

B型については、第9節で検討した通り、古市古墳群における、津堂城山古墳と仲津山古墳との位置関係に淵源を求めることができる。

またC型については、第5節で検討した通り、柳本古墳群（〔柳本支群〕・〔渋谷支群〕）に淵源を求めることができる。

古市古墳群では、仲津山古墳・誉田御廟山古墳・市野山古墳までは、「前方部側縁ライン」に基づいて築造位置が決定されているのに対して（C 1型）、その後の岡ミサンザイ古墳、河内大塚古墳については、「後円部中心点」に基づいて築造位置が決定されている（A 1型）。

百舌鳥古墳群では、上石津ミサンザイ古墳・大仙陵古墳・土師ニサンザイ古墳といった「盟主墓」については、「前方部側縁ライン」に基づいて築造位置が決定されているのに対して（C 1型）、百舌鳥大塚山古墳・イタスケ古墳・百舌鳥御廟山古墳・長塚古墳といった「随伴古墳」については、

「後円部中心点」に基づいて築造位置が決定されている（A型）。

また埼玉古墳群では、稲荷山古墳と二子山古墳の位置関係は「前方部側縁ライン」に基づいて築造位置が決定されており（C1型）、奥の山古墳・將軍山古墳・鉄砲山古墳の位置関係は「前方部側縁基準点」に基づいて決定されている（C2型）。瓦塚古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳の位置関係および丸墓山古墳・鉄砲山古墳・中の山古墳の位置関係は、それぞれ「後円部中心点」に基づいて決定されている（A1型）。

## （2）「前方部側縁」基準タイプ（C型）と「後円部中心点」基準タイプ（A型）の相違

今回検討対象とした大型古墳群において、B型はほぼ認められず、A型・C型が大半である。古市古墳群、西都原古墳群、埼玉古墳群において、いずれもC型からA型への移行が認められる点は非常に興味深く、重要である。

A型（「後円部中心点」基準タイプ）とC型（「前方部側縁」基準タイプ）の本質的な相違はどこにあるのであろうか。

まず、C型（「前方部側縁」基準タイプ）が基準とする「前方部側縁ライン」については、古墳築造以前にしか設定できない「基準線」である、という点が最も重要である。「前方部側縁」自体は、古墳築造後も存在し視認できるが、その段階で「前方部側縁」を後円部側に延長することは、「前方部側縁」と「前方部側縁基準点」の間に「後円部墳丘」が構築されているため、不可能である。

「前方部側縁」と「前方部側縁基準点交点」を結ぶ「前方部側縁ライン」は、前方後円墳の墳丘構築前には「直線」として視認することが可能であるが、墳丘構築に伴って後円部墳丘の下部に「埋め込まれる」ことが不可避であり、古墳の築造後にそれを視認することは不可能である。本稿では、「前方部側縁ライン」が本来有している上記のような特質を鑑み、「前方部側縁ライン」を〈埋め込まれた「基準線」〉と呼称する。ある前方後円墳が築造された後、その「前方部側縁ライン」を用いて、他の古墳の築造位置を決定するのは困難である、ということの意味している。

「前方部側縁ライン」を共有する複数の前方後円墳については、各古墳の築造前に「前方部側縁ライン」を共有する「設計」がなされていたこと、換言すれば、設計段階での「共時性」が保証された古墳である可能性がきわめて高いと見做される。

これに対して、「後円部中心点」基準タイプの場合は、「基準線」が墳丘下に「埋め込まれる」こともなく、既存の前方後円墳2基の「後円部中心点」を結ぶことにより、古墳築造時に「構想」されていなかった「基準線」を新たに「創出」することができる点が特徴である。本稿では、「後円部中心点」を結ぶ「基準線」を〈開かれた「基準線」〉と呼称する。

「前方部側縁ライン」を共有し、相互に連繫されているのは、古市古墳群では仲津山古墳／誉田御廟山古墳・市野山古墳の3基、百舌鳥古墳群では上石津ミサンザイ古墳・大仙陵古墳・土師ニサンザイ古墳の3基に限定されており、いずれも「盟主的首長墓」と目される巨大前方後円墳である。

また埼玉古墳群では、C1型の「前方部側縁」基準タイプに該当するのは稲荷山古墳・二子山古墳の2基のみで、C2型の「前方部側縁」基準タイプに該当するのは、奥の山古墳・將軍山古墳・鉄砲山古墳の3基のみである。この5基こそ、埼玉古墳群における中核的な首長墓系譜を構成する前方後円墳と見做すことが可能である<sup>(39)</sup>。

ちなみに、大型前方後円墳の「陪塚」のなかには、「前方部側縁」に直交する線上に「陪塚」として方墳を配置する例が見られるが、これらについても、〈埋め込まれた基準線〉として「前方部

側縁ライン」を利用しているということになる。即ち、このような配置をなす「陪塚」の築造位置の決定は、主墳の設計と一体的に行われていたと見做なすのが自然である。

### （3）大型前方後円墳の〈空間構制〉から読み取れるもの

大和古墳群・柳本古墳群に始まり、古市古墳群および百舌鳥古墳群に至るまで、大型前方後円墳の〈空間構制〉について、順次検討を行ってきた。その過程で、大型前方後円墳の築造位置の決定に際して、様々な「基準点」を設定し、様々な「基準線」を共有していたことを明らかにすることができた。

なかでも最も大きな画期として位置付けられる、「前方部側縁」基準タイプの「築造位置決定」方式（C型）は、古市古墳群では仲津山古墳から誉田御廟山古墳・市野山古墳まで、百舌鳥古墳群では上石津ミサンザイ古墳から大仙陵古墳・土師ニサンザイ古墳まで継続することが確認できた。

ちなみに、古市古墳群では、その後の岡ミサンザイ古墳および河内大塚古墳の築造に際しては、「後円部中心点」基準タイプ（A型）への転換が認められる。百舌鳥古墳群では、土師ニサンザイ古墳以降、「盟主墓」の可能性のある大型前方後円墳は築造されていない。

古市古墳群および百舌鳥古墳群で看取された、「C型からA型への転換」は、西都原古墳群や埼玉古墳群においても認められる。畿内中枢部における古墳築造位置の決定方式—即ち、畿内中枢部と同様な「論理」と「構造」を有する〈空間構制〉が、南九州最大規模の女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳を擁する西都原古墳群、さらには、金錯銘鉄剣が出土した稲荷山古墳の築造を契機として築造が開始される埼玉古墳群においても明瞭に看取できる点は、大型前方後円墳の築造位置決定方式（〈空間構制〉の「論理」と「構造」）が、関東地域から南九州地域まで広く「共有」されていたことを示している。

各古墳群における大型前方後円墳の〈空間構制〉を仔細に見ていくと、「先代」の首長墓（「前置古墳」）と「次代」の首長墓（「後置古墳」）の位置関係が、きわめて厳密かつ論理的に決定されていたことが明瞭に示されている。各古墳群においては、「先代」首長と「次代」首長の関係性が、継起的に築造された大型前方後円墳どうしの布置（〈空間構制〉）として「物象化」されているのである。

古市古墳群や百舌鳥古墳群において、「前方部側縁」基準タイプ（C型）の位置関係が看取できるのは、一部の巨大前方後円墳に限定されており、その他の中・小型前方後円墳については、「後円部中心点」基準タイプ（A型）の位置関係が看取される。

このように、「前方部側縁」基準線が、「盟主墓」級の超大型前方後円墳にしか採用されていないという事実は、被葬者のランクに応じて、古墳の築造位置決定の論理・方式を意図的に区別していた可能性を示唆している。これは翻って、各古墳の「築造位置決定方式」を峻別することにより、それぞれの被葬者のランクや被葬者どうしの関係性を具体的に読み解き得る可能性を示している。

古墳どうしの「位置関係」が、埋葬された被葬者間の関係性に応じて差異化されているのであれば、「古墳群」という〈空間構制〉自体が、被葬者間の「関係性」そのものを物象化したものと見做すことが可能である。その場合、「古墳群」という〈空間構制〉の要素である「古墳」は、それぞれ「被葬者」そのものを物象化したものと見做なすのが自然である。

冒頭で、「全ての墳輪配置は、〈首長〉を物象化／実体化する装置である」という前稿での結論を提示しつつ（犬木2016a：1頁）、「では、なぜ、そのような墳輪を古墳に配置したのか」という問いを提示したが、本稿で提示した「古墳と古墳群」という〈空間構制〉の「論理」と「構造」を踏まえるならば、「古墳そのものが、〈首長〉を物象化／実体化する装置であるから」という現時点

での「答え」を用意することが可能である。

葬送過程を経て、〈首長〉の霊威が他界へと赴いた後においても、残された「古墳」は、首長としての唯一無二の〈身体性〉を物象化／実体化するモノとして、「そこ」に厳然と存在し続けている筈であり、継起的に造営された「古墳群」は〈「空間」化された「時間」〉ないし〈「空間」化された「系譜」〉という準位において、首長系譜の〈歴史性〉を物象化／実体化し、その〈実在性〉を可視化する機能を保持し続けていたと考える<sup>(40)</sup>。

### 13. 結語に代えて

本稿で提示した大型前方後円墳の〈空間構制〉論に至る着想は、宮崎県・西都原古墳群での長期間に亘る発掘調査および出土埴輪の整理作業から得られたものである。

第8節で述べた通り、西都原古墳群においては、古墳時代前期段階では大半の古墳が西都原台地の縁辺部に築造されていたが、古墳時代中期段階になると、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原169～171号墳の5基は、一転して台地の中央部に「孤立的」に築造される。

初めてこれら5基の古墳を見た時に、その墳形・規模は非常にバラエティに富み、「階層性」や「系譜性」など何らかの共時的／通時的関係を明示しているように思われた。しかも女狭穂塚古墳の「真正」の陪塚である西都171号墳を除くと、他の4基は、それぞれ「微妙」な距離をあけて配置されている。

その後、これら5基から出土した埴輪の調査研究を進める過程で、これらの埴輪が「女狭穂塚系列」および「男狭穂塚系列」に大別されることが判明する(犬木2007・2015)。長らく男狭穂塚古墳の「陪塚」とされてきた西都原169号墳の埴輪が、「男狭穂塚系列」ではなく「女狭穂塚系列」であるという事実は、西都原古墳群の〈空間構制〉を解明する上で、きわめて大きなヒントを与えてくれることになった。

女狭穂塚古墳の「前方部右側縁ライン」および男狭穂塚古墳の「前方部左側縁ライン」が重要な意味をもっていることに気付くと、西都原古墳群「中央群」における〈空間構制〉の全容解明まで、さほど多くの時間を要することはなかった(犬木2016b・2019)。

古墳時代における僻遠の地・西都原に築造された「畿内的」な古墳において、このような〈空間構制〉が見出されたことから、その〈空間構制〉の淵源が畿内中枢部に由来するであろうことは、容易に予測できることであった。

「畿内中枢部では、「主墳／陪塚」が織りなす空間構制が複雑に錯綜・重畳しているため確認できていないと考える。今後各地域における同様な分析が期待される。」と記したこともあるが(犬木2019c: 185頁)、「前方部側縁ライン」という着眼点が突破口となり、古市古墳群、百舌鳥古墳群、埼玉古墳群における〈空間構制〉については、短時間のうちに全体像を把握することができた。その後、細部の確認作業に若干の時間を要するとともに、その前史としての大和古墳群・柳本古墳群の〈空間構制〉についても検討したため、成稿まで予想外の時間を要することになった。

詳細は別稿に譲りたいが、大型前方後円墳の〈空間構制〉を丹念に解きほぐすことによって、「盟主的首長墓」とそれ以外の「首長墓」を弁別することも可能であると考え、大和古墳群・柳本古墳群から古市古墳群・百舌鳥古墳群に至る〈空間構制〉の通時的変遷を検討することにより、これらの大型古墳群の造営主体どうしの関係性についても、新たな視点からの検討および提言が可能であろうと考えている。

古市古墳群・百舌鳥古墳群に帰属するような、「盟主的首長墓」の〈空間構制〉は、これまで数

多の先学諸賢が長らく対峙し深く格闘してきた〈アポリア〉であるが、本稿で提示した「素描」を踏まえるならば、「盟主的首長墓」および「随伴古墳」が織りなす〈空間構制〉の「論理」と「構造」が、存外にシンプルなものであったことは、大きな驚きであった。如何なるテーマにも通底するが、本義／本質／本源は常にシンプルなのだろう。

各古墳群の〈空間構制〉については、本稿で言及できなかった論点も少なくなく、未解明の事象も多々残されている。また本稿での分析対象は、地域・時期とも限定された一部の古墳にとどまっている。今後、さらに分析対象を拡大し、列島規模での〈空間構制〉論へと昇華させる所存である。

**付記 1** 本稿は、2016（平成28）年10月29日（土）に大阪大谷大学博物館にて行われた大阪大谷大学歴史文化学科公開講座《聖なるもののイメージ》において「埴輪の論理と構造」と題して報告した内容を踏まえつつ、2019（令和元）年10月26日（土）に同博物館にて行われた同公開講座《「空間」を読み解く—考古学と美術史学の視点から—》において「古墳群の空間分析—古墳の設計と配置の論理—」と題して報告した内容およびその後の研究成果を文章化したものである。

**付記 2** 本文にも記した通り、本稿の原点は、西都原古墳群の発掘調査および出土埴輪の調査研究にある（犬木2016b・2019）。しかしながら、その過程で様々なご高配と有益な示唆を頂いた北郷泰道、山中一郎、阪口英毅の諸氏は既に鬼籍に入られており、今回のささやかな研究成果をお伝えできないことがとても悔しく残念でならない。本稿を墓前に捧げるとともに、あらためてご冥福を祈念する次第である。

**付記 3** 〈空間分析〉の視点と方法は、東京大学大学院在学中の指導教官であった故・藤本強先生から学んだものである<sup>(41)</sup>。また、〈古墳群分析〉の視点と方法は、学生時代以来ご指導頂いている白石太一郎先生の「古墳と古墳群の研究」から学んだものである。締切を過ぎた「レポート」としては些か不十分な内容であるが、二人の師に対して御叱正を仰ぐとともに深甚の謝意を表したい。

## 謝辞

原稿の提出が著しく遅延し、他の執筆者の皆さんに大変ご迷惑をおかけすることになった。辛抱強くお待ち頂くとともに、粘り強く督促頂いた編集担当・今井澄子氏に心より感謝申し上げる。

2000（平成12）年4月に大阪大谷大学文化財学科（現・歴史文化学科）がスタートして以来、学生諸氏とともに、大和古墳群、柳本古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群などを、幾度となく、また隅なく歩き尽くしている。その折々の空間認識および観察所見が本稿の基礎となっている。以下、各世代の中心メンバーの名前を記すとともに、心から謝意を表したい。

近藤（犬木）麻美 [1期生]、竹中（金行）美智子 [1期生]、岡田（石津）晴菜 [2期生]、尾張友子 [3期生]、根岸（吉田）あかり [5期生]、安倍久仁子 [5期生]、松本祐樹 [7期生]、児玉翔太 [8期生]、椎葉健太 [8期生]、濱内優佳 [14期生]、中野徒仁 [16期生]、大谷 舞 [16期生]、橋本詩菜 [18期生]、東 春華 [18期生]、寺山千里 [19期生]

東殿塚古墳出土埴輪の実見にあたっては、石田大輔氏（天理市教育委員会）のお世話になった。末筆ながら感謝申し上げます。

各古墳群全体図の下図となる地図データについては、以下の諸氏・諸機関のご高配・ご助力を得た。心より感謝申し上げます（順不同）。

西都原古墳群：松林豊樹、堀田孝博、甲斐貴充、藤木 聡、松本 茂、日高広人、宮崎県立西都原考古博物館、

(株) 真和コンサルタント

古市古墳群・百舌鳥古墳群：関 真一、市川 創、柴田拓也、廣瀬時習、海邊博史、十河良和、田村唯史、大阪府教育委員会、大阪府立近つ飛鳥博物館、堺市教育委員会、堺市博物館

大和古墳群・柳本古墳群・古市古墳群・百舌鳥古墳群・埼玉古墳群における大型前方後円墳空間配置図の整図・編集については近藤麻美の尽力を得た。深く感謝申し上げる。

## 註

- (1) 本稿では、ある古墳群に含まれる複数の古墳の位置関係を「古墳の〈空間配置〉」、複数の「空間」が重畳する、より上位の位置関係を「古墳（ないし古墳群）の〈空間構制〉」と呼称する。
- (2) 白石太一郎は「大和政権の首長墓」（白石1969a、：25頁）あるいは「ヤマト政権」の「盟主墓」（白石1999：77頁）、都出比呂志は「大王陵」（都出1989：40頁）、近藤義郎は「畿内中枢の最高首長大古墳」あるいは「大王墳」（近藤1983：308・309頁）、広瀬和雄は「大王墓」（広瀬1988）、吉村武彦は「ヤマト王権の王墓」（吉村2010：49頁）、岸本直文は「倭国王墓」（岸本2020）と呼称する。なお、川西宏幸は、全長200m以上の古墳を「大型古墳」と呼称する（川西1988、p.36）。広汎な学史的整理が必要と考えるが別稿に譲りたい。
- (3) 原島礼二の仕事（原島1970a・b、同1971a）は、著書『大王の古墳』としてまとめられている（原島1971b）。原島は、「古墳相互の位置上の関係とは、一定の角度を通じた関係ではないか」という仮説のもと（同前40頁）、「王陵級の巨大な古墳」の「位置選定」の規則性・計画性の解読を試みている（図45）。見出された「規則性」には牽強付会な部分も見られるが、研究視点についてはあらためて評価されるべきであろう。
- (4) この時期、箸墓古墳において、特殊器台埴輪が種々の機会に採集されていたことが知られている（丸山1975・1987、近藤1995、春成2011、犬木2014など）。
- (5) 本稿では、ある程度の規模を有する中規模古墳を「随伴古墳」、小規模なものを「陪塚」として便宜的に区別している。両者の弁別が難しい場合も少なくないが、後述するように、「主墳」との位置関係の決定方式によって、「随伴古墳」と「陪塚」を弁別できる可能性がある。
- (6) 「中山支群」については「中山古墳群」「中山小支群」、「萱生支群」については「萱生古墳群」「萱生小支群」などという呼称もあるが、本稿では、「中山支群」「萱生支群」を用いる。
- (7) 西殿塚古墳・燈籠山古墳・中山大塚古墳の3古墳の「後円部中心点」が一直線上に並ぶことについては、東潮が簡潔に指摘している（東1981、22頁）。
- (8) 「柳本支群」については「柳本古墳群」「柳本小支群」、「渋谷支群」については「渋谷古墳群」「渋谷小支群」などという呼称もあるが、本稿では、「柳本支群」「渋谷支群」を用いる。
- (9) 行燈山古墳の後円部の南側約30mの地点に柘榴塚古墳（「い号陪塚」；円墳、直径約30m）、前方部の南西約140mの地点に百塚古墳（「ろ号陪塚」；円墳、直径約35m）が所在する。宮内庁の事前調査（笠野1976）によれば、柘榴塚古墳は横穴式石室を有する後期古墳なので、「陪塚」とは見做し得ない。百塚古墳は、行燈山古墳の築造時期と近い可能性があるが、若干離れており、本稿では行燈山古墳の「陪塚」には含めない。なお、大和天神山古墳の発掘調査担当者の一人である伊達宗泰は、同古墳に人体埋葬の痕跡が認められないことから、同古墳自体を行燈山古墳の「陪塚」と見做している（伊達ほか1963）。
- (10) 渋谷向山古墳とシウロウ塚古墳の間には赤坂古墳（「は号陪塚」；方墳、一辺約25m）、渋谷向山古墳の北北東には丸山古墳（「ろ号陪塚」；円墳、直径約20m）が存在し、いずれも、宮内庁により渋谷向山古墳の「陪塚」として管理されている。いずれも実態不明であるが、渋谷向山古墳に付随するとすれば、通有の「陪塚」の萌芽形態である可能性もある。

- (11) 筆者の見解については、前稿で一部言及している（犬木2016a：5頁）。
- (12) 古墳時代後期の事例ではあるが、珍敷塚古墳（福岡県うきは市）、鳥船塚古墳（同前）、原古墳（同前）の横穴式石室奥壁に描かれた船は、いずれも向かって右側に船首を向けている。
- (13) 和田晴吾は、「墓上での儀礼がくびれ部の造出へ下りてきた意味については、この儀礼を古墳周辺に集まったより多くの人々に見せることに意味があった」と推察するが（和田1997、206頁）、造出上面で実修される儀礼は、方形埴輪列の内部で行われるのが本来の姿であり、「外部には見せない」「外部からは見えない」ものであった筈である。東殿塚古墳の鱈付円筒埴輪に描かれた船画は細く弱い線刻で描かれており、遠くから見えることを目的として描かれているものではない。
- (14) 築造時期を問わず、「造出」が前方部の前面に付設された事例は皆無である（角南2014、山田2018など）。
- (15) 西殿塚古墳と東殿塚古墳、行燈山古墳と櫛山古墳、渋谷向山古墳とシウロウ塚古墳の位置関係の「相似性」については、前園実知雄が簡潔に指摘している（前園1971、35頁）。
- (16) 大和古墳群においては、中山大塚古墳の後円部の後方（北北東側）に「撥形」の「付帯施設」が設けられているとする見解がある（石部ほか1982、大和の古墳埴丘外域研究会1986、石部・宮川1987）。また、燈籠山古墳の後円部の後方（東側）にも「台形状平坦部」が付設されているという見解がある（石部ほか1982）。いずれも、当該箇所を「切断」せずに削り残している点は重要であるが、「付設」箇所の側縁が不整形で直線をなさず、定型的な「突出部」とは区別すべきものとする。
- (17) その後、佐紀古墳群では、大型前方後円墳に近接して、多数の「陪塚」が築造されるようになる。佐紀古墳群における主墳／陪塚のあり方は、古市古墳群・百舌鳥古墳群にも継承される（西川1961、山田1997など）。大和古墳群や柳本古墳群において「陪塚」の存在が明瞭ではないのに対して、佐紀古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群においては、主墳／陪塚関係がより明瞭化・顕在化する。
- (18) 台地中央に立地する女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原169～171号墳の5基については、別稿（犬木2015）で「西都原中央群」と呼称しており、本稿でもこれを踏襲する。
- (19) 西都原古墳群における種々の「基準点」については、他の古墳群（古市古墳群・百舌鳥古墳群・埼玉古墳群）における空間分析との整合性をはかりつつ、今回、記号を振り直している。
- (20) 女狭穂塚・男狭穂塚の先後関係については、石部正志が「畿内型前方後円墳である女狭穂塚古墳によって、柄鏡形前方後円墳である男狭穂塚古墳の一部を破壊した」という趣旨の発言をして以来（石部正志1959「南九州の中期古墳文化」古代学研究会例会研究発表、大阪市立美術館〔配布資料、現物未見〕）、議論が尽きず、女狭穂塚古墳先行説、男狭穂塚古墳先行説、同時期説が並立する状況であるが、両者の先後関係について必要以上に拘泥するよりも、両古墳の設計時点での一体性をこそ重視すべきであるとする。
- (21) 既に指摘している通り、男狭穂塚古墳および西都原170号墳には、「男狭穂塚系列」の埴輪が主体的に樹立されているが、「女狭穂塚系列」の埴輪もごく一部含まれている点には注意が必要である（犬木2007c・2015）。
- (22) 大和古墳群〔中山支群〕で看取された「直線的古墳配置」は、比較的短い期間に古墳築造が進められていくことをあらかじめ「予定」・「計画」していたと思われる。これに対して、西都原古墳群で看取された「直線的古墳配置」は、100年ほどの期間を経て結果的に形成された「直線的古墳配置」であるという点で、質的に異なるものである。
- (23) 女狭穂塚古墳築造後に〈男狭穂塚基準線〉を設定することは不可能ではないが、本来、女狭穂塚古墳の築造前に設定しておくべき基準線である、という意味である。
- (24) 宮内庁が管理する「王陵」クラスの前方後円墳については、墳丘の遺存状況も良く、種々の墳丘測量図から墳丘第2段目斜面下端ラインを、ある程度、認識・識別することが可能であるが、中・小形の前方後円墳の場合、墳丘測量図から墳丘第2段目斜面下端ラインを認識・識別することは難しい。また、葺石をもたない前方



- 後円墳の場合、発掘調査が行われていても、同ラインを正確に認識・識別することは容易ではない。
- (25) ニツ塚古墳を避けるかのように、誉田御廟山古墳の内濠・中堤が歪んでいることから、ニツ塚古墳の築造が誉田御廟山古墳に先行するという見方が一般的であるが、本文で述べたように、ニツ塚古墳の築造位置は、誉田御廟山古墳と仲津山古墳の位置関係によって決定されており、誉田御廟山古墳とニツ塚古墳が一体的に配置されていることは明らかである。ニツ塚古墳が誉田御廟山古墳の内濠および中堤の形状を歪めているのは、ニツ塚古墳が誉田御廟山古墳に先行して築造されたことによるのではなく、ニツ塚古墳の築造位置を決定するに当たって、仲津山古墳との距離（位置関係）を優先したことによると考える。
- (26) 「後円部中心点」どうしの方向性および「後円部中心点」どうしの距離によって、次代墓の「後円部中心点」の位置を決定する方式は、別項で述べた通り、西都原古墳群において、鬼の窟古墳の築造位置が、西都原265号墳・西都原202号墳との位置関係を考慮して決定された方式と共通する。
- (27) 隣接する2基の古墳の「墳丘主軸ライン」が共通の基点から始まる方式は、別項で述べた通り、西都原古墳群における女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳においても認められる（犬木2016b・2019）。
- (28) 古市古墳群における大型前方後円墳の配置に関しては、原島礼二の研究（原島1970a・b、1971a・b）や、石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 渉による研究（石部・田中・堀田・宮川1971、田中・宮川1976）がある。前者は「後円部中心点」どうしを結ぶ線分と角度を重視する点に特徴があり（図45）、後者は直交する「基準線」を重視する点に特徴があるが（図46）、いずれも当該古墳群における大型前方後円墳の位置関係の「論理」と「構造」を解明するには至っていない。
- (29)  $MP-KMX : MP-DSX : MP-HNX = 1 : 4 : 8$  という整数比を書き換えると、 $MP-KMX : MP-DSX : MP-HNX = 1^2 : 2^2 : 2^3$  となる。
- (30) 牛舌鳥古墳群における大型前方後円墳の位置関係に関する先行研究については、前掲註28に同じ。
- (31) 例えば、稲荷山古墳や二子山古墳については、本来、字名を冠して、「埼玉稲荷山古墳」「埼玉二子山古墳」と呼称すべきであるが、本文中では字名を省略する。
- (32) 前掲註24にも記した通り、埼玉古墳群においては、大型円墳である丸墓山古墳は葺石を有するが、他の前方後円墳は全て葺石をもたないので、本稿で重視する「墳丘第2段目斜面下端ライン」を発掘調査で確定することは容易ではない（埼玉県教育委員会2018）。
- (33) 鉄砲山古墳および奥の山古墳は非常に隣接する位置に築造されているが、これまで、その理由について合理的説明が示されたことはない。鉄砲山古墳の北側には二子山古墳との間に若干のスペースがあるにも関わらず、鉄砲山古墳が奥の山古墳に著しく近い位置に築造されているのは、鉄砲山古墳の築造位置を決定する際に、その「前方部側縁基準点」（点TPX）の設定を優先したことによると考えられる。隣接する古墳間の距離のバランスよりも、他の古墳の「前方部側縁基準点」との距離を優先したことがわかる。
- (34) 奥の山古墳、瓦塚古墳、愛宕山古墳の「後円部中心点」が一直線上に並ぶ事実については、増田逸朗が逸早く簡潔に記している（増田1986：139・141頁）。
- (35) 埼玉古墳群における古墳の位置関係に関しては、稲荷山古墳の発掘調査報告書（埼玉県教育委員会1980）において、古墳群全体の墳丘配置推定復原図（図36）が提示されて以降、増田逸朗（増田1980・1986）、高橋一夫（高橋2005）、坂本和俊（坂本1996）、関 義則（関2011）らが種々の見解を提示しているが（図47）、いずれも「墳丘主軸線」を重視しているため、埼玉古墳群における大型前方後円墳の位置関係の「論理」と「構造」を解明するには至っていない。
- (36) 本稿では、先に「配置」された前方後円墳を「先置古墳」、後に「配置」された前方後円墳を「後置古墳」と呼称する。同時に「配置」された古墳でも実際の築造時期が「同時」とは限らないし、「先置古墳」と「後置古墳」にあっても、実際の築造時期がそれほど違わない、という事態もあり得るので注意が必要である。

- (37) 大和古墳群〔中山支群〕における、西殿塚古墳・燈籠山古墳・中山大塚古墳・小岳寺塚古墳の「後円部中心点」は一直線上に位置しており、A型の嚙矢をなすが、「後円部中心点」間の距離が整数比をなしていない点において、古市古墳群で見出されたA型の「空間配置」とは一線を画すべきものである。
- (38) 実際には、個々の古墳の築造時期が不明な場合、A1型とA2型の区別は難しいし、個々の古墳の築造時期が異なっても、それらの古墳が築造される前に、予め「中心点結合線」が設定されていたかどうかを見極めるのは難しい。
- (39) 先行研究において、埼玉古墳群における中核的な首長墓系譜に奥の山古墳を含める見解は皆無であったと思われる。本稿では、「前方部側縁ライン」に着目することにより、奥の山古墳の位置づけに関して、先行研究とは大きく異なる結論を導き出すことができた。
- (40) その一方で、大型前方後円墳（および大多数の古墳）において、葬送行為の終了後に、継続的祭祀や維持管理などの痕跡が見出されていない点にも留意が必要である。
- (41) 私が東京大学大学院に在籍していた時、藤本強ゼミの統一テーマは「属性分析」であったが、私が大学院に進学する以前の統一テーマは「空間分析」であった。藤本が、常々「空間分析」の重要性和有効性を強調されていたことを思い出す。考古学の方法論についての最初の著書『考古学を考える』（藤本1985・1990）において、空間分析の実際についてかなりの紙幅を割いているし、後年の著書『考古学の方法』（藤本2000）でも空間分析についての記述が散見されるほか、「空間分析」と題されたコラムも所収されている（同前145頁）。

藤本 強1983a「考古学を考える 6 遺跡」『歴史公論』第9巻第11号、雄山閣出版、pp.111-118〔藤本1985所収、pp.71-84〕

藤本 強1983b「考古学を考える 7 遺構内の分析」『歴史公論』第9巻第12号、雄山閣出版、pp.125-132〔藤本1985所収、pp.85-98〕

藤本 強1984a「考古学を考える 8 遺跡のなかで」『歴史公論』第10巻第1号、雄山閣出版、pp.113-120〔藤本1985所収、pp.99-112〕

藤本 強1984b「考古学を考える 9 遺跡は分析の核」『歴史公論』第10巻第2号、雄山閣出版、pp.132-139〔藤本1985所収、pp.113-126〕

藤本 強1984c「考古学を考える 10 遺跡間の問題とまとめ」『歴史公論』第10巻第3号、雄山閣出版、pp.134-141〔藤本1985所収、pp.127-140〕

藤本 強1985『考古学を考える 方法論的展望と課題』雄山閣出版

藤本 強1990『考古学を考える 方法論的展望と課題 増補版』雄山閣出版

藤本 強2000『考古学の方法 調査と分析』東京大学出版会

## 参考文献

- 青木勘時1998「大和東南部の前期古墳について—天理市東殿塚古墳の調査成果を中心に—」『古代』第105号、早稲田大学考古学会、pp.115-128
- 青木勘時2001「初期埴輪と土器—天理市東殿塚古墳の埴輪配列とその意義—」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会、pp.97-112
- 東 潮1981「燈籠山古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊、奈良県教育委員会、pp.22-24
- 東 潮・関川尚功1981「東殿塚古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊、奈良県教育委員会、pp.29-34
- 甘粕 健1965「前方後円墳の研究—その形態と尺度について—」『東洋文化研究所紀要』第37冊、東洋文化研究所、

- pp.1-109 [甘粕 健2004『前方後円墳の研究』(同成社) 所収、pp.119-214]
- 有馬 伸2010「渋谷向山古墳の墳形について」『玉手山1号墳の研究』大阪市立大学考古学研究所報告第4冊、大阪市立大学日本史研究室、pp.159-182
- 有馬 伸・土屋隆史2017「景行天皇 山邊道上陵整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第68号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、pp.67-110
- 石田茂輔1976「崇神天皇陵の外堤護岸地区の調査」『書陵部紀要』第27号、宮内庁書陵部、pp.99-102
- 石野博信1976「大和平野東南部における前期古墳群の形成と構成」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』横田健一先生還暦記念会、pp.133-160 [石野博信1985『古墳文化出現期の研究』(学生社) 所収、pp.626-649]
- 石野博信1982「前期古墳周辺区画の系譜」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、pp.989-1000 [石野博信1985『古墳文化出現期の研究』(学生社) 所収、pp.413-427]
- 石野博信・関川尚功ほか1976『纏向 奈良県桜井市纏向遺跡の調査』桜井市教育委員会
- 石部正志1958「副葬用陪塚の発達」『考古学手帖』3、塚田 光、pp.1-2
- 石部正志1988「陪塚再考」『宇都宮大学教養部研究報告』第21号第1部、宇都宮大学教養部、pp.107-125
- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 渉1971「古市・百舌鳥古墳群における主要古墳間の連関規制について」『古代学研究』第60号、古代学研究会、pp.7-28
- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 渉1982「大和の若干の前期前方後円墳の築造企画」『考古学論攷』第8冊、奈良県立橿原考古学研究所、pp.63-77
- 石部正志・田中英夫・宮川 渉・堀田啓一1979「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』第89号、古代学研究会、pp.1-22
- 石部正志・宮川 渉1987「大和中山大塚古墳とその周辺の前期古墳」『日本考古学協会1987年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会、pp.61-66
- 泉 武2000「大和古墳群の造営と立地環境」『古代「おおやまと」を探る』学生社、pp.119-130
- 泉 武2003a「大和における前期古墳の立地と構造」『大和の古墳Ⅰ』新近畿日本叢書 大和の考古学 第2巻、近畿日本鉄道、pp.139-167
- 泉 武2003b「大和古墳群萱生支群の墳丘構造」『初期古墳と大和の考古学』学生社、pp.329-339
- 一瀬和夫2000「百舌鳥古墳群」『季刊考古学』第71号、雄山閣出版、pp.42-48
- 犬木 努2002「円筒埴輪という装置—形態論・機能論からの検討—」『東アジアと日本の考古学Ⅱ 墓制②』同成社、pp.53-80
- 犬木 努2007a「円筒埴輪の論理」『埴輪の構造と機能 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会、pp.82-93
- 犬木 努2007b「形象埴輪「列状配置」の本義—「今城塚」から東国の埴輪を考える—」『志学台考古』第7号、大阪大谷大学文化財学科、pp.1-21
- 犬木 努2007c「西都原の埴輪から見えてくるもの—カタチ・技術・工人・組織—」『巨大古墳の時代—九州南部の中期古墳—』宮崎県立西都原考古博物館、pp.44-48
- 犬木 努2008「円筒埴輪の論理」『埴輪の風景—構造と機能—』考古学リーダー13、六一書房、pp.109-130
- 犬木 努2012「埴輪からみた南九州と近畿—西都原古墳群を中心として—」『南九州とヤマト王権一日向・大隅の古墳—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録58、大阪府立近つ飛鳥博物館、pp.129-138
- 犬木 努2014「轟俊二郎が採集した埴輪片—『埴輪研究第1冊』の原風景—」『博古研究』第47号、博古研究会、pp.9-26
- 犬木 努2015「西都原古墳群の埴輪—「平成調査」から「大正調査」へ—」『西都原古墳群総括報告書』宮崎県教育委員会、pp.93-114

- 犬木 努2016a「埴輪のトポロジー—埴輪が現示する存在／所在／関係性—」『論集 他界観』大阪大谷大学歴史文化  
学科調査研究報告書第2冊、大阪大谷大学歴史文化学科、pp.1-40
- 犬木 努2016b「女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の設計原理—西都原169・170・171号墳も含めて—」『宮崎県立西都原  
考古博物館研究紀要』第12号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.51-61
- 犬木 努2019「近い陪塚／遠い陪塚／見えない陪塚—女狭穂塚古墳と「陪塚」群の空間構制—」『古墳と国家形成期  
の諸問題 白石太一郎先生傘寿記念論文集』山川出版社、pp.180-185
- 犬木 努2021「「領域」が対峙する場所—「下総型」埴輪と異系統埴輪の共存／対置—」『古墳文化基礎論集』古墳  
文化基礎論集刊行会、pp.1-10
- 今尾文昭1999「諸王の割拠—大和・柳本古墳群—」『古代を考える 山辺の道 古墳・氏族・寺社』吉川弘文館、pp.68-  
128 [今尾文昭2009『古代日本の陵墓と古墳1 古墳文化の成立と社会』（青木書店）に補筆・所収、pp.40-97]
- 今尾文昭・服部伊久男1994「西山塚古墳採集の埴輪」『青陵』No.86、奈良県立橿原考古学研究所、pp.5-9
- 上田宏範1951「前方後円墳の造出の推移」『考古学論攷』第1冊、奈良県教育委員会、pp.67-77
- 上田宏範(舒)1958「前方後円墳の型式学的研究の方法論をめぐって」『古代学研究』第19号、古代学研究会、pp.30-  
38
- 上田宏範1969『前方後円墳』学生社
- オオヤマト古墳群シンポジウム実行委員会編2004『オオヤマト古墳群と古代王権』青木書店
- 大和の古墳墳丘外域研究会1986「大和中山大塚古墳調査速報」『東アジアの古代文化』48号、大和書房、pp.152-158
- 置田雅昭1974「大和の前方後方墳」『考古学雑誌』第59巻第4号、日本考古学会、pp.1-16
- 置田雅昭2003「奈良盆地東南部の古墳」『大和の古墳Ⅰ』新近畿日本叢書 大和の考古学 第2巻、近畿日本鉄道、  
pp.47-64
- 笠野 毅1976「崇神天皇陵陪冢い・ろ号の外構柵設置箇所の調査」『書陵部紀要』第27号、宮内庁書陵部、pp.105-112
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、pp.1-70 [川西宏幸1988『古墳時代政治史序  
説』（塙書房）改稿所収、pp.225-360]
- 川西宏幸1979「円筒埴輪総論 地籍文献総覧」『考古学雑誌』第64巻第4号、日本考古学会、pp.90-387 [川西宏幸1988  
『古墳時代政治史序説』（塙書房）改稿所収、pp.431-530]
- 川西宏幸1981「前期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」『史林』第64巻第5号、史学研究会、pp.110-149 [川西宏  
幸1988『古墳時代政治史序説』（塙書房）改稿所収、pp.57-101]
- 川西宏幸1983「中期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」『考古学雑誌』第69巻第2号、日本考古学会、pp.1-35  
[川西宏幸1988『古墳時代政治史序説』（塙書房）改稿所収、pp.103-161]
- 川西宏幸1986「後期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」『考古学雑誌』第71巻第2号、日本考古学会、pp.1-35  
[川西宏幸1988『古墳時代政治史序説』（塙書房）改稿所収、pp.163-224]
- 川西宏幸1988a「古墳時代政治史抄」『古墳時代政治史序説』塙書房、pp.10-31
- 川西宏幸1988b「政治史論への視角」『古墳時代政治史序説』塙書房、pp.32-55
- 岸本直文2020『倭王権と前方後円墳』塙書房
- 北野耕平1976「古墳の位置と外形」『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊、大阪大学、  
pp.15-33
- 京都大学文学部博物館1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊
- 宮内庁書陵部陵墓課編1999『宮内庁書陵部 陵墓地形図集成』学生社
- 梶 國男1969「前方後円墳の設計について—畿内中後期古墳の場合—」『信濃』第21巻第4号、信濃史学会、pp.303-  
320

- 小島俊次1965『奈良県の考古学』郷土考古学叢書1、吉川弘文館
- 小林行雄1937「前方後円墳」『考古学』第8巻第1号、東京考古学会、pp.1-14
- 小林行雄1959『古墳の話』岩波新書 青版342、岩波書店
- 近藤義郎1968「前方後円墳の成立と変遷」『考古学研究』第15巻第1号、考古学研究会、pp.24-32
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎1995「大和の最古型式前方後円墳と宮山型特殊器台」『みずほ』第16号、大和弥生文化の会、pp.50-65 [近藤義郎1998『前方後円墳の成立』(岩波書店)所収、pp.269-293]
- 埼玉県教育委員会1980『埼玉 稲荷山古墳』
- 埼玉県教育委員会2018『史跡埼玉古墳群 総括報告書Ⅰ』
- 堺市2015『百舌鳥古墳群測量図集成』
- 堺市文化観光局文化部文化財課2019『堺の文化財 百舌鳥古墳群 (第8版)』
- 坂本和俊1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』6、群馬土器観会、pp.65-88
- 坂本和俊2004「増田逸朗氏の足跡②—埼玉古墳群の研究—」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武蔵古代文化研究会、p.174
- 澤田秀実2016「2015年度「陵墓」立ち入り観察に参加して 渋谷向山古墳の検討」『考古学研究』第63巻第1号、考古学研究会、pp.12-16
- 澤田秀実2017「行燈山古墳の立ち入り観察参加記」『考古学研究』第64巻第1号、考古学研究会、pp.6-10
- 清水真一2000「燈籠山古墳、東殿塚古墳の埴輪について」『青陵』No.105、奈良県立橿原考古学研究所、pp.3-5
- 城倉正祥2011「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第5号、埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館、pp.57-91
- 白石太一郎1969a「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』第16巻第1号、考古学研究会、pp.8-26
- 白石太一郎1969b「記・紀および延喜式にみられる陵墓の記載について—古墳の年代基準としての陵墓関係伝承の再検討—」『古代学』第16巻第1号、古代学協会、pp.25-43 [白石太一郎2000『古墳と古墳群の研究』(塙書房)所収、pp.465-499]
- 白石太一郎1983「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』角田文衛博士古稀記念事業会、pp.125-145 [白石太一郎2011『古墳と古墳時代の文化』(塙書房)所収、pp.5-41]
- 白石太一郎1985「手白香皇女陵の問題」『帝塚山考古学談話会第300回記念 古墳の起源と天皇陵』帝塚山考古学研究所、pp.139-146
- 白石太一郎1994「古墳と方位」『方位と風土』古今書院、pp.109-129 [白石太一郎2011『古墳と古墳時代の文化』(塙書房)所収、pp.43-65]
- 白石太一郎1999『古墳とヤマト政権—古代国家はいかにして形成されたか—』文春新書036、文藝春秋
- 白石太一郎編2008『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』六一書房
- 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田 尚1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集、国立歴史民俗博物館、pp.41-81
- 末永雅雄1961『日本の古墳』朝日新聞社
- 末永雅雄1975『古墳の航空大観』学生社
- 菅谷文則1967「畿内における前方後円墳の分布(序論)」『関西大学考古学研究年報』1、関西大学考古学研究会、pp.114-136
- 角南辰馬2014「前方後円墳における造出しの出現と変遷」『郵政考古紀要』第60号、郵政考古学会、pp.77-91
- 清喜裕二2014「継体天皇皇后手白香皇女 衾田陵の原状復旧に伴う調査」『書陵部紀要』第65号 [陵墓篇]、宮内庁

- 書陵部、pp.108-112
- 関 義則2011「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第6号、埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館、pp.53-94
- 関 義則2012「埼玉古墳群の構造変遷」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第7号、埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館、pp.37-64
- 関 義則2018「総括—埼玉古墳群の学術的評価と歴史的意義—」『史跡埼玉古墳群 総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会、pp.279-326
- 関川尚功1985「大和における大型古墳の変遷」『考古学論攷』第11冊、奈良県立橿原考古学研究所、pp.61-116
- 十河良和2012「百舌鳥・古市古墳群における陪塚研究」『百舌鳥古墳群の調査6』堺市教育委員会、pp.151-154
- 高橋一夫2005『鉄剣銘115文字の謎に迫る 埼玉古墳群』シリーズ遺跡を学ぶ016、新泉社
- 伊達宗泰1999a『「おおやまと」の古墳集団』学生社
- 伊達宗泰1999b「大和天神山古墳墳丘の再測量」『青陵』No.102、奈良県立橿原考古学研究所、pp.1-3
- 伊達宗泰編1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第35冊、奈良県立橿原考古学研究所
- 伊達宗泰編2000『古代「おおやまと」を探る』学生社
- 伊達宗泰・小島俊次・森 浩一1963『大和天神山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第22冊、奈良県教育委員会
- 田中清美1990「造出しに関する覚え書き」『考古学論集』第3集、考古学を学ぶ会（大阪市）、pp.217-233
- 田中英夫・奥田 尚1985「奈良県中山大塚古墳の特殊器台形土器」『古代学研究』第109号、古代学研究会、pp.51-53
- 田中英夫・宮川 渉1976「古墳群における古墳占地の企画性」『ヒストリア』71号、大阪歴史学会、pp.45-56
- 千賀 久1981「シウロウ塚古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊、奈良教育委員会、p.54
- 都出比呂志1989「古墳が造られた時代」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社、pp.25-52
- 都出比呂志2005『前方後円墳と社会』塙書房
- 寺澤 薫1984「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第6号、吉川弘文館、pp.35-72 [寺澤 薫2011『弥生時代政治史研究 王権と都市の形成史論』（吉川弘文館）改稿所収、pp.138-165]
- 寺澤 薫1988「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ、同志社大学考古学シリーズ刊行会、pp.99-111 [寺澤 薫2011『弥生時代政治史研究 王権と都市の形成史論』（吉川弘文館）改稿所収、pp.210-219]
- 天理市教育委員会2000『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7集
- 天理市教育委員会2014『大和古墳群Ⅰ ノムギ古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第9集
- 天理市教育委員会2015『天理の古墳100』
- 天理市教育委員会2019「橿山古墳航空レーザ測量調査・平板測量調査」『天理市文化財調査年報 平成29（2017）年度』pp.34-48
- 東北・関東前方後円墳研究会編2008『埴輪の風景～構造と機能～』考古学リーダー13、六一書房
- 戸原純一・笠野 毅1977「崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査」『書陵部紀要』第28号、宮内庁書陵部、pp.94-101
- 中井一夫・関川尚功1974「西山塚古墳前方部の調査」『青陵』No.26、奈良県立橿原考古学研究所、pp.8-10
- 中村一郎・笠野 毅1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号、宮内庁書陵部、pp.57-65
- 奈良県教育委員会1961『桜井茶臼山古墳 附橿山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第19冊
- 奈良県教育委員会1971『奈良県の主要古墳Ⅰ』緑地保全と古墳保護に関する調査報告1
- 奈良県教育委員会1974『奈良県の主要古墳Ⅱ』緑地保全と古墳保護に関する調査報告2

- 奈良県教育委員会1981『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊
- 奈良県立橿原考古学研究所1996『中山大塚古墳 附篇 葛本弁天塚古墳 上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊
- 奈良県立橿原考古学研究所1999『黒塚古墳調査概報』大和の前期古墳Ⅲ、学生社
- 奈良県立橿原考古学研究所2001『大和前方後円墳集成』橿原考古学研究所研究成果第4冊
- 奈良県立橿原考古学研究所2002『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書第89集
- 奈良県立橿原考古学研究所2008『下池山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第9冊
- 奈良県立橿原考古学研究所2018『黒塚古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第13冊
- 西川 宏1960「造り出し」『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会、pp.327-338
- 西川 宏1961「陪塚論序説」『考古学研究』第8巻第2号、考古学研究会、pp.10-23
- 野上丈助1970a「摂河泉における古墳群の形成とその特質」『考古学研究』第16巻第3号、考古学研究会、pp.43-72  
〔野上丈助2005『日本古代史の考古学的研究』（インマヌエル野上）所収、pp.251-285〕
- 野上丈助1970b「摂河泉における古墳群の形成とその特質（二）」『考古学研究』第16巻第4号、考古学研究会、pp.69-84  
〔野上丈助2005『日本古代史の考古学的研究』（インマヌエル野上）所収、pp.285-303〕
- 野上丈助1972「古墳と古墳群の理解をめぐって」『考古学研究』第19巻第1号、考古学研究会、pp.45-62  
〔野上丈助2005『日本古代史の考古学的研究』（インマヌエル野上）所収、pp.331-352〕
- 野上丈助1984「大王陵の変遷」『東アジア世界における日本古代史講座2 倭国の形成と古墳文化』学生社、pp.175-204  
〔野上丈助2005『日本古代史の考古学的研究』（インマヌエル野上）所収、pp.305-329〕
- 埴輪検討会編2022『埴輪の分類と編年』埴輪検討会シンポジウム2022資料集
- 原島礼二1970a「畿内における巨大古墳の編年と王権の性格（1）」『考古学研究』第17巻第2号、考古学研究会、pp.65-85
- 原島礼二1970b「畿内における巨大古墳の編年と王権の性格（2）」『考古学研究』第17巻第3号、考古学研究会、pp.50-76
- 原島礼二1971a「畿内における巨大古墳の編年と王権の性格（3）」『考古学研究』第17巻第4号、考古学研究会、pp.7-35
- 原島礼二1971b『大王と古墳』学生社
- 原島礼二・石部正志・今井 堯・川口勝康1981『巨大古墳と倭の五王』青木書店
- 春成秀爾1989「埴輪の絵」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館、pp.203-232
- 春成秀爾2011「箸墓古墳の埴輪 補記」『祭りと呪術の考古学』塙書房、pp.494-497
- 東 憲章2017『古墳時代の南九州の雄 西都原古墳群』シリーズ遺跡を学ぶ121、新泉社
- 東影 悠2012「大和」『古墳時代の考古学2 古墳出現と展開の地域相』同成社、pp.63-76
- 櫃本誠一1967a「岩橋千塚の前方後円墳」『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究紀要第2冊、関西大学文学部考古学研究室、pp.346-380
- 櫃本誠一1967b「前方後円墳の企画に関する一試論（上）」『関西大学考古学研究年報』1、関西大学考古学研究会、pp.137-151
- 櫃本誠一1980「大型古墳の立地について—古市・百舌鳥古墳群—」『藤井祐介君追悼記念 考古学論叢』藤井祐介君を偲ぶ会、pp.209-226  
〔櫃本誠一2001『前方後円墳・墳丘構造の研究』（学生社）所収、pp.221-235〕
- 櫃本誠一1983「大型古墳の立地について—奈良県下における前・中期古墳—」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念 考古学論叢』関西大学、pp.269-319  
〔櫃本誠一2001『前方後円墳・墳丘構造の研究』（学生社）所収、pp.177-221〕
- 広瀬和雄1987「大王墓の系譜とその特質（上）」『考古学研究』第34巻第3号、考古学研究会、pp.23-46

- 広瀬和雄1988「大王墓の系譜とその特質（下）」『考古学研究』第34巻第4号、考古学研究会、pp.68-84
- 福尾正彦1991「奈良の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号、宮内庁書陵部、pp.100-111
- 藤井寺市教育委員会1993『新版 古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブック№6
- 藤田和尊1993「陪塚論」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念 考古学論叢』関西大学、pp.237-271 [改題・加筆の上、藤田和尊2006『古墳時代の王権と軍事』（学生社）所収、pp.228-267]
- 古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議2015a『古市古墳群測量図集成』
- 古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議2015b『古市古墳群を歩く（第3版）』
- 北郷泰道2005『西都原古墳群 南九州屈指の大古墳群』日本の遺跡1、同成社
- 前園実知雄1971「天理市シウロウ塚古墳」『奈良県の主要古墳Ⅰ』緑地保全と古墳保護に関する調査報告1、奈良県教育委員会、p.35
- 増田逸朗1980「埼玉古墳群と稲荷山古墳」『埼玉 稲荷山古墳』埼玉県教育委員会、pp.18-25
- 増田逸朗1986「第3章 埼玉地域」『日本の古代遺跡31 埼玉』保育社、pp.114-153
- 松本洋明2000「墳丘」『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7集、天理市教育委員会、pp.67-69
- 丸山竜平1975「発生期古墳の諸問題」『昭和48年度 滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会、pp.112-148
- 丸山竜平1987「巨大古墳の発生—近江壺笠山遺跡と埴輪の起源—」『東アジアの古代文化』第52号、大和書房、pp.86-96
- 宮崎県1926『西都原史蹟調査報告書』
- 宮崎県教育委員会1999『男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書』宮崎県文化財調査報告書第42集
- 宮崎県教育委員会2000『鬼の窟古墳 西都原205号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第1集
- 宮崎県教育委員会2003『西都原171号墳（第1分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第4集
- 宮崎県教育委員会2007『男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地地中探査事業報告書』
- 宮崎県教育委員会2013『西都原202号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第10集
- 宮崎県教育委員会2015『西都原古墳群総括報告書』
- 宮崎県教育委員会2019『西都原265号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第14集
- 宮崎県教育委員会2020『西都原101号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第15集
- 柳沢一男1994「宮崎県古墳資料（1）」『宮崎考古』第13号、宮崎考古学会、pp.72-104
- 山田清朝2018「造り出しの機能について—朝来市所在 池田古墳の調査成果から—」『研究紀要』第11号、兵庫県立考古学博物館、pp.9-29
- 山田幸弘1997「畿内における陪塚について」『西墓山古墳—古市古墳群の調査研究Ⅲ—』藤井寺市文化財調査報告第16集、藤井寺市教育委員会、pp.183-198
- 吉村武彦2010『ヤマト王権』シリーズ日本古代史②、岩波新書 新赤版1272、岩波書店
- 和田晴吾1977「墓壇と墳丘の出入口—古墳祭祀の復元と発掘調査—」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会、pp.195-211

## 挿図出典

- 図1 堺市2015掲載の上石津ミサンザイ古墳測量図より一部改変。
- 図2 寺澤1984。
- 図3 1・2：白石ほか1984、3・4：奈良県立橿原考古学研究所2002。
- 図4 天理市教育委員会2014。
- 図5 『天理市全図14』（天理市作成、2012年3月測図、S=1/2500）に下記文献所収図面を合成して犬木作成。



東殿塚古墳：天理市教育委員会2000、西殿塚古墳：奈良県立橿原考古学研究所2001、火矢塚古墳・中山大塚古墳・小岳寺塚古墳・西山塚古墳：奈良県教育委員会1981、下池山古墳：奈良県立橿原考古学研究所2008。

図6 1：奈良県立橿原考古学研究所1996より一部改変、2：同1999より一部改変。

図7～9 『天理市全図15』（天理市作成、2012年3月測図、S=1/2500）に下記文献所収図面を合成して犬木作成。櫛山古墳：天理市教育委員会2019、行燈山古墳・アンド山古墳・南アンド山古墳：奈良県立橿原考古学研究所2001、大和天神山古墳：伊達1999b、シウロウ塚古墳：奈良県教育委員会1981、渋谷向山古墳・赤坂古墳：奈良県立橿原考古学研究所2001、上の山古墳：奈良県立橿原考古学研究所1996、丸山古墳：宮内庁書陵部陵墓課編1999。

図10・11 天理市教育委員会2000より一部改変。

図12・13 奈良県立橿原考古学研究所2001より一部改変。

図14 宮崎県教育委員会2015。

図15・16 宮崎県教育委員会2003付図を基に犬木作成。

図17 宮崎県教育委員会2000挿図を基に犬木作成。

図18～20 宮崎県立西都原考古博物館原図を基に犬木作成。

図21 藤井寺市教育委員会1993。

図22～27・29～34 白石編2008付図を基に犬木作成。

図28 白石編2008。

図35・36 埼玉県教育委員会1980。

図37 埼玉県教育委員会2018。

図38～44 埼玉県教育委員会2018挿図を基に犬木作成。

図45 原島1971b。

図46 石部・田中・堀田・宮川1971。

図47 1：増田1986、2：坂本1996、3：高橋2005、4：関2011。

表1 犬木作成。

表1 本稿における大型前方後円墳の略称（記号）

古市古墳群		百舌鳥古墳群		埼玉古墳群		西都原古墳群	
津堂城山	T S	上石津ミサンザイ	K M	稲荷山	I N	女狭穂塚	M H
仲津山	N K	大仙陵	D S	二子山	F T	男狭穂塚	O H
誉田御廟山	K G	土師ニサンザイ	H N	丸墓山	M R		
市野山	I C	百舌鳥大塚山	M O	瓦塚	K W		
岡ミサンザイ	O M	イタスケ	I T	奥の山	O Y		
河内大塚	K O	百舌鳥御廟山	M G	将軍山	S G		
野中宮山	N M	田出井山	T D	鉄砲山	T P		
古市墓山	F H	永山	N G	愛宕山	A T		
ニツ塚	F D	長塚	N T	中の山	N Y		

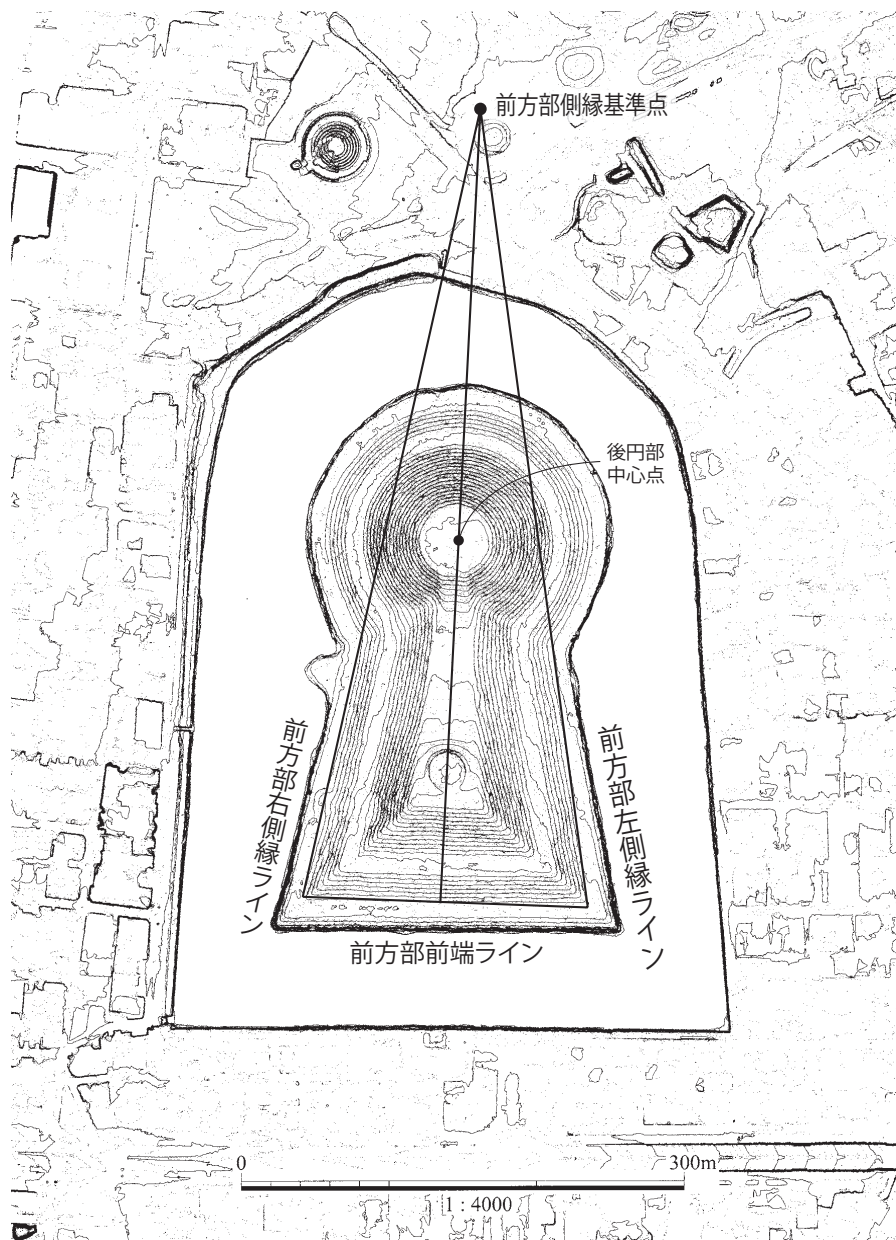


図1 前方後円墳の基準線および基準点の呼称（凡例）

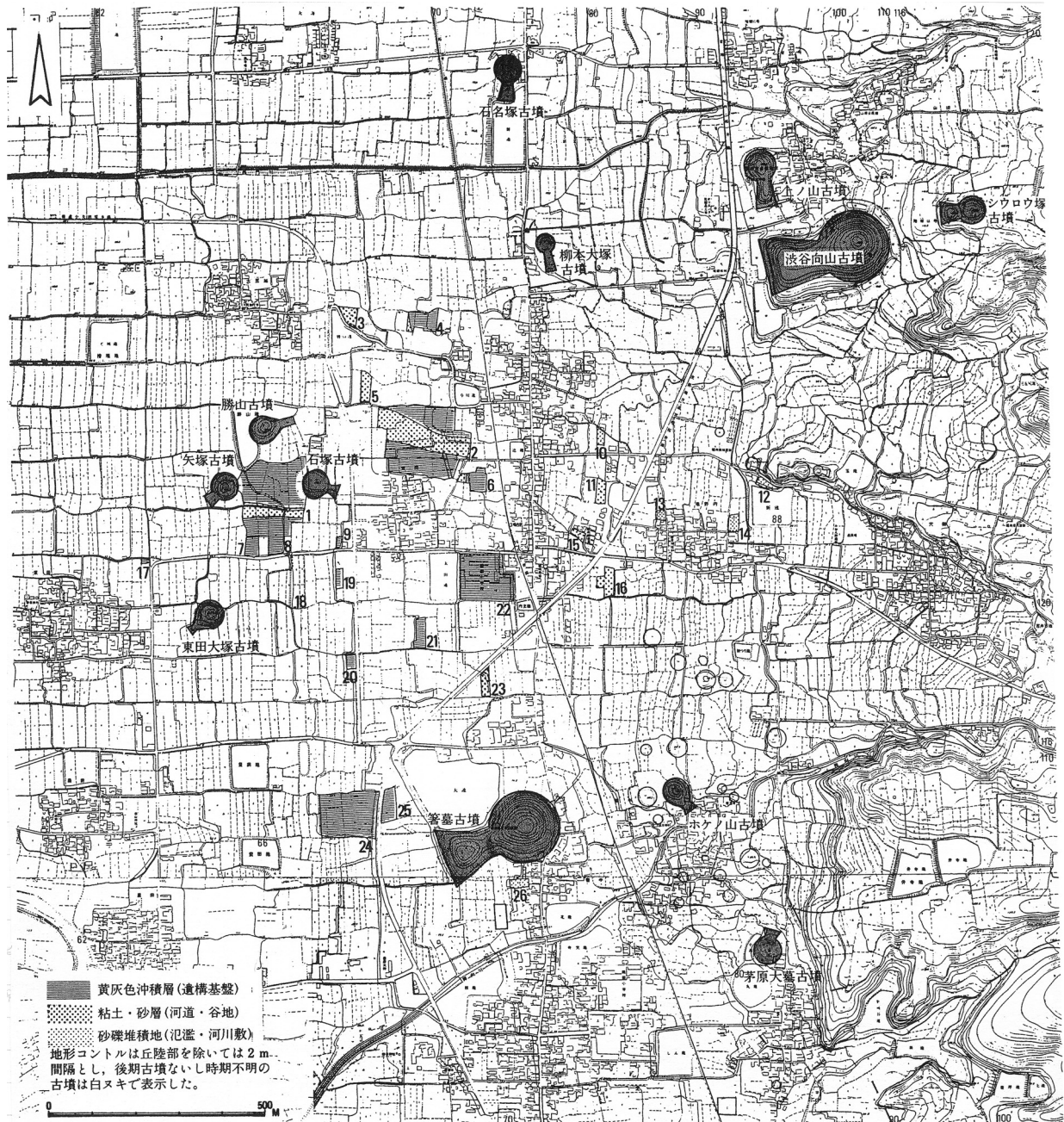


図2 纏向古墳群と菅墓古墳

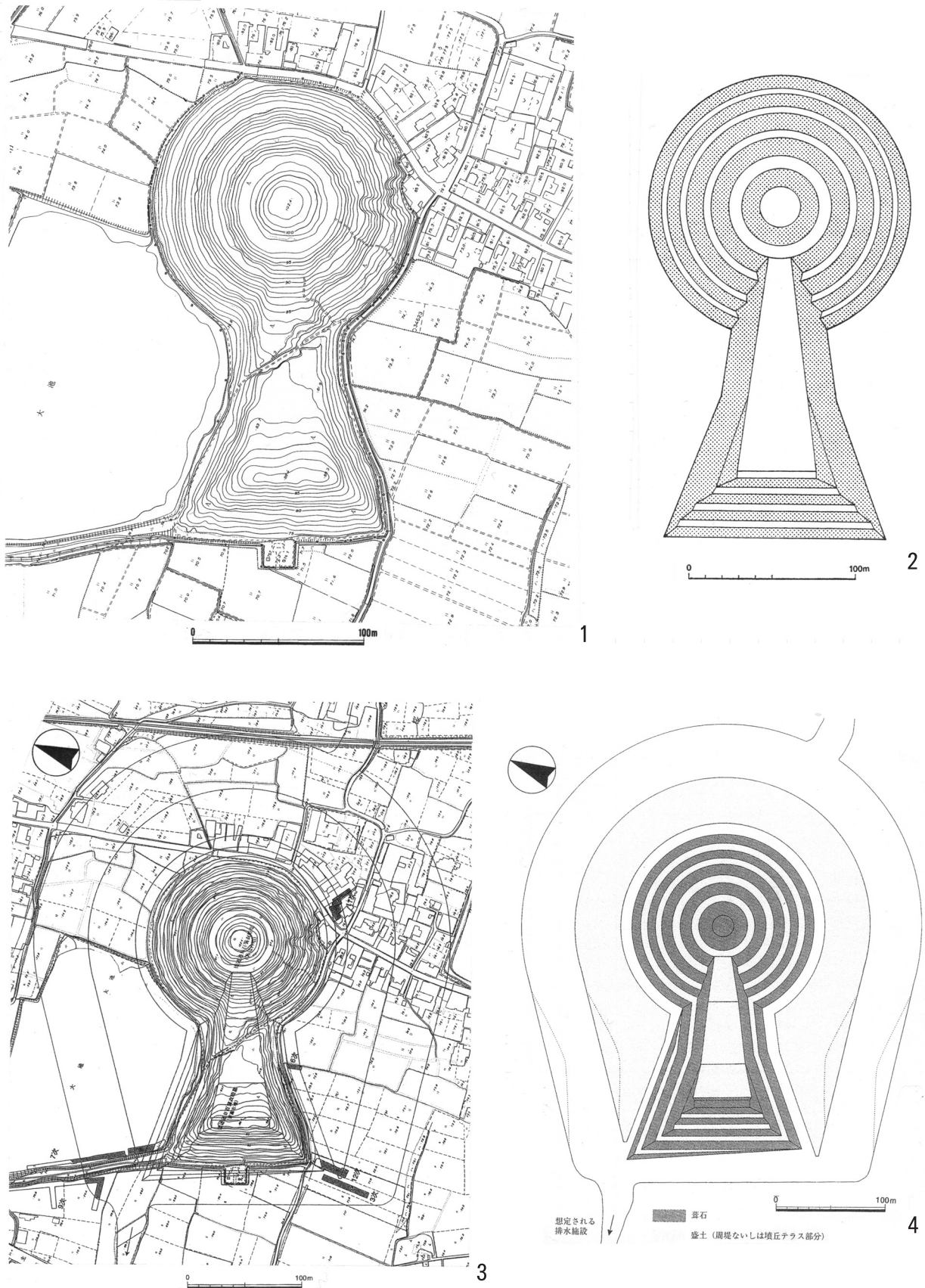


図3 箸墓古墳 全体図および推定復元図



1



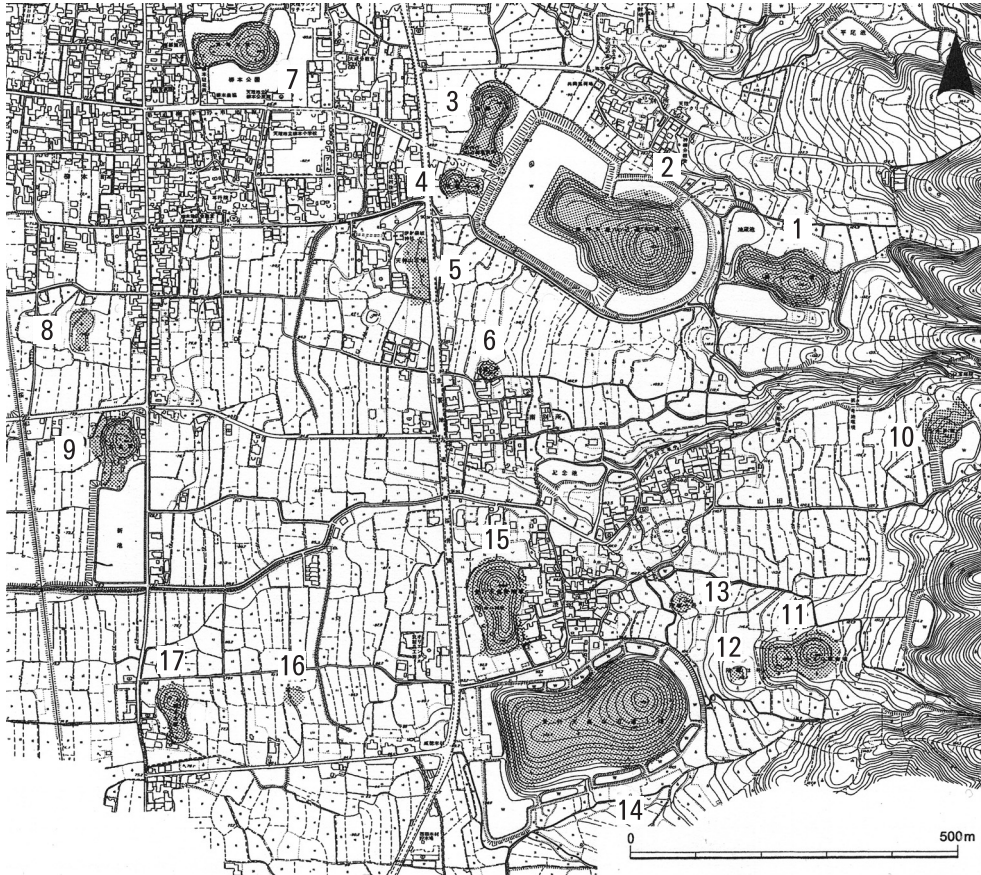
2

図4 大和古墳群全体図

1.ノムギ古墳、2.ヒエ塚古墳、3.クラ塚古墳、4.屋塚古墳、5.馬口山古墳、7.マバカ古墳、8.波多子塚古墳、9.平塚古墳、10.フサギ塚古墳、11.栗塚古墳、13.西山塚古墳、14.矢矧塚古墳、15.下池山古墳、17.弁天塚古墳、18.小岳寺塚古墳、19.中山大塚古墳、20.燈籠山古墳、21.火矢塚古墳、22.西殿塚古墳、23.東殿塚古墳



図5 大和古墳群 [中山支群] の古墳配置



1. 榑山古墳
2. 行燈山古墳
3. アンド山古墳
4. 南アンド山古墳
5. 大和天神山古墳
6. 白塚古墳
7. 黒塚古墳
8. ノベラ古墳
9. 石名塚古墳
10. ヲカタ塚古墳
11. シウロウ塚古墳
12. 赤坂古墳
13. 丸山古墳
14. 渋谷向山古墳
15. 上の山古墳
16. 茶臼塚古墳
17. 柳本大塚古墳

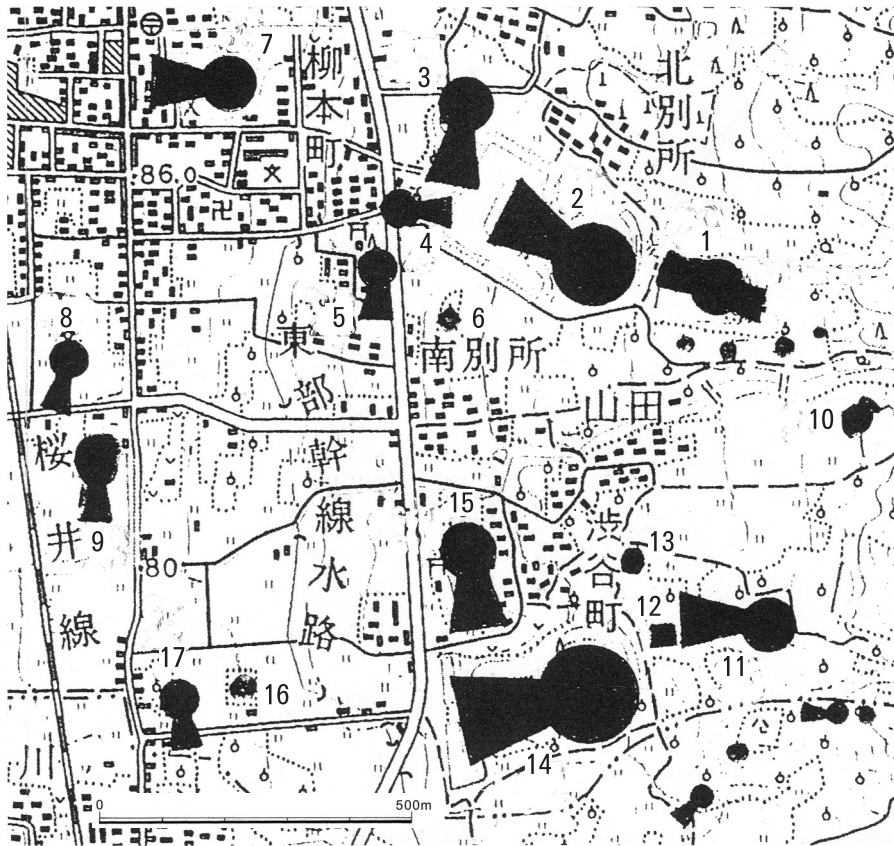


図6 柳本古墳群全体図

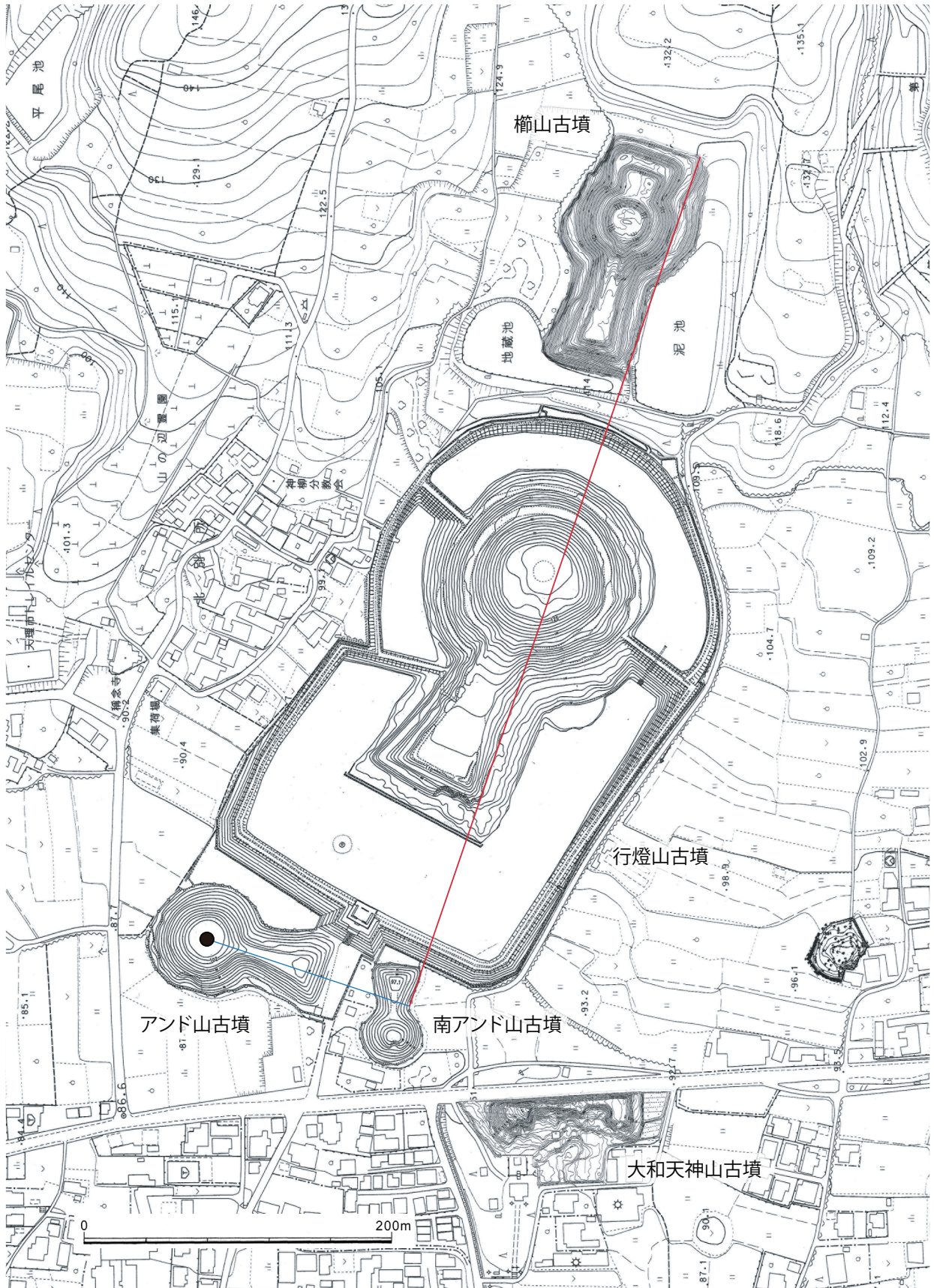


図7 柳本古墳群〔柳本支群〕の古墳配置



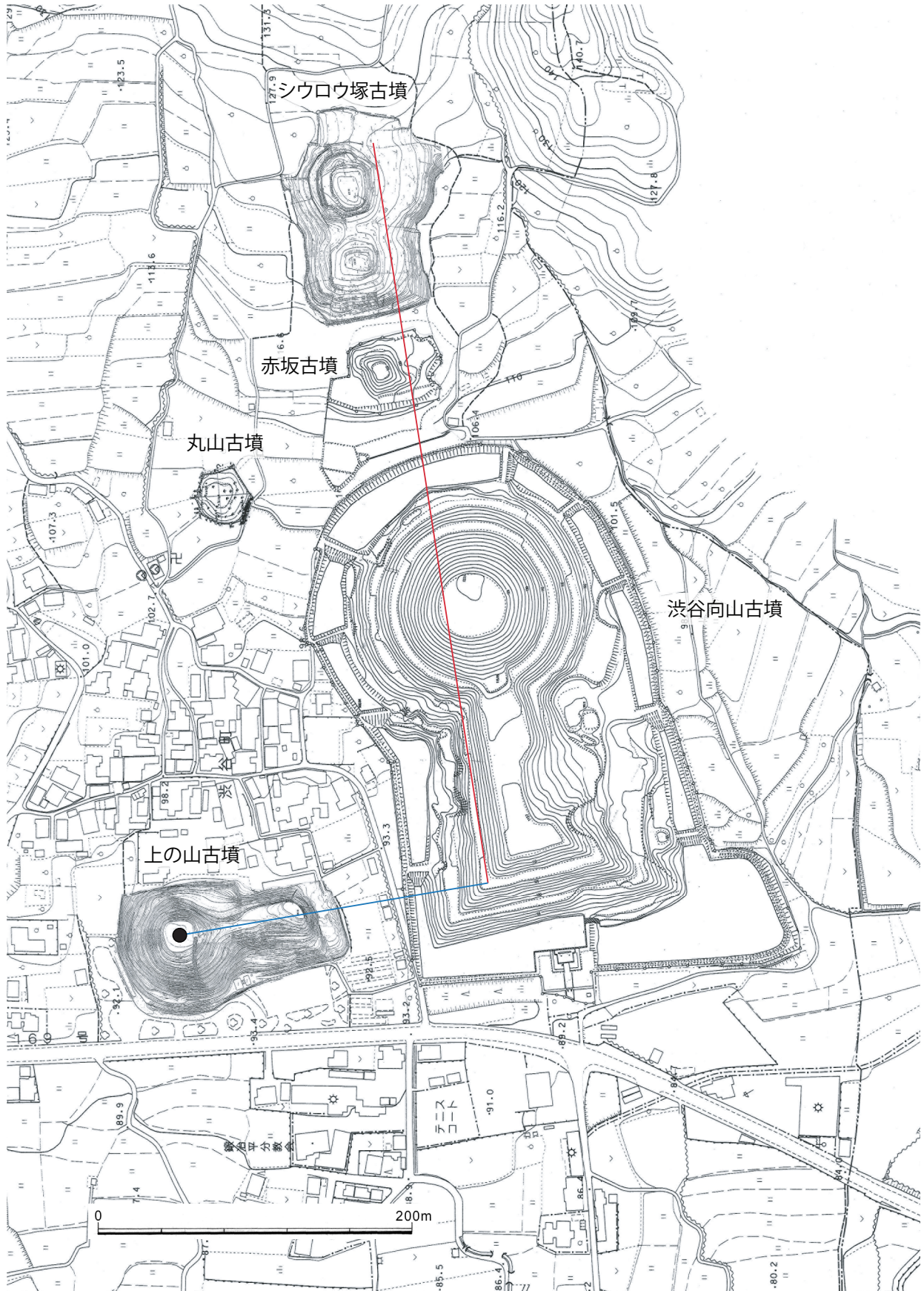


図8 柳本古墳群【渋谷支群】の古墳配置

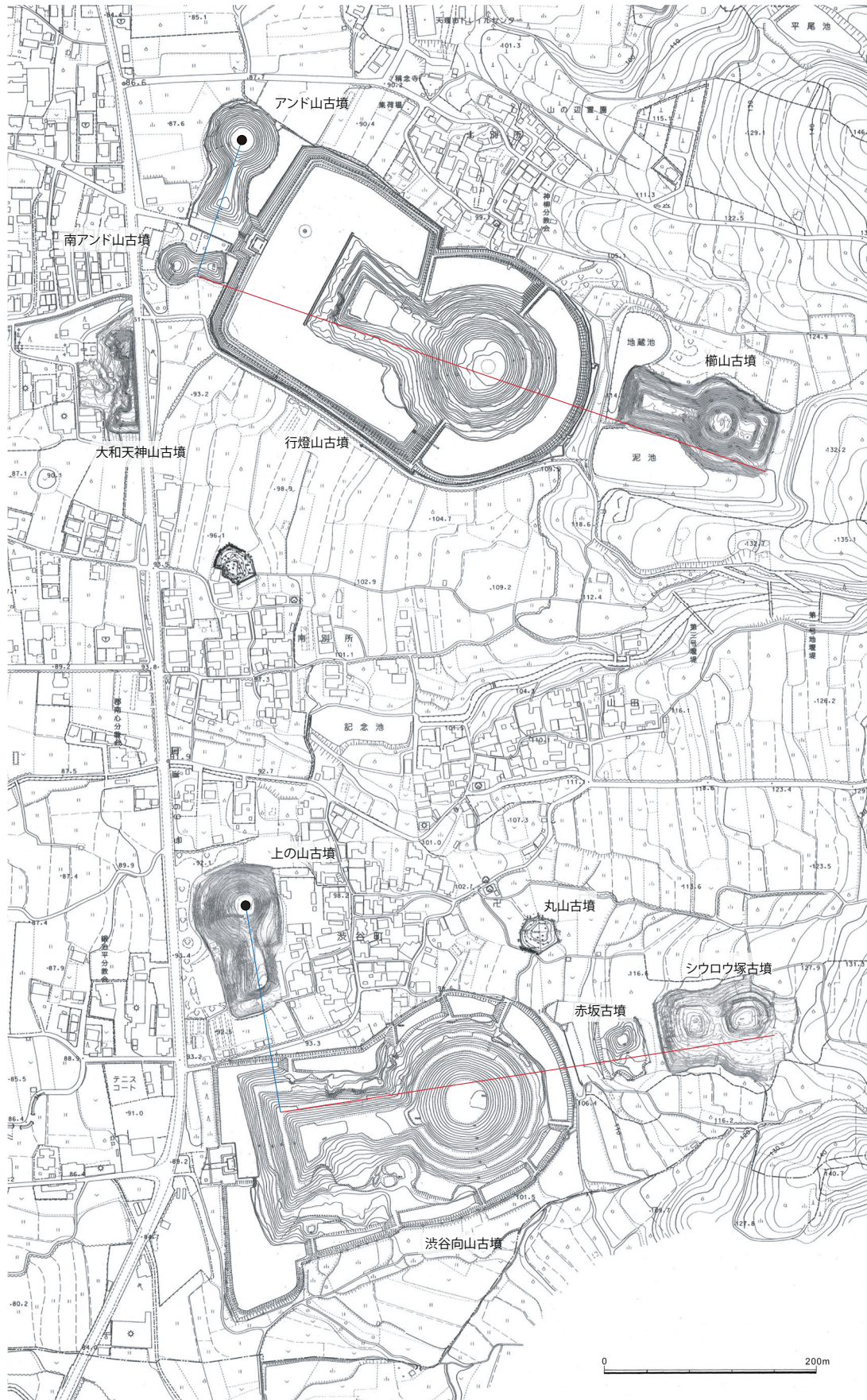


図9 柳本古墳群における「柳本支群」と「渋谷支群」の〈空間構制〉

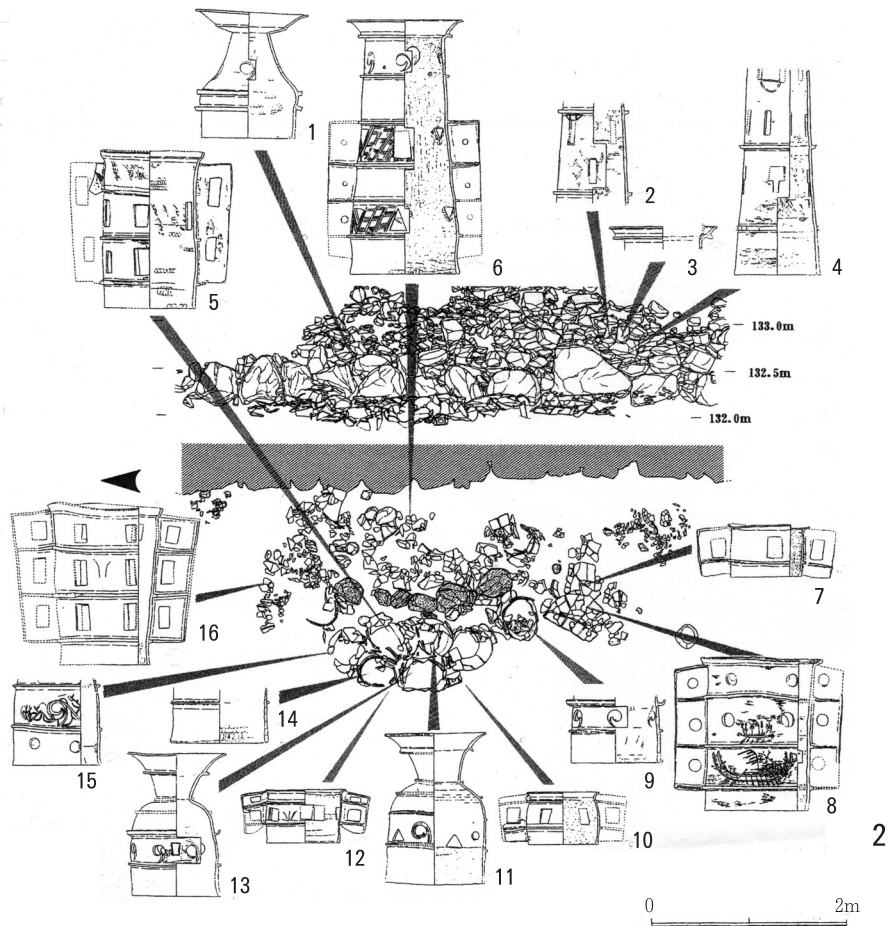
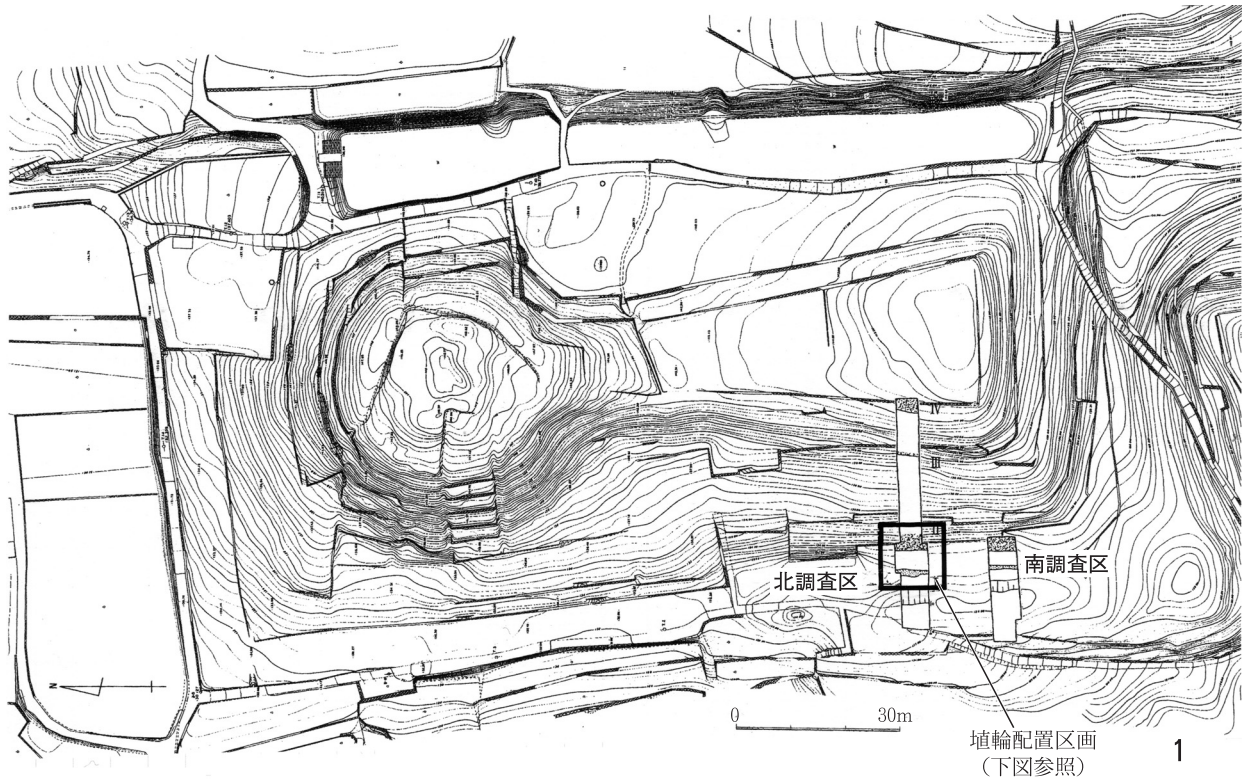


図10 東殿塚古墳 前方部右側面の「突出部」および埴輪配置

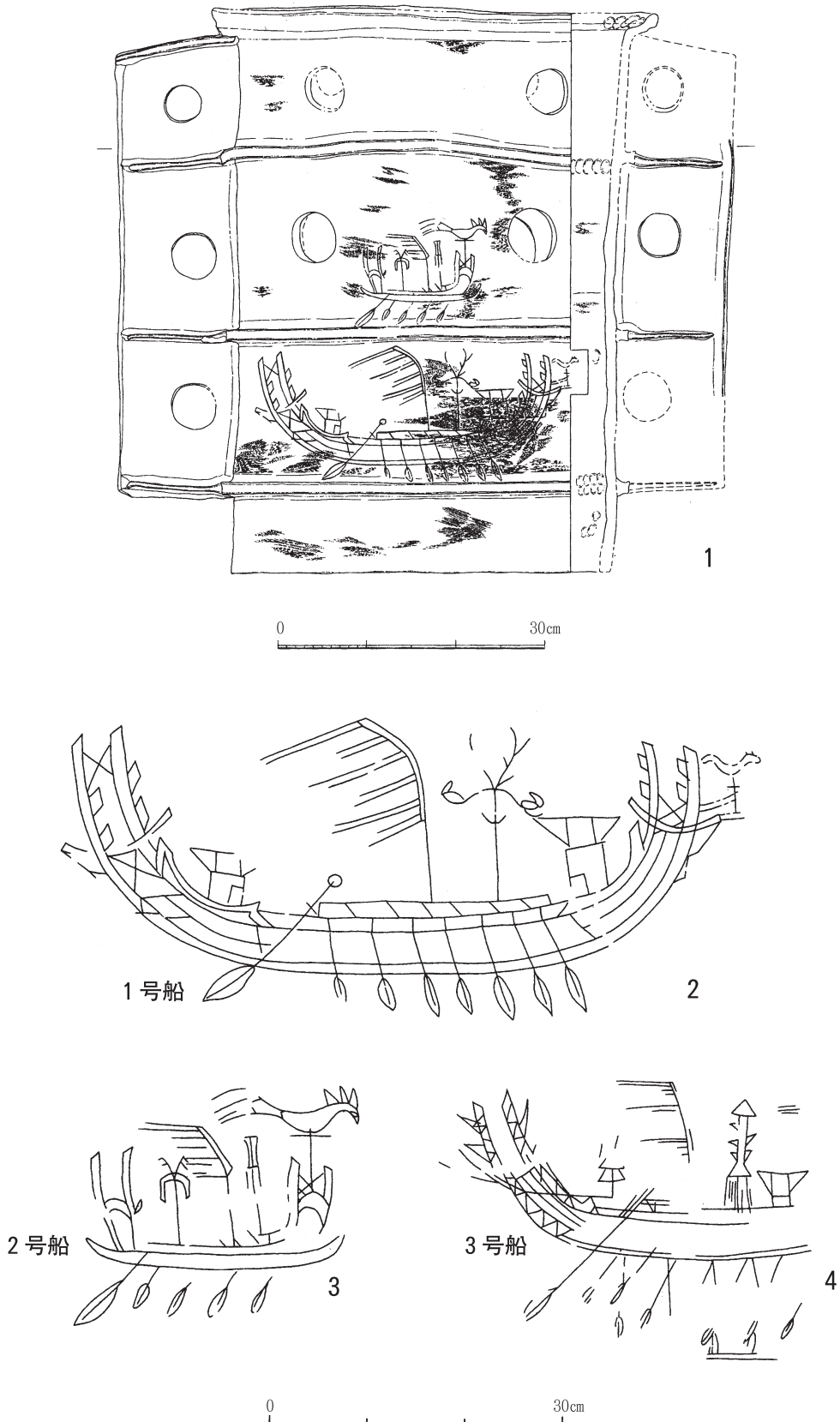


図11 東殿塚古墳出土土罎付円筒埴輪の船画（1号船～3号船）

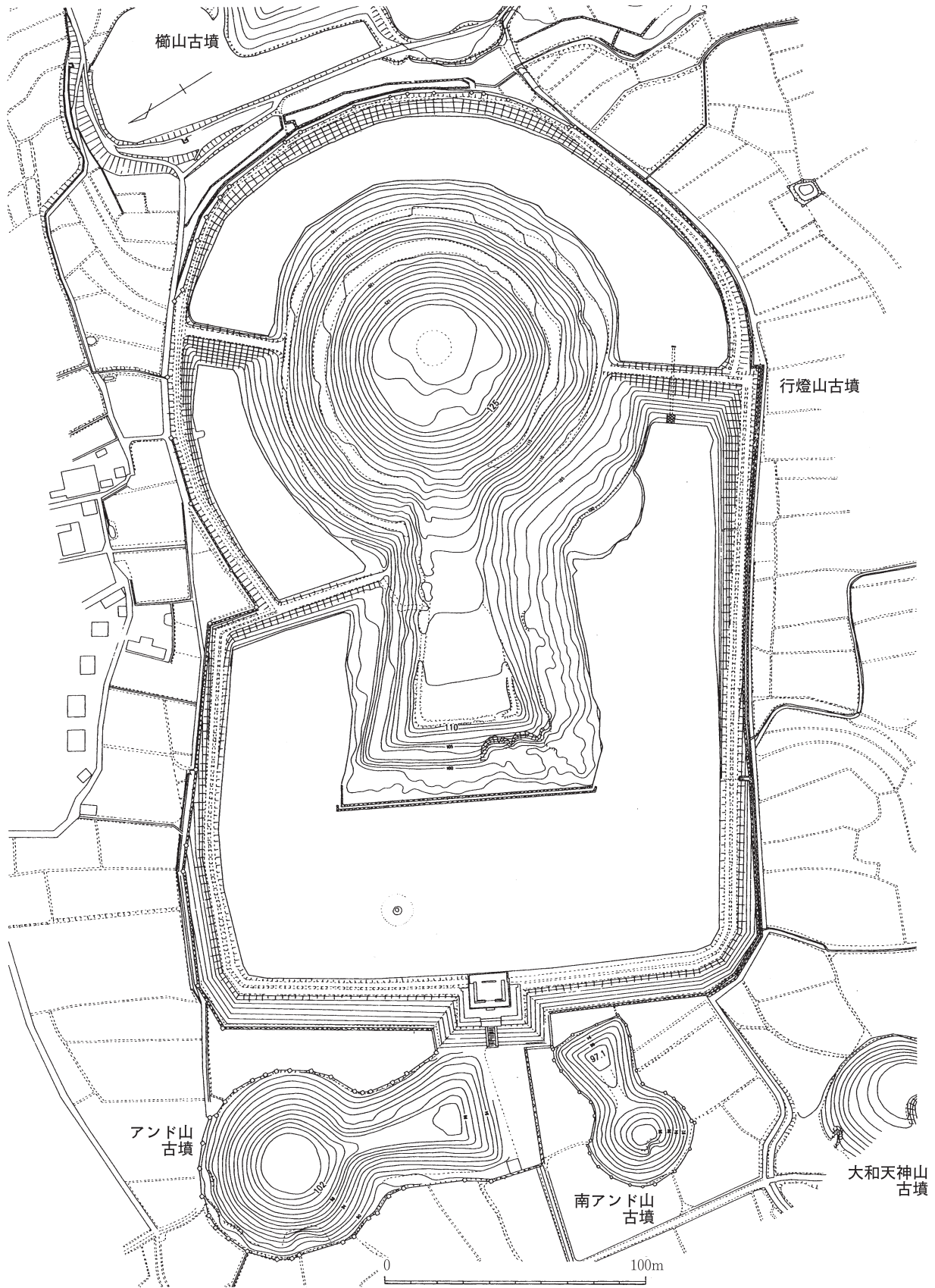


図12 行燈山古墳の墳丘測量図

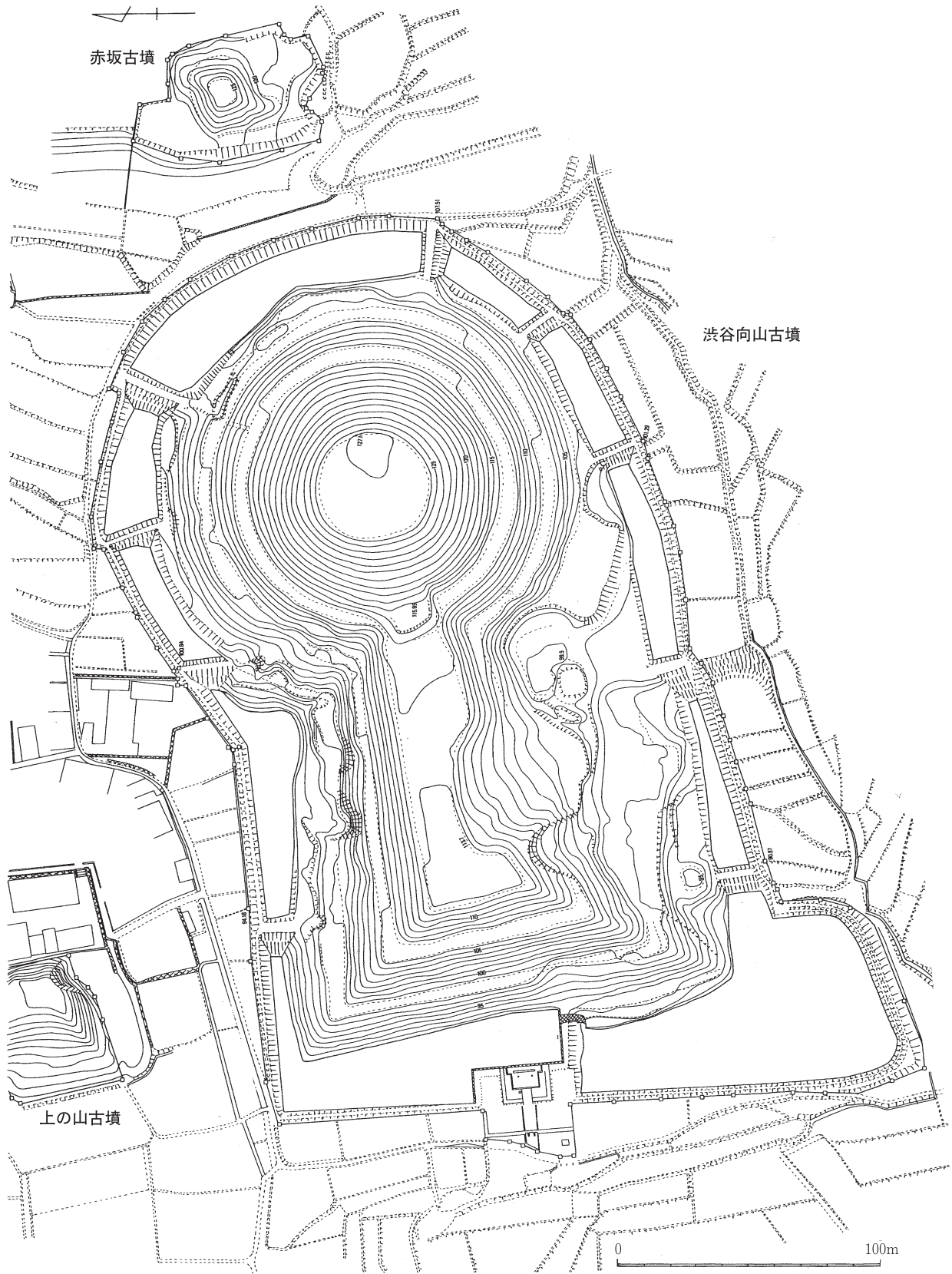


図13 渋谷向山古墳の墳丘測量図

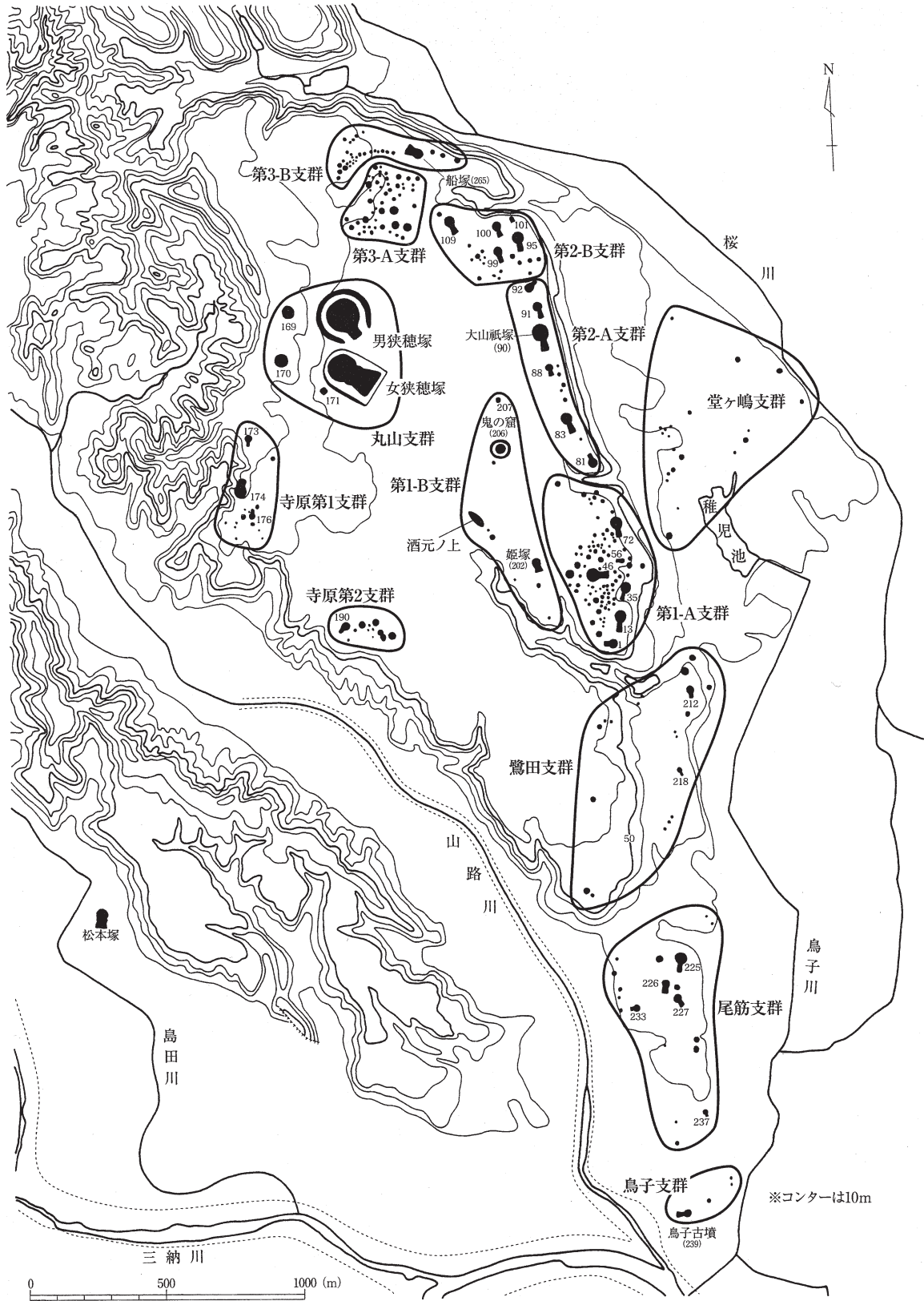


図14 西都原古墳群全体図

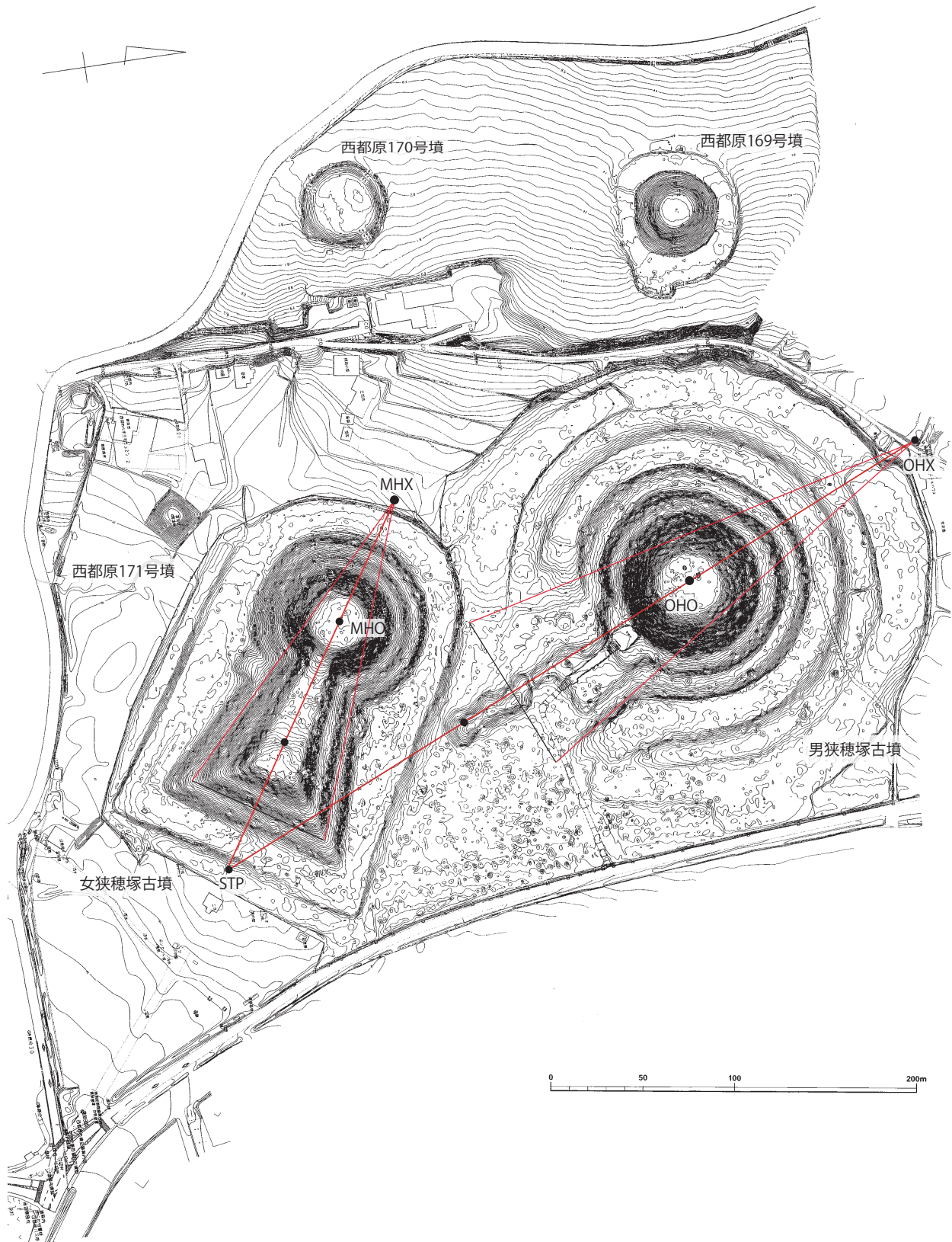


図15 女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳の〈空間配置〉





図16 西都原古墳群「中央群」の〈空間配置〉



図17 女狭穂塚古墳と西都原101号墳の〈空間配置〉

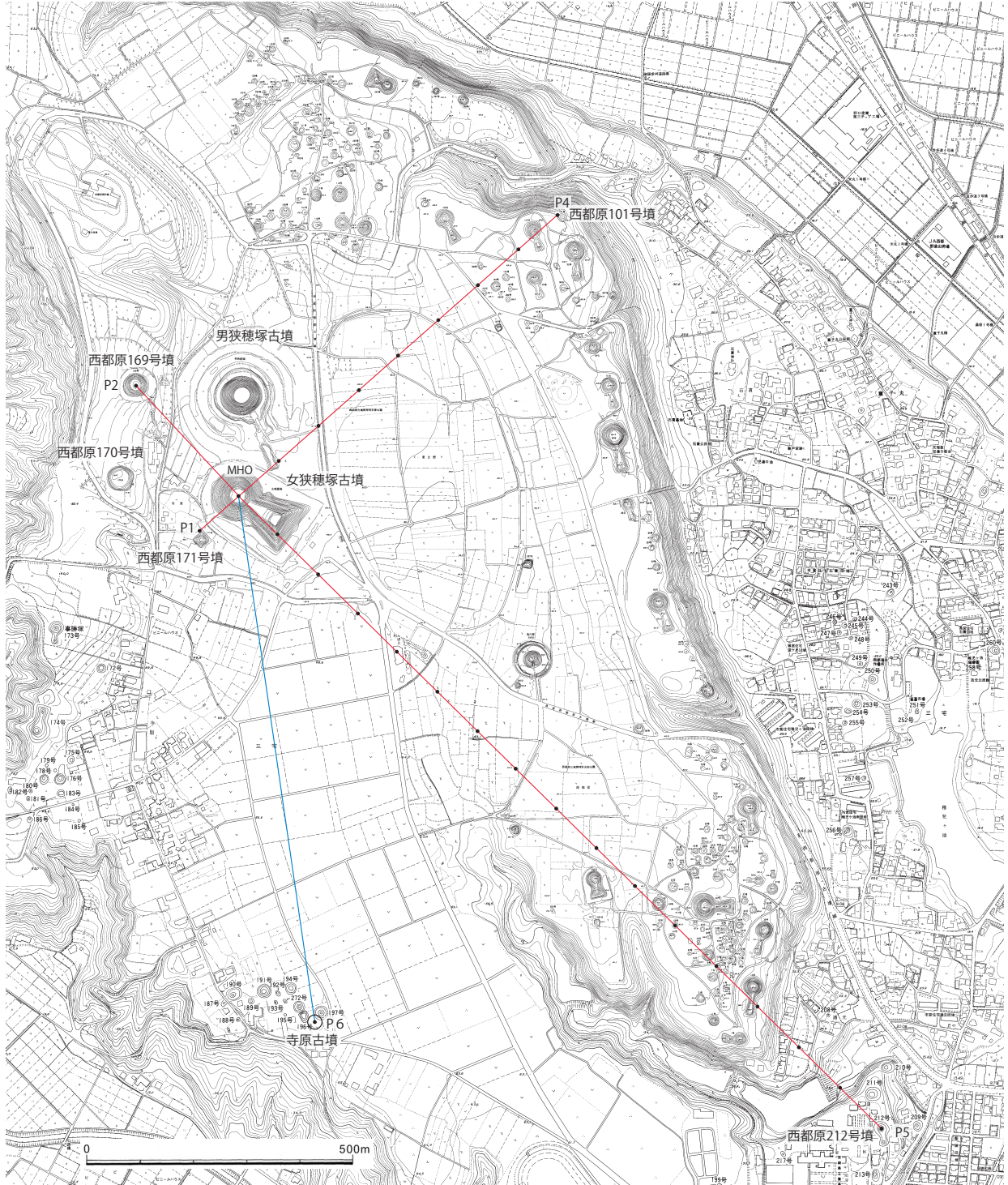


図18 女狭穂塚古墳と西都原101号墳・寺原古墳・西都原212号墳の〈空間配置〉



図19 西都原265号墳・西都原202号墳・鬼の窟古墳の〈空間配置〉

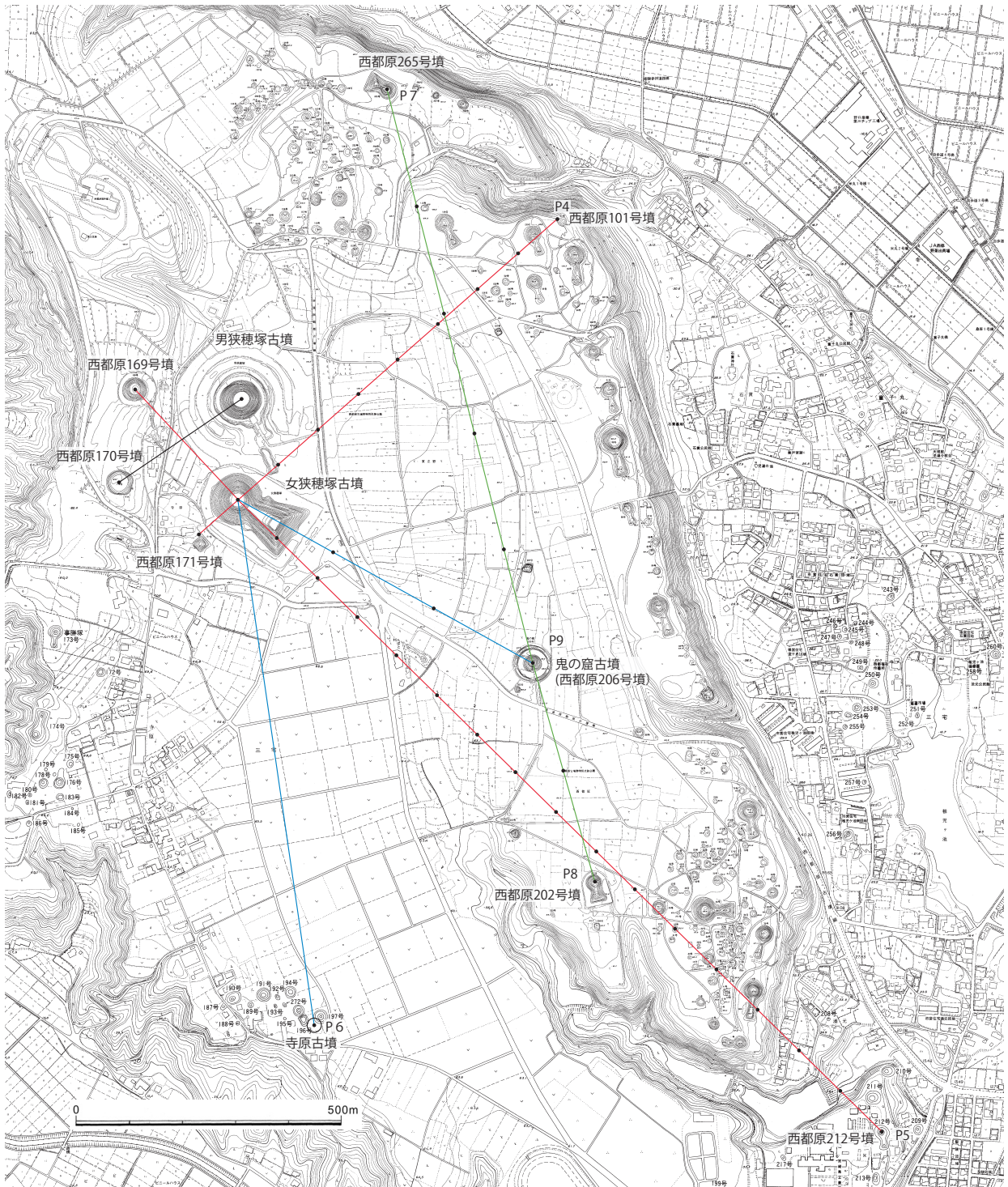


図20 西都原古墳群の〈空間構制〉



図21 古市古墳群全体図

- 1.津堂城山、2.岡ミサンザイ、4.鉢塚、7.ボケ山、9.峯ヶ塚、10.白髪山・小白髪山、11.軽里大塚、12.高屋城山・高屋八幡山、13.市野山、14.唐櫃山、15.三ツ塚、16.仲津山、19.古室山、20.大鳥塚、21.盾塚、23.誉田御廟山、25.二ツ塚、26.アリ山・東山、28.蕃上山、29.はざみ山、31.野中宮山、33.古市墓山

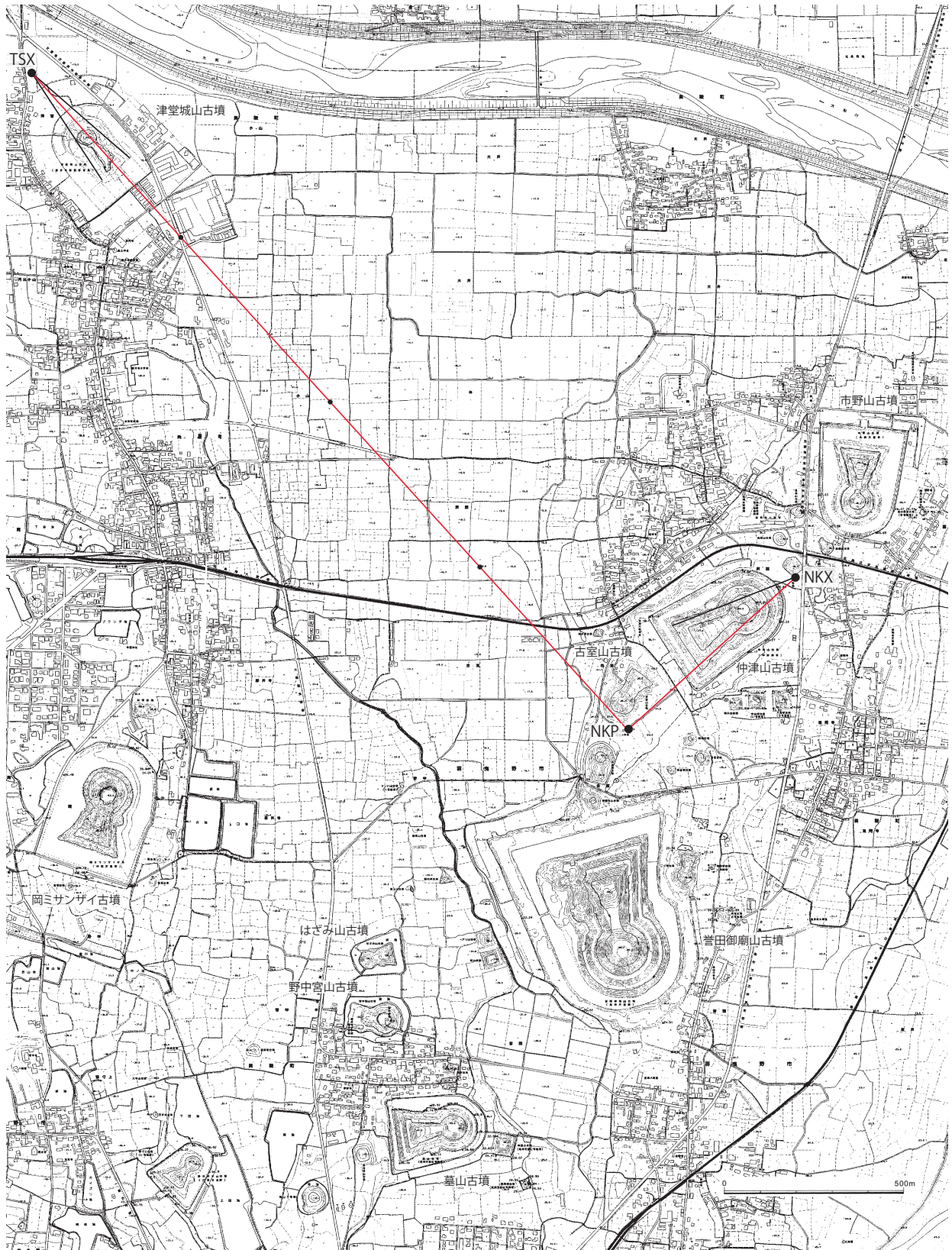


図22 津堂城山古墳と仲津山古墳の〈空間配置〉

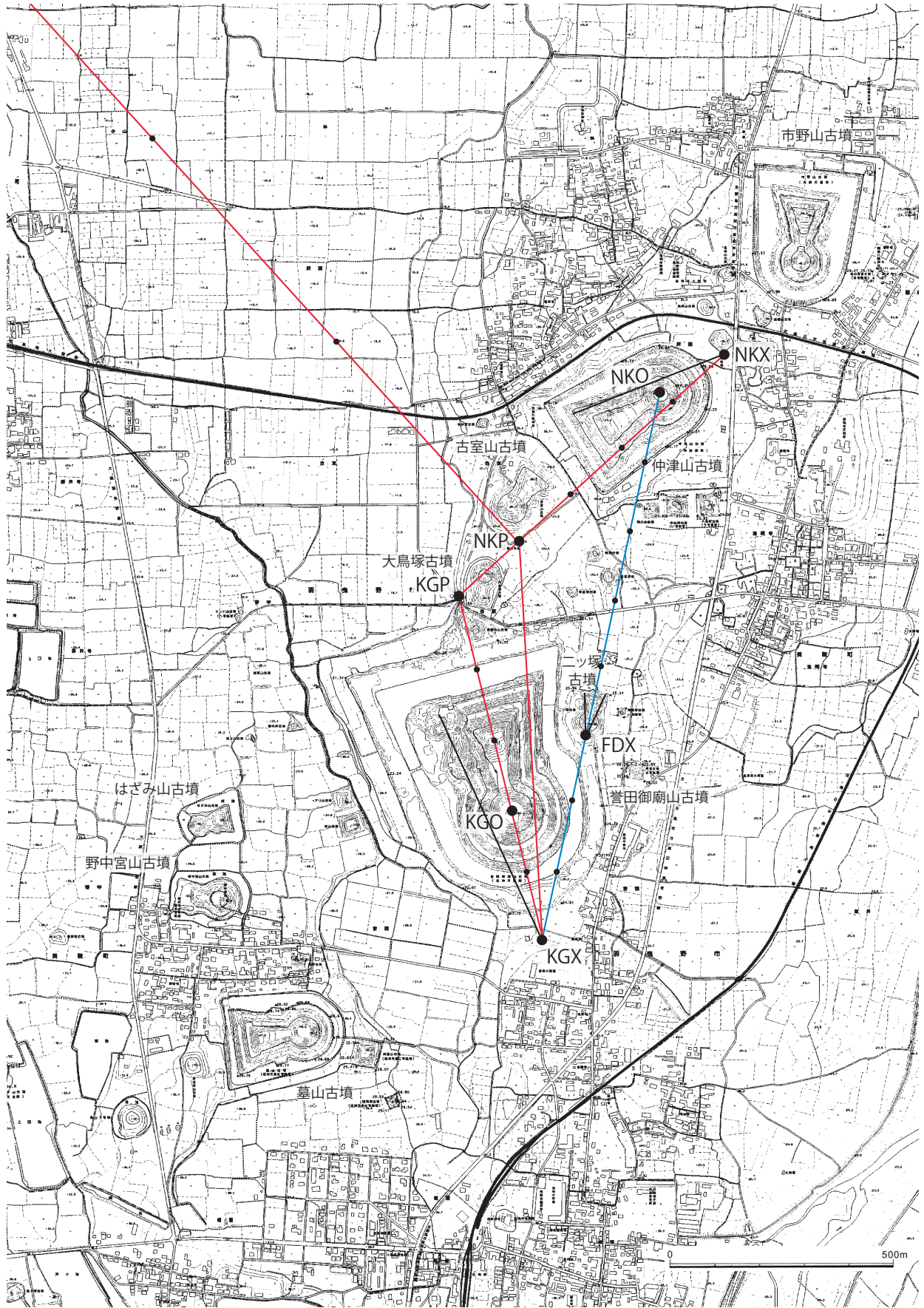


図23 仲津山古墳と誉田御廟山古墳・ニツ塚古墳の〈空間配置〉



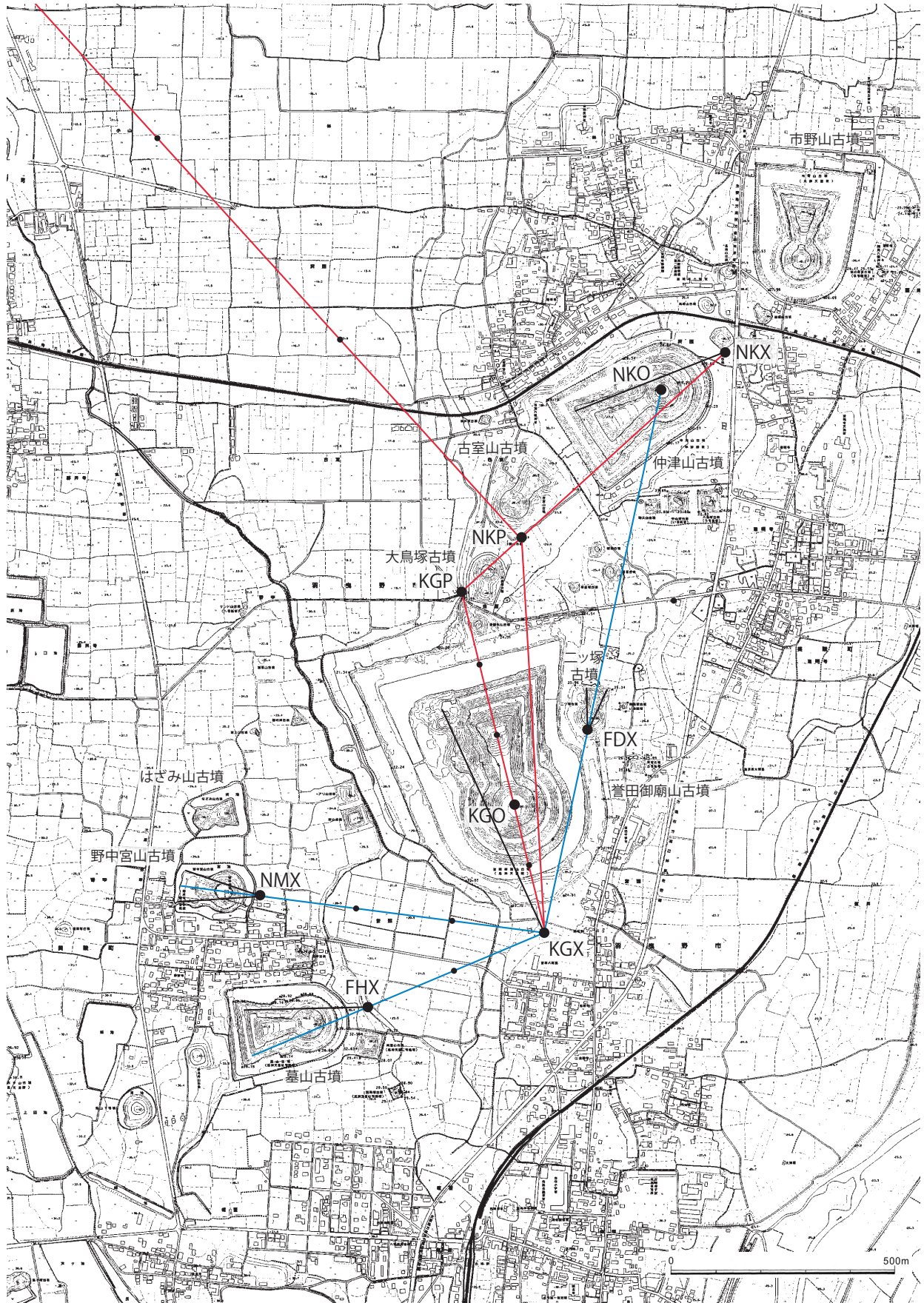


図24 菅田御廟山古墳と野中宮山古墳・古市墓山古墳の〈空間配置〉



図25 菅田御廟山古墳と市野山古墳の〈空間配置〉



図26 誉田御廟山古墳・岡ミサンザイ古墳・河内大塚古墳の〈空間配置〉



図27 古市古墳群の〈空間構制〉

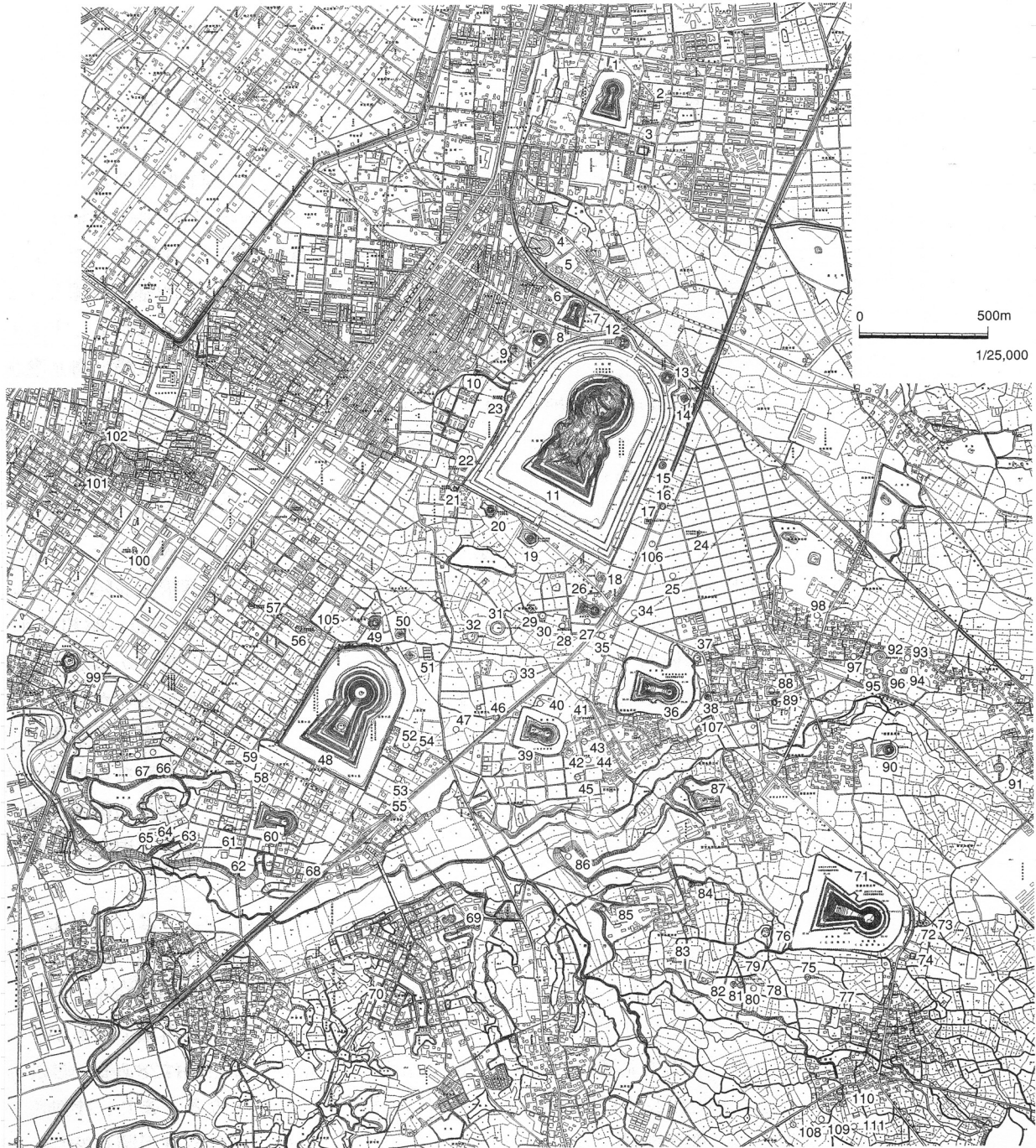


図28 百舌鳥古墳群全体図

- 1.田出井山、7.永山、8.丸保山、11.大仙陵、12.茶山、13.大安寺山、  
18.収塚、19.孫太夫山、20.竜佐山、22.銅亀山、26.長塚、36.百舌鳥御廟  
山、38.カトンボ山、39.イタスケ、48.上石津ミサンザイ、60.百舌鳥大塚  
山、71.土師ニサンザイ、89.鎮守山塚、90.定の山、99.乳岡、101.長山



図29 上石津ミサンザイ古墳と大仙陵古墳の〈空間配置〉



図30 大仙陵古墳と土師ニサンザイ古墳の〈空間配置〉



図31 上石津ミサンサイ古墳と「随伴古墳」の〈空間配置〉



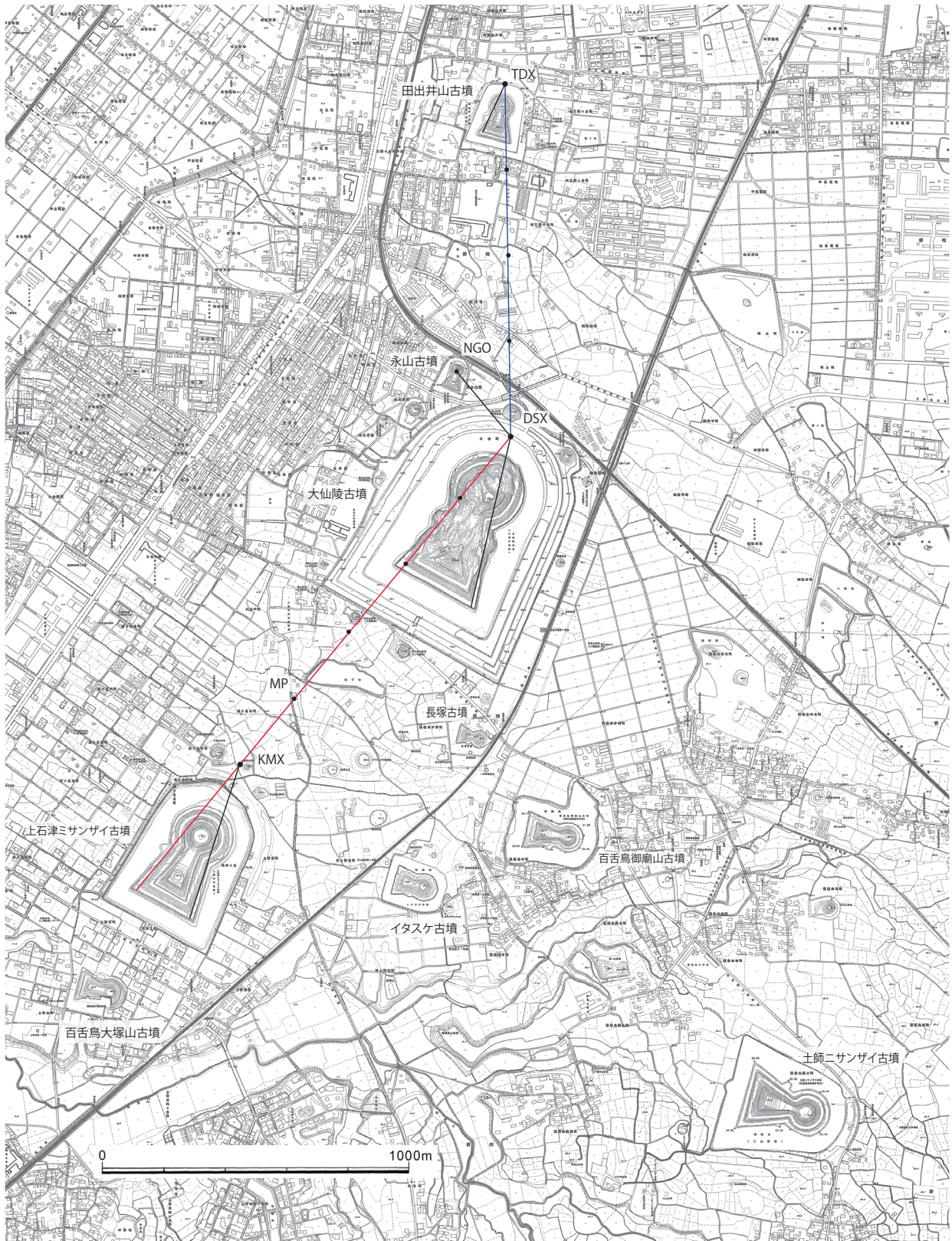


図32 大仙陵古墳と「随伴古墳」の〈空間配置〉

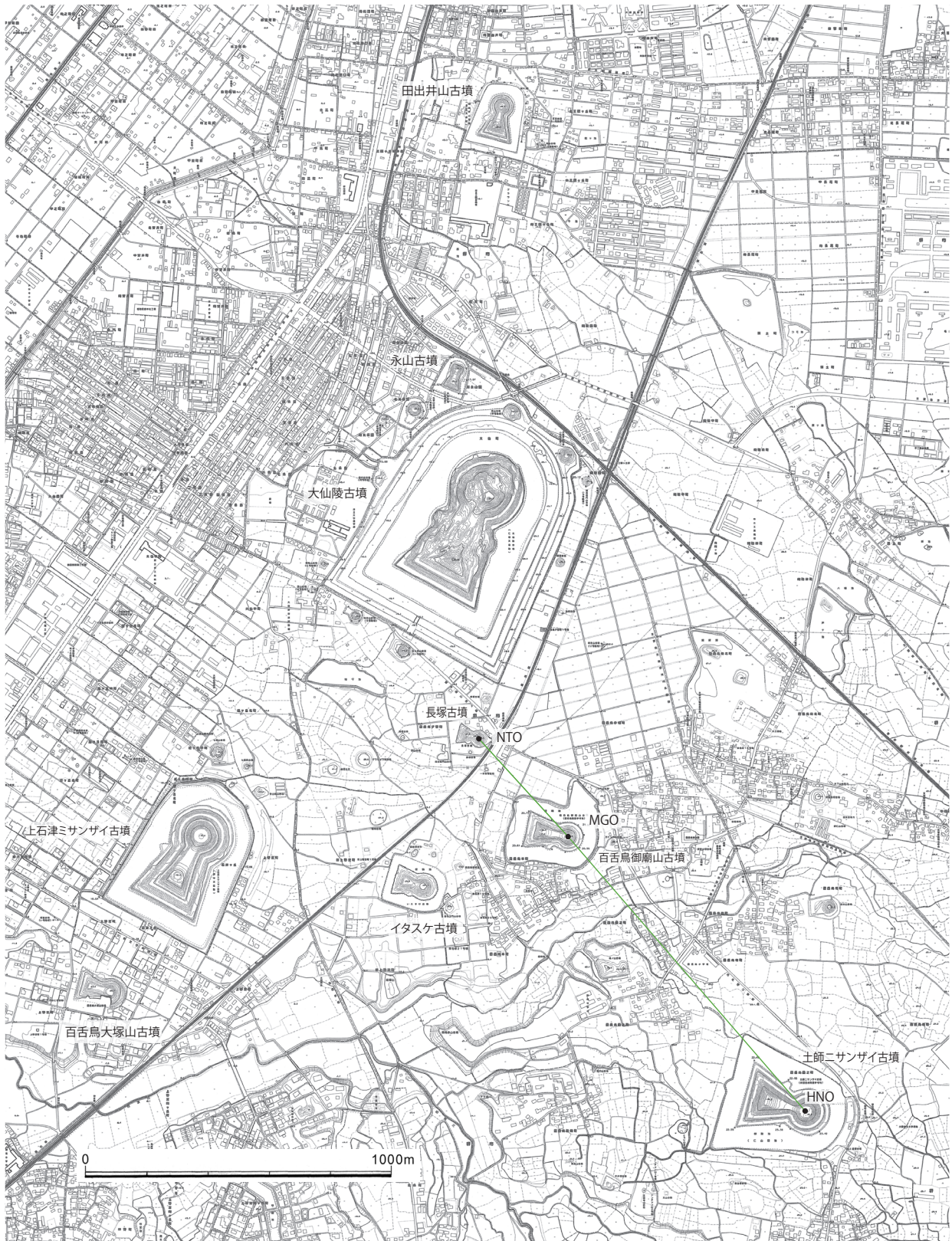


図33 土師ニサンサイ古墳・百舌鳥御廟山古墳・長塚古墳の〈空間配置〉

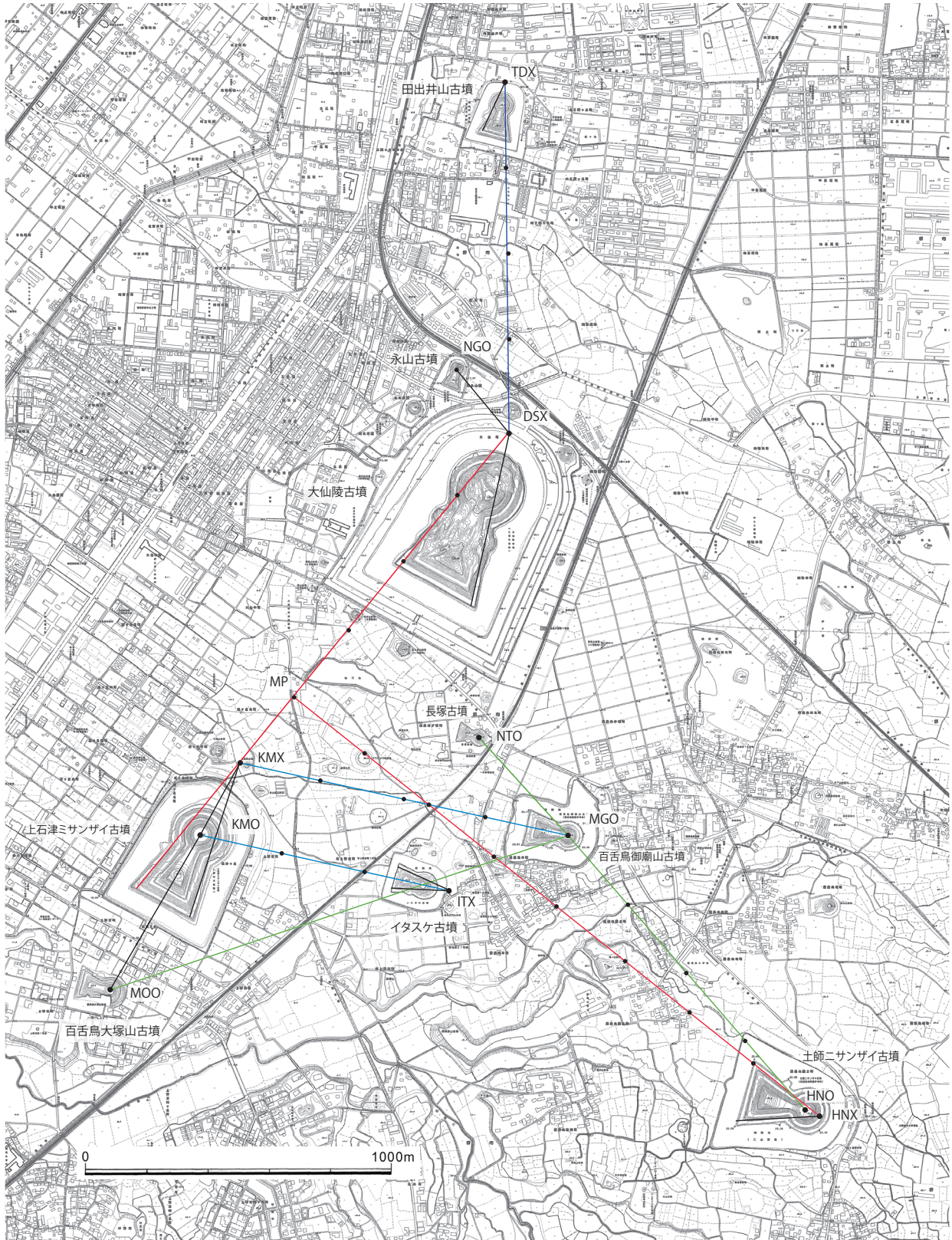


図34 百舌鳥古墳群の〈空間構制〉



図35 埼玉古墳群全体図

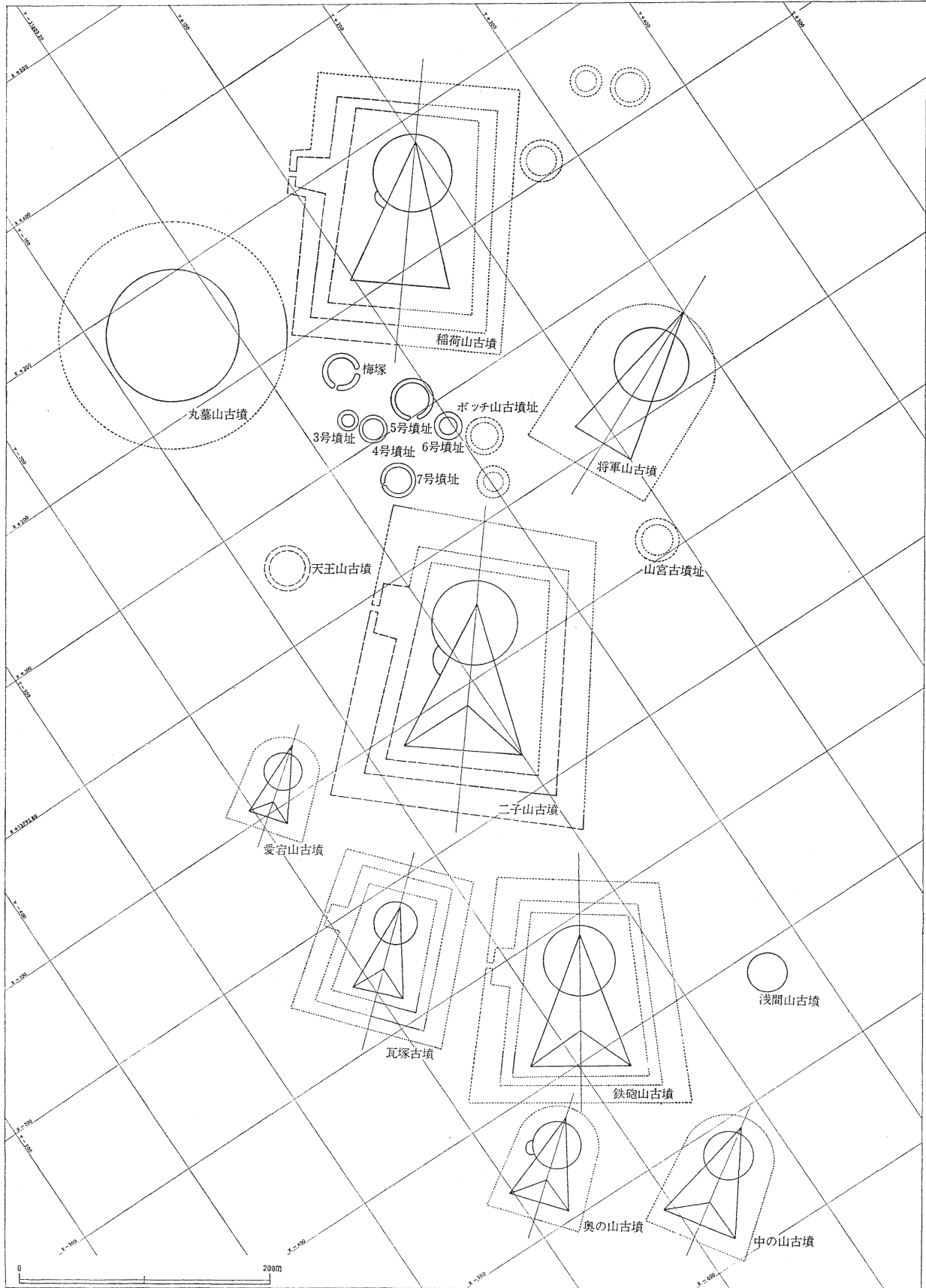


図36 埼玉古墳群全体図 [推定復原模式図]



図37 埼玉古墳群全体図 [周溝の復原図]

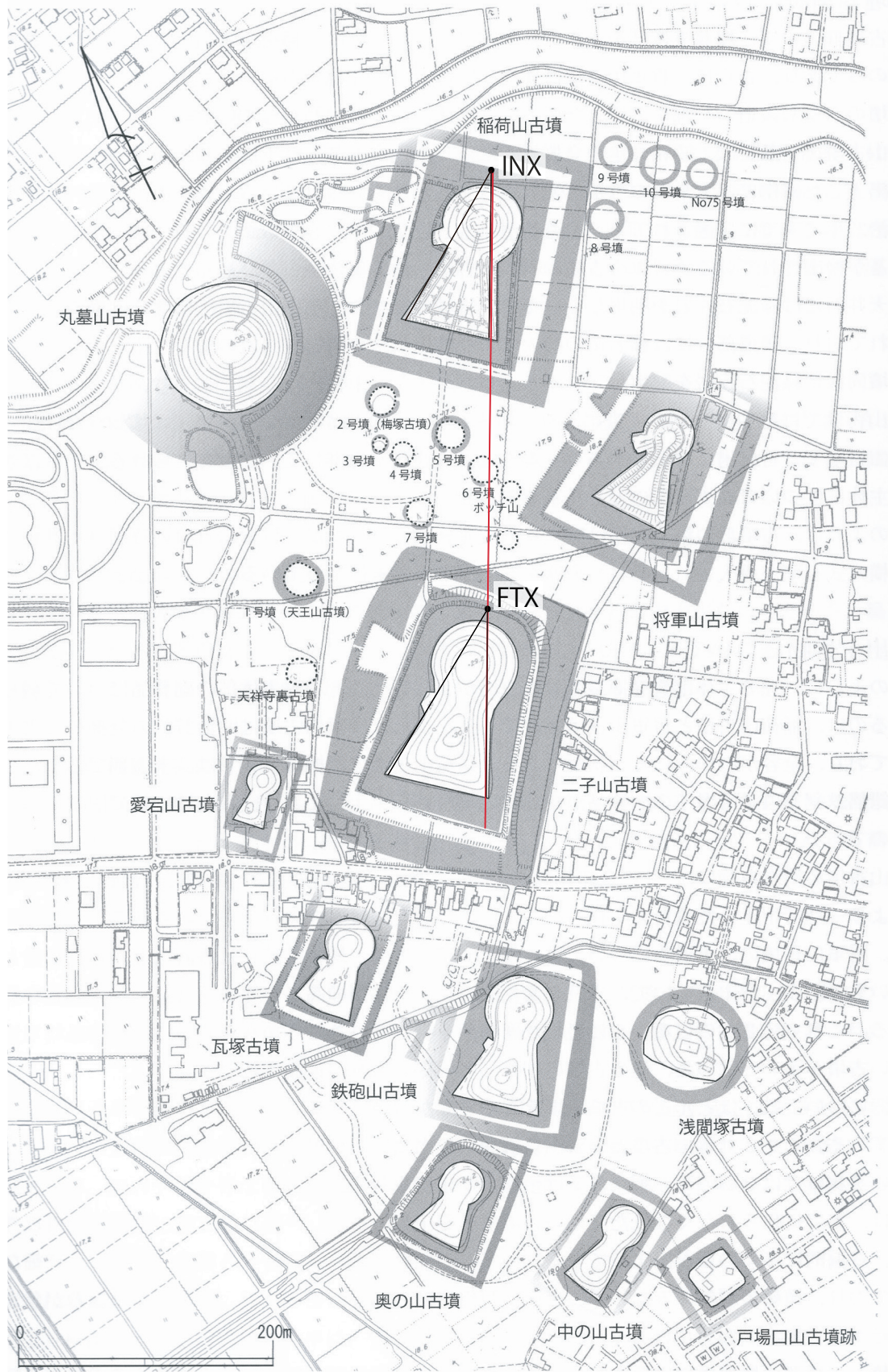


図38 稲荷山古墳と二子山古墳の〈空間配置〉

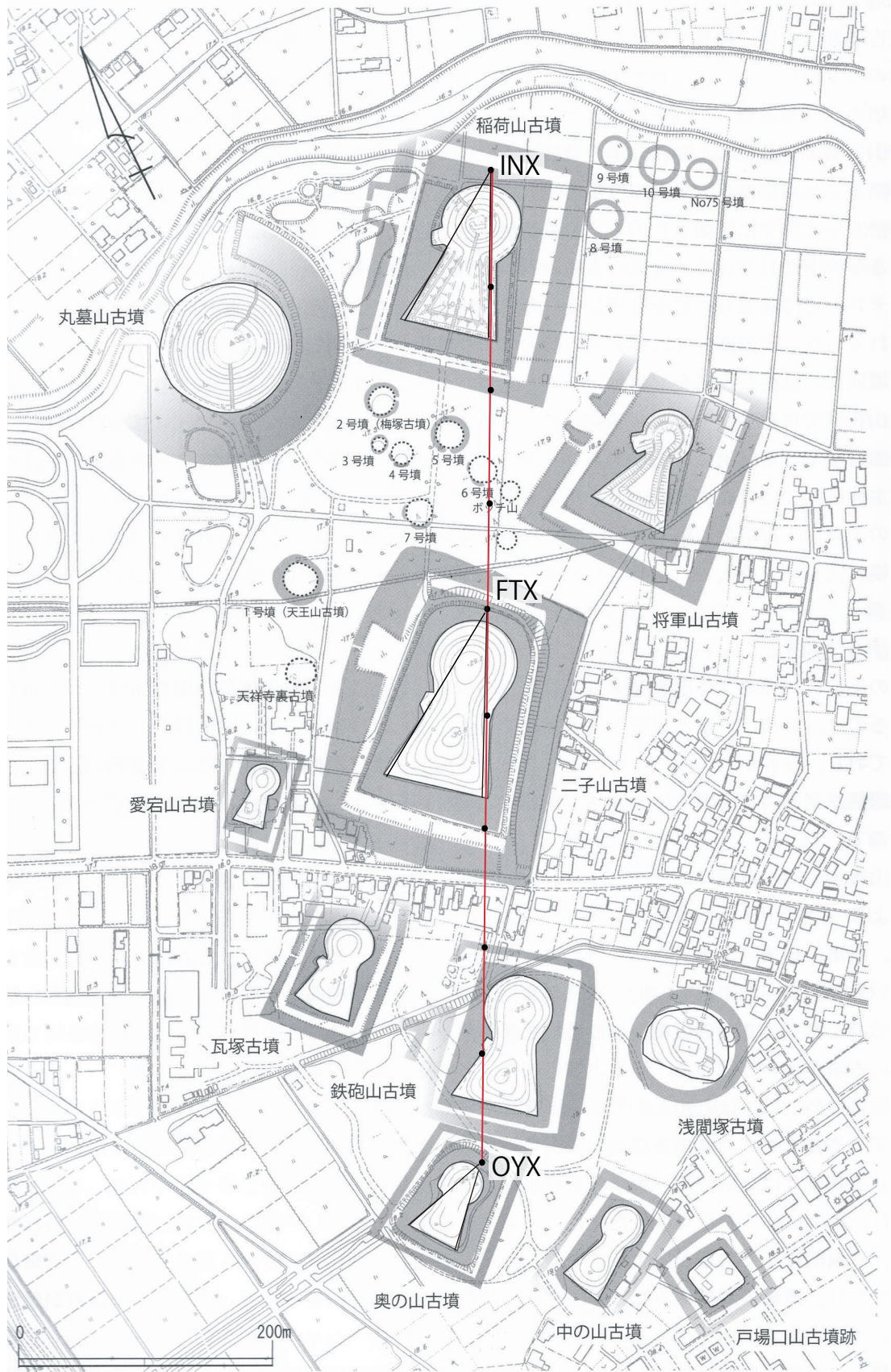


図39 稲荷山古墳・二子山古墳・奥の山古墳の〈空間配置〉



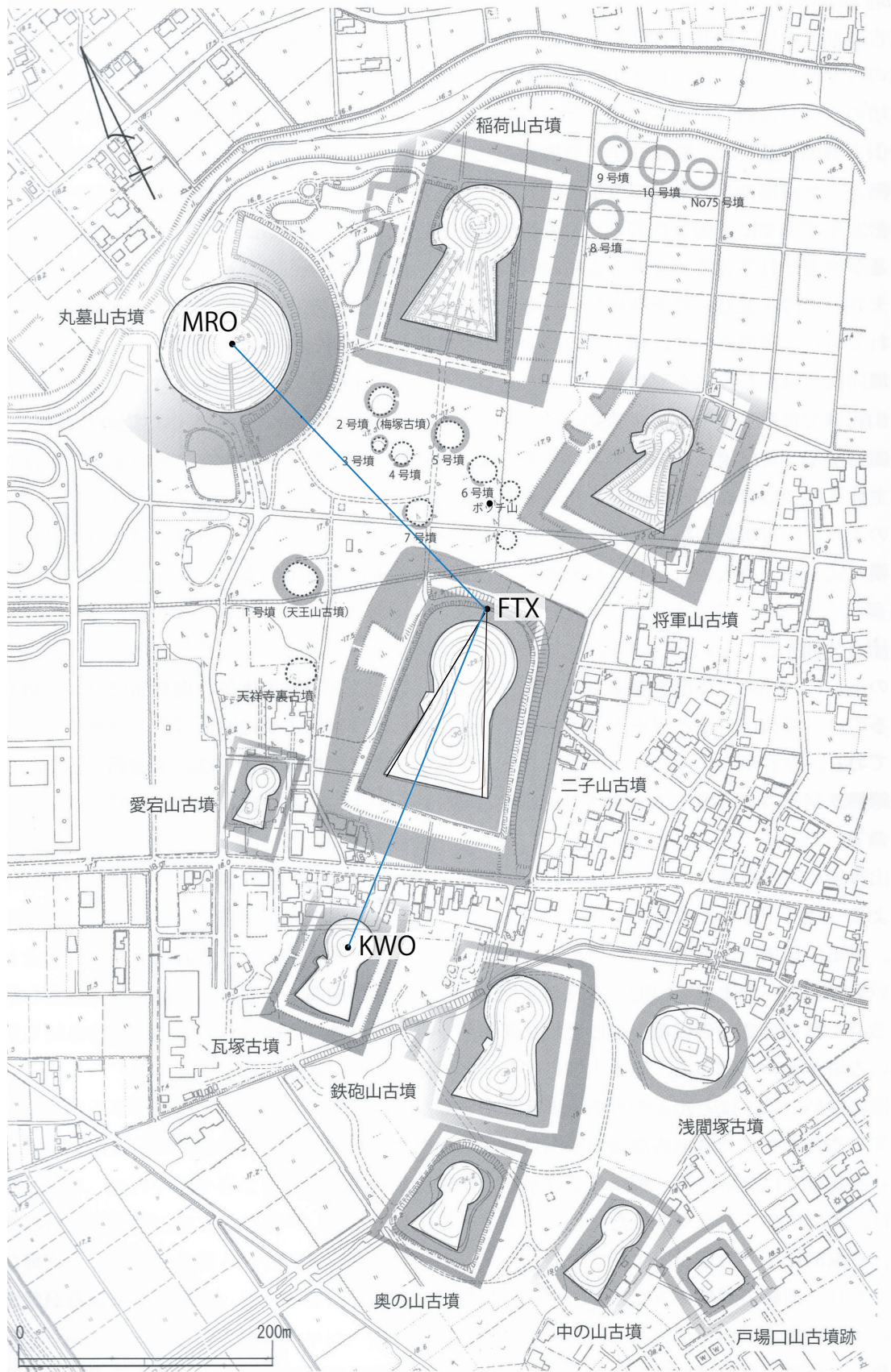


図40 二子山古墳と丸墓山古墳・瓦塚古墳の〈空間配置〉

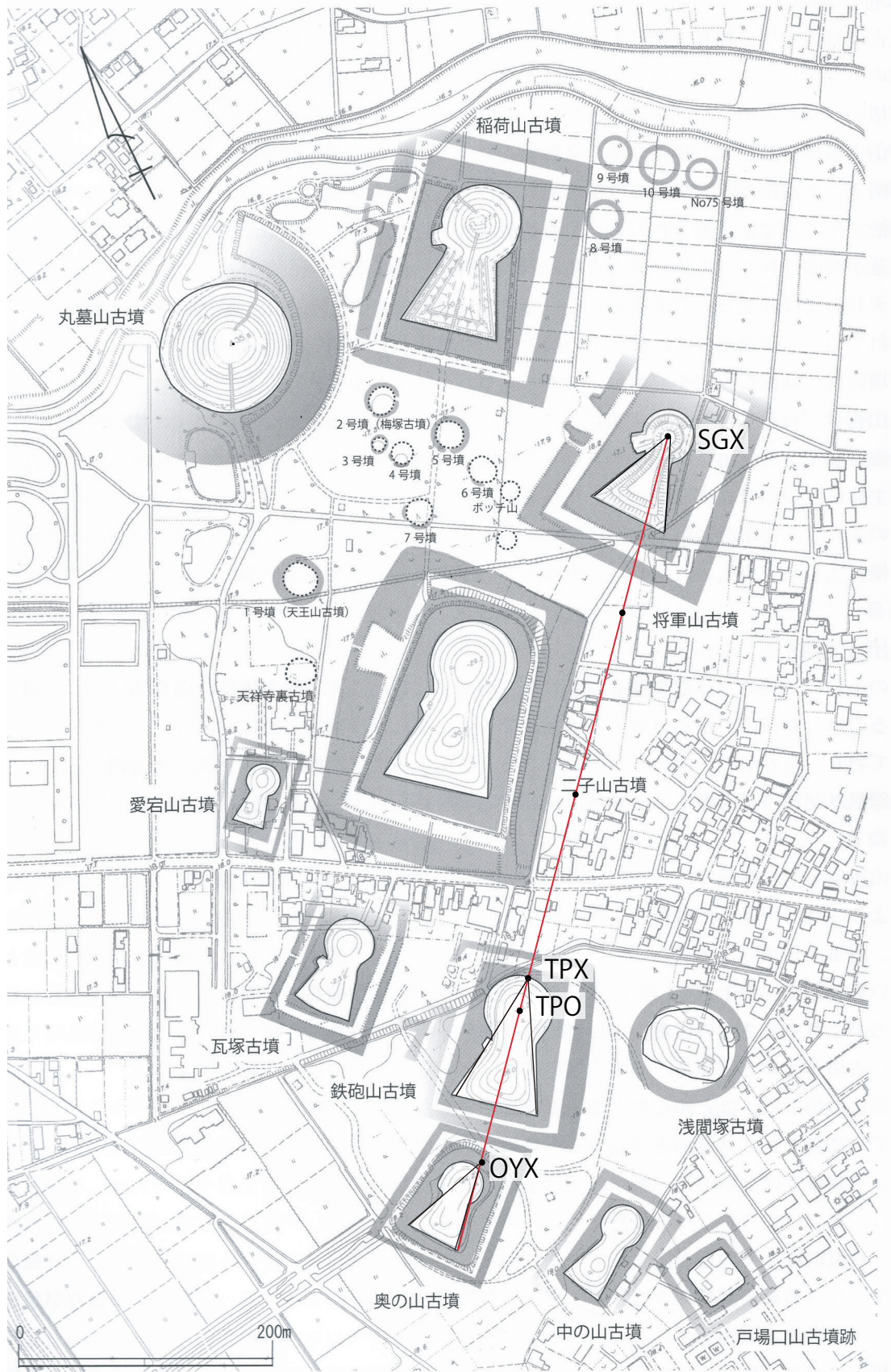


図41 奥の山古墳・將軍山古墳・鉄砲山古墳の〈空間配置〉



図42 丸墓山古墳・鉄砲山古墳・中の山古墳の〈空間配置〉



図43 瓦塚古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳の〈空間配置〉

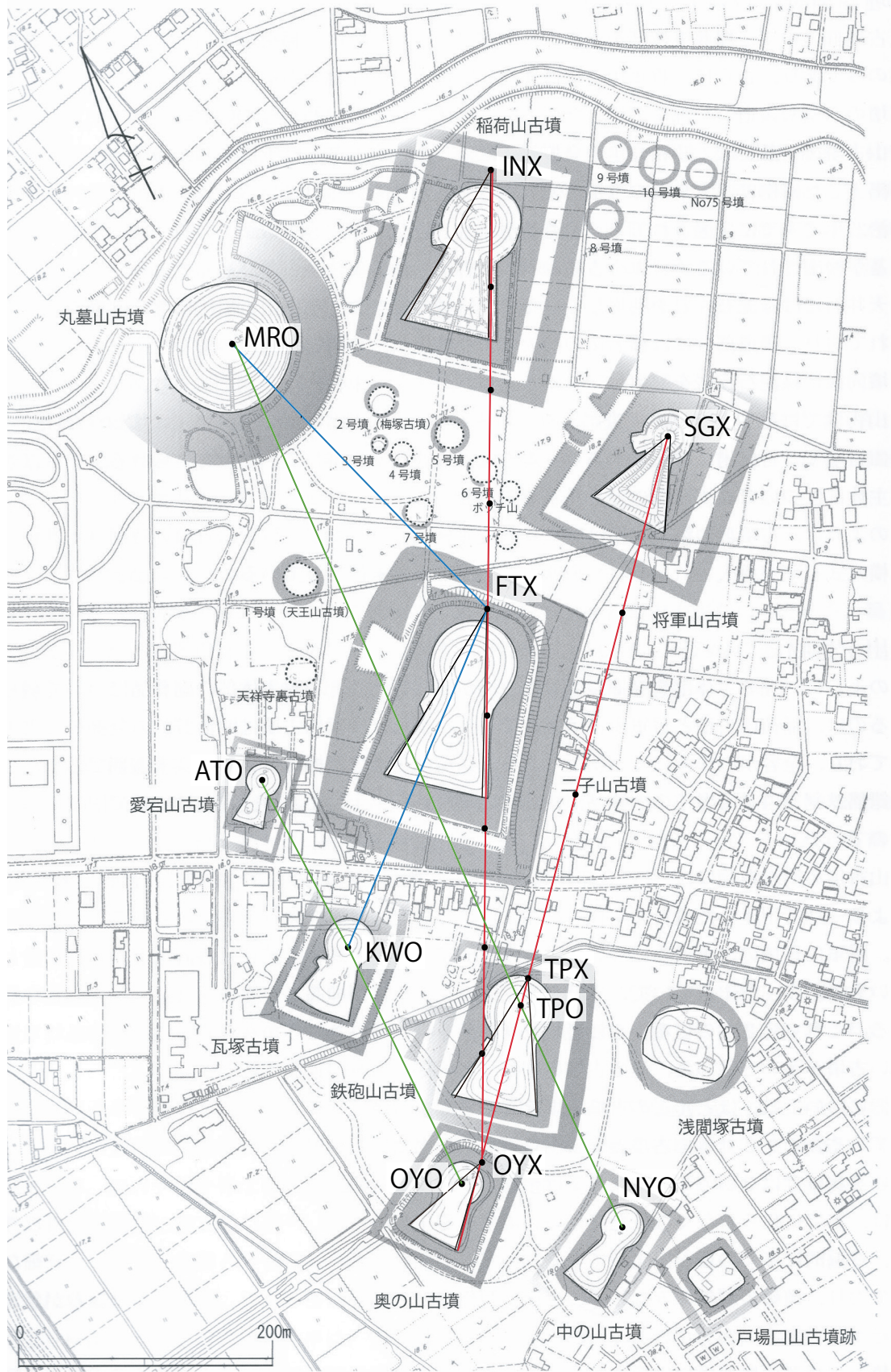


図44 埼玉古墳群の〈空間構制〉

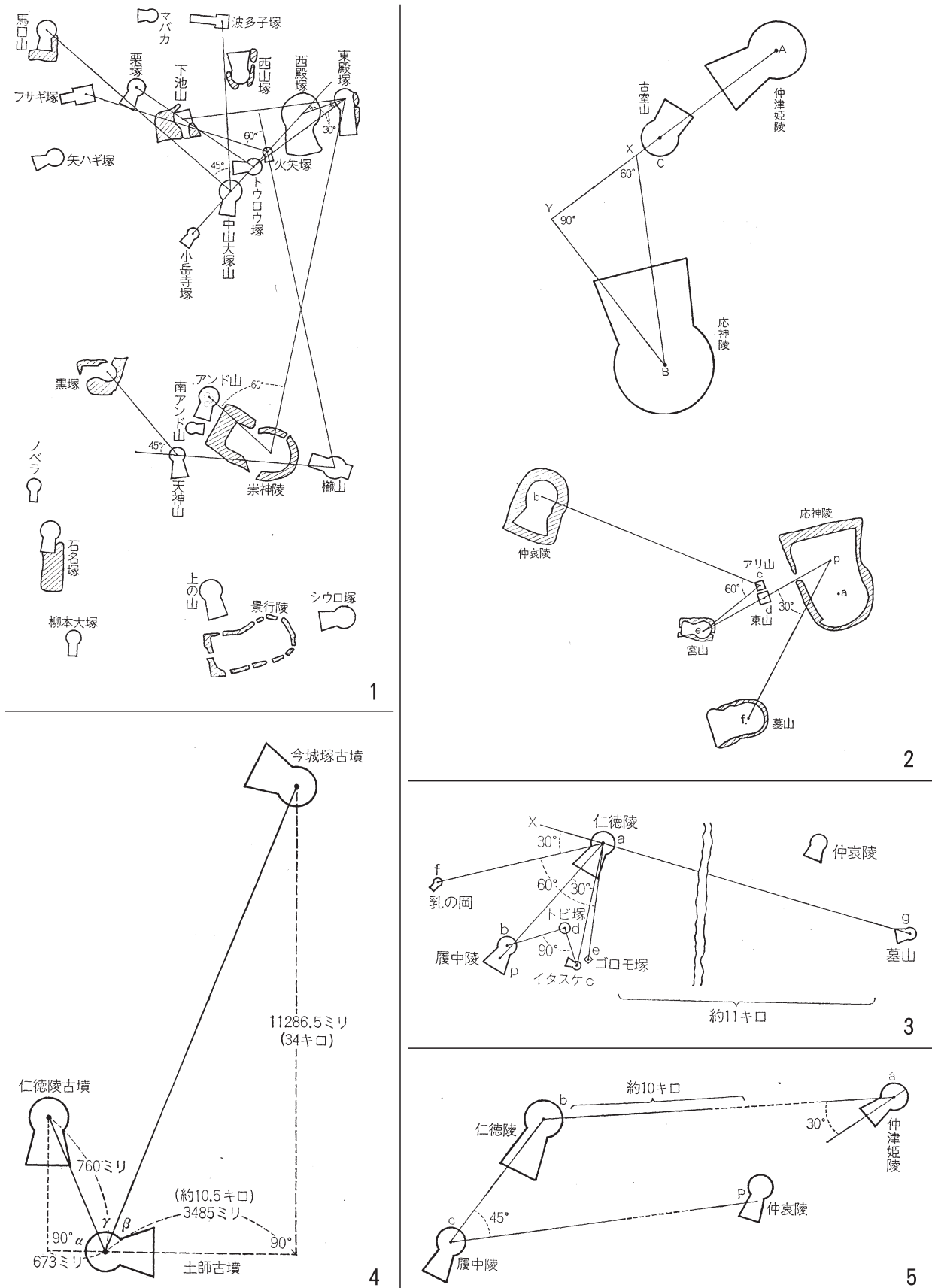


図45 原島礼二による大型前方後円墳の配置論 (同1971 b)

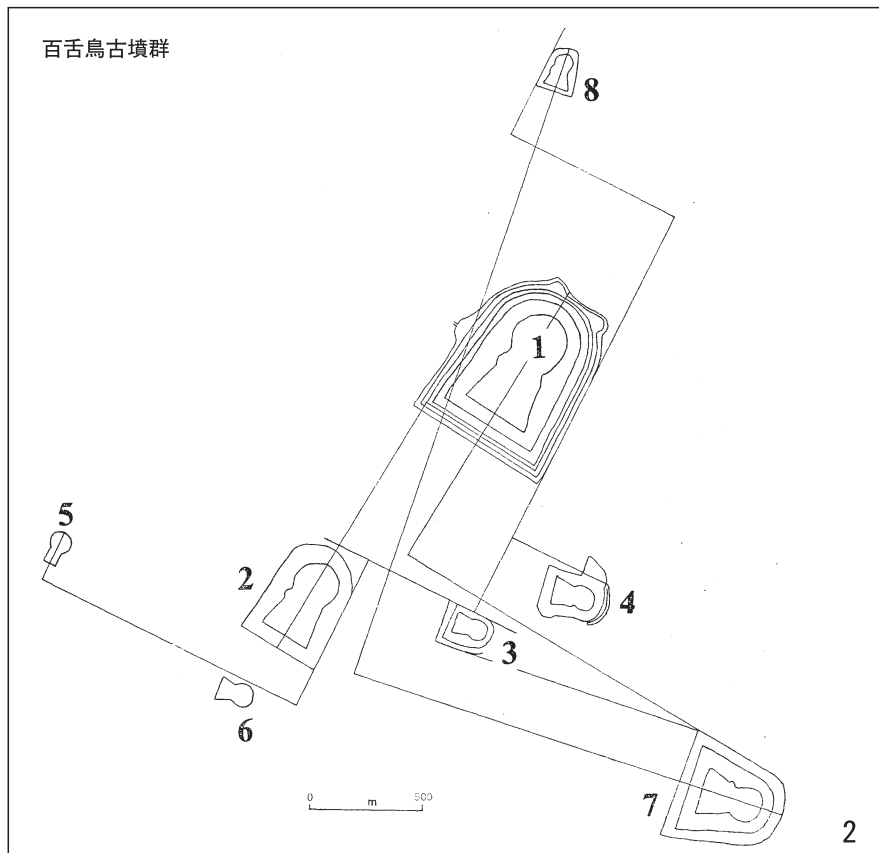
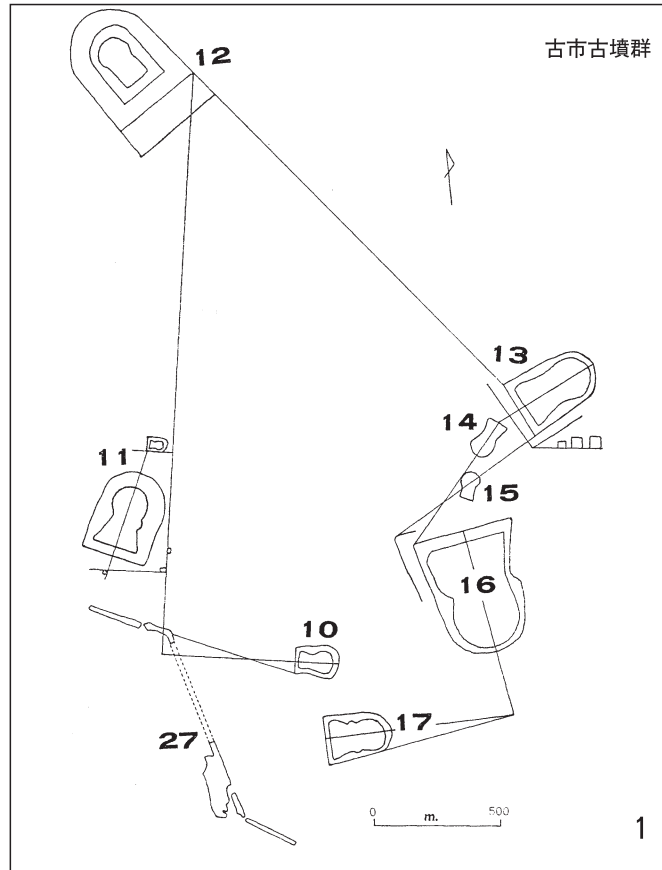
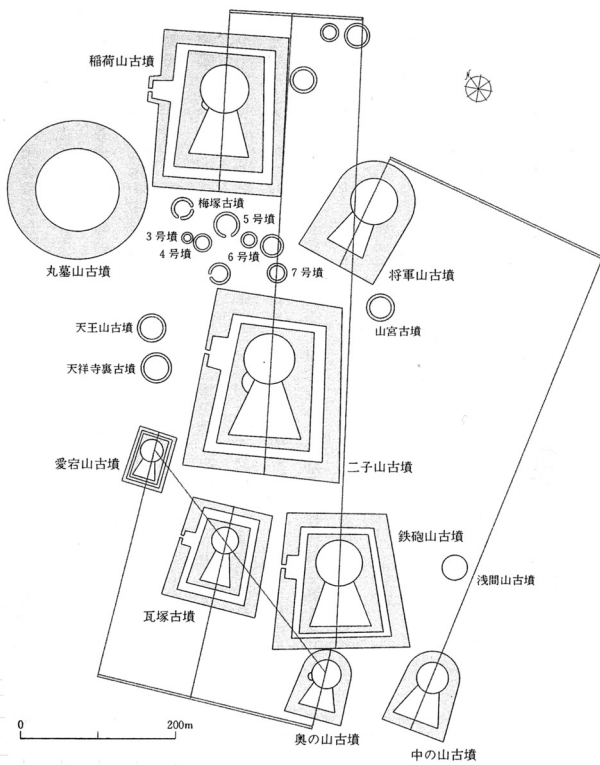
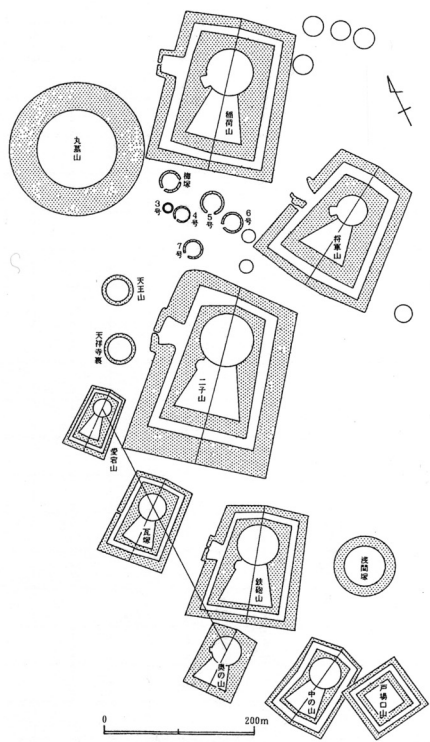


図46 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徭による大型前方後円墳の配置論 (同1971)



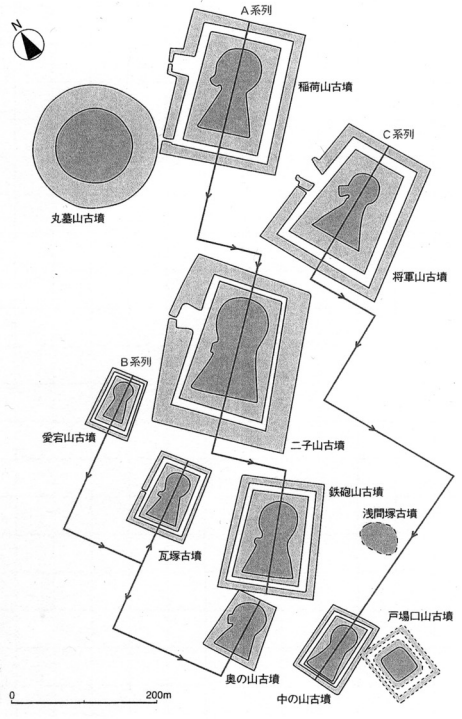
増田逸朗案 (増田1986)

1



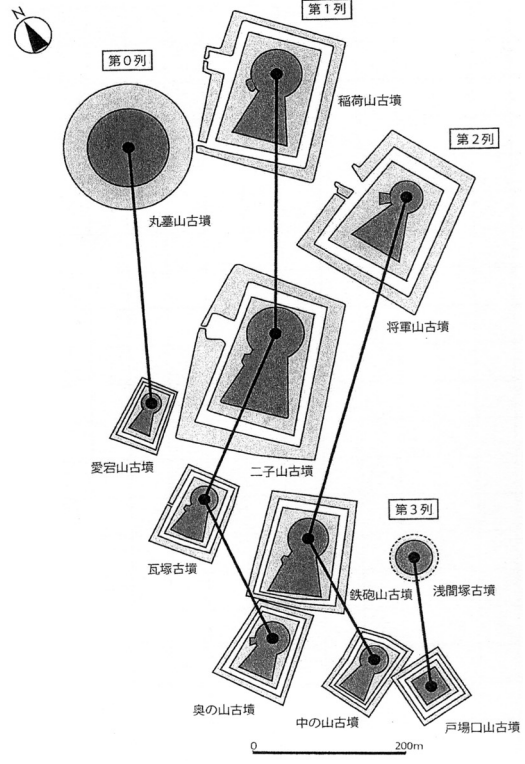
坂本和俊案 (坂本1996)

2



高橋一夫案 (高橋2005)

3



関 義則案 (関2011)

4

図47 埼玉古墳群における前方後円墳の配置論